

もり まち
森 町

ほんかやべ

本茅部1遺跡

- 北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書 -

平成 14 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



遺跡 近景



II層

IV層

IV~V層

V層

VI層

VII層



IV層
VI層

VI層

VII層

基本土層



P-2



P-3



P-7



P-7 小ビット



包含層 鉄器出土状況



P-2 出土遺物



P-3 出土遺物



包含層出土 小刀

例 言

1. 本書は北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）建設工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成14年度に実施した森町本茅部1遺跡の調査報告書である。
2. 本書の編集は、第2調査部第3調査課が行なった。執筆は、谷島由貴、中山昭大、袖岡淳子が担当し、各項目の文末に括弧で文責を示した。
3. 遺構は、現地調査においては調査員各自が実測し、各自が素図作成・事実記載を行なった。
4. 遺物は、土器を袖岡淳子、石器を中山昭大、鉄製品を谷島由貴が担当した。
5. 調査写真および室内撮影は、中山昭大が担当した。
6. 遺物・記録類は整理及び報告書作成後、森町教育委員会が保管する。
7. 調査に当たっては下記の諸機関、各氏から御指導、協力をいただいた。

北海道教育庁文化課、森町教育委員会、森町立濁川小学校、八雲町教育委員会、長万部町教育委員会、森町教育委員会：藤田 登・荻野幸男・横山英介・佐藤 稔・原 靖寿・八重樫 誠・山田あや子・渡辺明美、八雲町郷土資料館：三浦孝一・柴田信一、八雲町教育委員会：安西雅希・吉田 力、札幌国際大学：吉崎昌一・椿坂恭代、北海道教育大学函館校：厲沢好博、(財)北海道北方博物館交流協会：野村 崇、北海道開拓記念館：平川善祥・山田悟郎・右代啓視、七飯町教育委員会：石本省三、函館市教育委員会：田原良信・中村公宣・野村祐一・野辺地初雄、函館市立博物館：長谷部一弘、函館市立博物館五稜郭分館：佐藤智雄、南茅部町教育委員会：阿部千春・福田祐二・南茅部町埋蔵文化財調査団：小林 貢・輪島慎二・坪井睦美、上ノ国町教育委員会：松崎水穂・高藤邦典・松田輝哉、今金町教育委員会：寺崎康史、上磯町教育委員会：森 靖裕、木古内町教育委員会：菅野文二・木本 豊・三上英則・大谷内愛史、知内町教育委員会：高橋豊彦・松本征八、松前町教育委員会：久保 泰・前田正憲・谷岡康孝・天方直仁、乙部町教育委員会：森 広樹、伊達市教育委員会：大島直行・青野友哉、泊村教育委員会：田部 淳、岩内町教育委員会：小柳リラコ、千歳市埋蔵文化財調査センター：大谷敬三・田村俊之・豊田宏良・松田淳子、千歳サケのふるさと館：高橋 理、恵庭市教育委員会：上屋真一・松谷純一・森 秀之・佐藤幾子、札幌市教育委員会：加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二・仙庭伸久・秋山洋司・石井 淳、石狩市教育委員会：石橋孝夫・工藤義衛、江別市教育委員会：高橋正勝・野中一宏・稲垣和幸、平取町教育委員会：森岡健治・長田佳宏、苫小牧市博物館：赤石慎三、苫小牧市：宮夫靖夫・工藤肇・二階堂啓也・兵藤千秋・渡辺俊一・鈴木耕栄、富良野市教育委員会：杉浦重信・澤田 健、釧路市埋蔵文化財調査センター：石川 朗、青森県埋蔵文化財センター：成田滋彦、青森県教育委員会：神 康夫、青森市教育委員会：遠藤正夫・児玉大成・木村淳一・小野貴之、東北町教育委員会：古屋敷則雄、八戸市教育委員会：村木 淳・小保内裕之、野辺地町教育委員会：瀬川 滋・田中寿明、天間林村教育委員会：上野 司、階上町教育委員会：森 淳、六ヶ所村教育委員会：浦田一二三、岩手県鷹栖町教育委員会：佐野一絵・榎本剛治、北海道浅井学園大学：三野紀雄、群馬県埋蔵文化財調査事業団：能登 健・桜岡正信・杉山秀宏、群馬県立歴史博物館：平野進一・右島和夫・伊藤 良・松村和男・古澤勝幸

記号等の説明

- 1 本文中および図、表中では以下の記号を用い、原則として確認順に番号を付した。

P : 土壌

- 2 掲載した実測図等の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構	1 : 40	遺物出土状況	1 : 20
復原土器	1 : 3	土器拓影	1 : 3
剥片石器	1 : 2	礫石器	1 : 3
石斧および関連する石器	1 : 2	石皿・台石	1 : 4
鉄製品	1 : 2		

- 3 挿图中の遺物のシンボルマークは以下のとおりである。

	覆土出土 床面・墳底出土			覆土出土 床面・墳底出土	
土器	○	●	剥片	△	▲
剥片石器	◊	◆	礫	▽	▼
礫石器	□	■	土・石製品	☆	★

- 4 遺構図中の方位は真北を指し、細数字は標高(単位m)を表している。原則としてグリッドの基準線Mラインを横方向とし、図の上方がグリッドライン(A・B・C...)の若いものとしている。文中で方向を示す場合は、図の右側、北西方向を「八雲」側とし、図の左側、南東方向を「函館」側としている。また、図の上側、南西方向を「山」側、図の下側、北東方向を「海」側と称している。

- 5 遺構の規模については以下の要領で示した。一部破壊されているものは現存の長さを()で示した。深さは最も高い部分と最も低い部分で計測している。

確認面の長軸/下場の長軸× 確認面の短軸/下場の短軸× 最大の深さ(単位m)

- 6 土層の標記は、基本土層についてはローマ数字、遺構の覆土についてはアラビア数字で表した。土層説明には『新版標準土色帖1997年版』と『土壌調査ハンドブック 改訂版』(1997 日本ペドロロジー学会編 博友社)を参考に、土色、土性(砂土、砂壤土、壤土、シルト質壤土、埴壤土、埴土の6種)、粘着性(なし、弱、中、強の4種)、堅密度(すこぶるしょう、しょう、軟、堅、すこぶる堅、固結の6種)及び、層界の区分、礫の混入%(礫の大きさ、形状、風化の度合い)その他に分けた。
- 7 石器・土製品・石製品の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」で記している。剥片石器、礫石器は機能部にこだわらず、長軸を長さ、短軸を幅、厚さは最大値を採用した。破損しているものについては、その値を()で括弧である。

目 次

口絵	
例言	
記号等の説明	
目次	
挿図目次・表目次・図版目次	
I章 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経緯	1
4 調査概要	5
(1) 調査区の設定	5
(2) 基本土層	6
(3) 調査の方法	6
(4) 整理の方法	10
(5) 遺物の分類	10
(6) 調査結果の概要	12
II章 遺跡の位置と環境	15
1 遺跡周辺の環境	15
2 森町の遺跡	21
III章 遺構とその遺物	29
IV章 包含層の遺物	39
1 土器	39
2 石器	51
3 土・石製品	52
4 鉄製品 小刀	63
一覧表	
V章 まとめ	71
引用・参考文献	
写真図版	73
報告書抄録	

挿 図 目 次

図 I-1 遺跡の位置(1)..... 2	図IV-3 包含層出土の土器(3)..... 43
図 I-2 遺跡の位置(2)..... 3	図IV-4 包含層出土の土器(4)..... 44
図 I-3 調査区の設定..... 4	図IV-5 包含層出土の土器(5)..... 45
図 I-4 グラド表示とカマ面の土層 ... 5	図IV-6 包含層出土の土器(6)..... 46
図 I-5 土層断面..... 7	図IV-7 包含層出土の土器(7)..... 47
図 I-6 遺跡に至る道路..... 8	図IV-8 包含層出土の土器(8)..... 48
図 I-7 遺跡周辺の地形..... 9	図IV-9 包含層出土の土器(9)..... 49
図 I-8 遺構位置と最終面地形..... 13	図IV-10 包含層出土土器の分布..... 50
図 II-1 遺跡の立地..... 16	図IV-11 包含層出土の石器(1)..... 53
図 II-2 森町の遺跡(1)..... 26	図IV-12 包含層出土の石器(2)..... 54
図 II-3 森町の遺跡(2)..... 27	図IV-13 包含層出土の石器(3)..... 55
図 III-1 P-1・P-2..... 30	図IV-14 包含層出土の石器(4)..... 56
図 III-2 P-3(1)..... 32	図IV-15 包含層出土の石器(5)..... 57
図 III-3 P-3(2)..... 33	図IV-16 包含層出土の石器(6)..... 58
図 III-4 P-4・P-5..... 35	図IV-17 包含層出土の石器(7)..... 59
図 III-5 P-6..... 36	図IV-18 IV層出土石器 分布状況(1).. 60
図 III-6 P-7(1)..... 37	図IV-19 IV層出土石器 分布状況(2).. 61
図 III-7 P-7(2)..... 38	図IV-20 IV層出土石器 分布状況(3).. 62
図IV-1 包含層出土の土器(1)..... 41	図IV-21 鉄製品 小刀..... 63
図IV-2 包含層出土の土器(2)..... 42	

表 目 次

表 I-1 検出遺構一覧..... 14	表 3 遺構掲載遺物一覧(石器)..... 64
表 I-2 出土遺物総計一覧..... 14	表 4 包含層掲載土器一覧(復元土器)... 65
表 II-1 森町の遺跡一覧..... 28	表 5 包含層掲載土器一覧(拓本土器)... 67
表 1 遺構規模一覧..... 64	表 6 包含層掲載石器一覧 69
表 2 遺構掲載遺物一覧(土器)..... 64	

図 版 目 次

口絵 1 遺跡近景、基本土層	図版12 包含層出土土器(3)
口絵 2 遺構	図版13 包含層出土土器(4)
口絵 3 遺物	図版14 包含層出土土器(5)
中座 現場通動風景	図版15 包含層出土土器(6)
図版 1 調査風景、P-1 2	図版16 包含層出土土器(7)
図版 2 P-3~6	図版17 包含層出土土器(8)
図版 3 P-6	図版18 包含層出土土器(9)
図版 4 P-7	図版19 包含層出土石器(1)
図版 5 遺物出土状況	図版20 包含層出土石器(2)
図版 6 完器	図版21 包含層出土石器(3)
図版 7 遺構出土遺物(1)	図版22 包含層出土石器(4)
図版 8 遺構出土遺物(2)	図版23 包含層出土石器(5)
図版 9 包含層出土小刀	図版24 包含層出土石器(6)
図版10 包含層出土土器(1)	図版25 包含層出土石器(7)、土・石製品
図版11 包含層出土土器(2)	

I 調査の概要

1 調査要項

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団 北海道支社

受託者：財団法人 北海道埋蔵文化財センター

遺跡名：本茅部1遺跡（北海道教育委員会登録番号 B-15-23）

所在地：茅部郡森町字本茅部町274ほか

調査面積：2,200㎡

受託期間：平成14年4月2日～平成15年3月31日

2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

理事長 大澤 満（6月30日退任）

理事長 森重 権一（7月1日就任）

専務理事 宮崎 勝

常務理事 畑 宏明（6月1日就任）

総務部長 下村 久一

第2調査部 部長 西田 茂

第3調査課 課長 熊谷 仁志

主査 谷島 由貴（発掘担当者）

主任 中山 昭大（発掘担当者）

主任 袖岡 淳子（発掘担当者）

3 調査に至る経緯

北海道縦貫自動車道は七飯町を基点に室蘭・札幌市を経由し名寄市へ至る総延長488kmの自動車専用道路で通称「道央自動車道」として平成14年現在、国線I C～和寒I C間359kmが供用されている。道南における建設計画は、昭和47年に基本計画決定、平成元年に七飯～長万部間の整備計画決定、平成5年に七飯～長万部間の工事施工命令が出された。

このうち七飯～長万部間の路線内の埋蔵文化財について、日本道路公団札幌建設局（当時）から北海道教育委員会（以下、道教委と略）に事前協議がなされた。事前協議を受けた道教委は平成2年4月から所在確認調査を実施している。建設予定路線の森町内における範囲確認調査は道教委により平成7年度から実施され、平成13年度には本格化している。

森町内の埋蔵文化財発掘調査は平成13年度、日本道路公団北海道支社（以下、道路公団と略）から当センターと森町が各々受託し、当センターは濁川左岸遺跡、本内川右岸遺跡の2遺跡の発掘調査を行い、森町教育委員会は鷲ノ木4遺跡、栗ヶ丘1遺跡の2遺跡の発掘調査を実施した。平成14年度は濁川左岸遺跡、石倉1遺跡、本茅部1遺跡、倉知川右岸遺跡、森川3遺跡の5遺跡の調査を当センターが受託して行い、鷲ノ木4遺跡、栗ヶ丘1遺跡、森川2遺跡の3遺跡は森町教育委員会によって調査を実施した。調査を行った遺跡は森町内の計画路線内で計9遺跡である。

森町内では試掘調査が引き続き行われていることや、これまでの試掘調査の結果から、事前発掘調査の件数は今後増えることが予想される。

本茅部1遺跡は平成2年に所在確認調査が行われ、新たに発見された。平成8年と平成13年4月に

本茅部1遺跡

範囲確認調査が行われ、3,250㎡について発掘調査が必要とされた。

平成13年6月に埋蔵文化財包蔵地の周知資料の整備により、北海道教育委員会登載番号B-15-23として本茅部1遺跡は登載された。

道路公団と道教委の協議の結果、工事計画の変更が不可能なため発掘調査が必要となった。

発掘調査を受託した当センターは道路公団との打ち合わせを行い、平成14年5月から7月に発掘調査を行った。

当初の調査計画の調査面積は2,330㎡であった。しかし、調査範囲と調査対象の変更により、最終調査面積は2,200㎡となった。

発掘調査の終了した平成14年8月から江別市にある当センターの整理作業所で、土器の復元など整理作業を開始した。

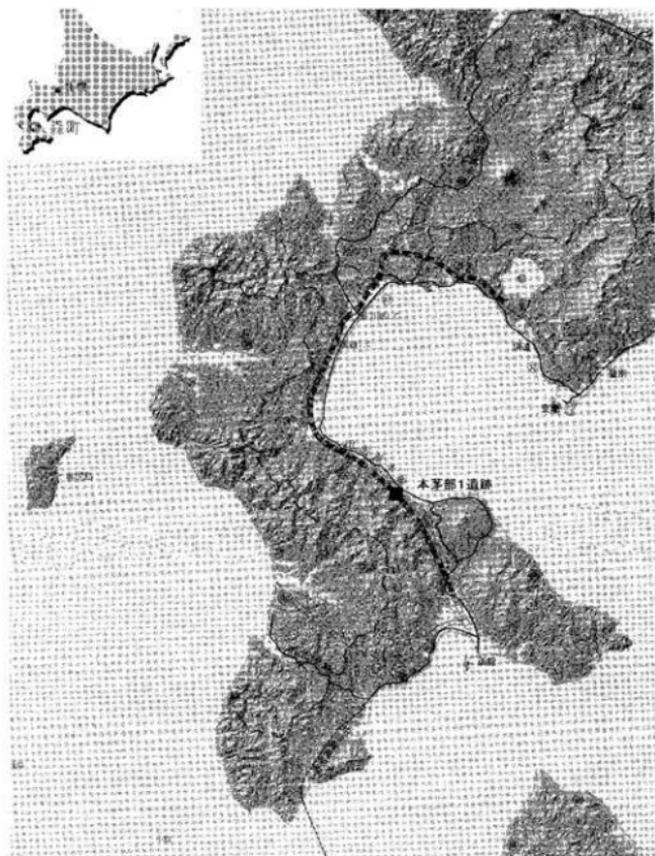
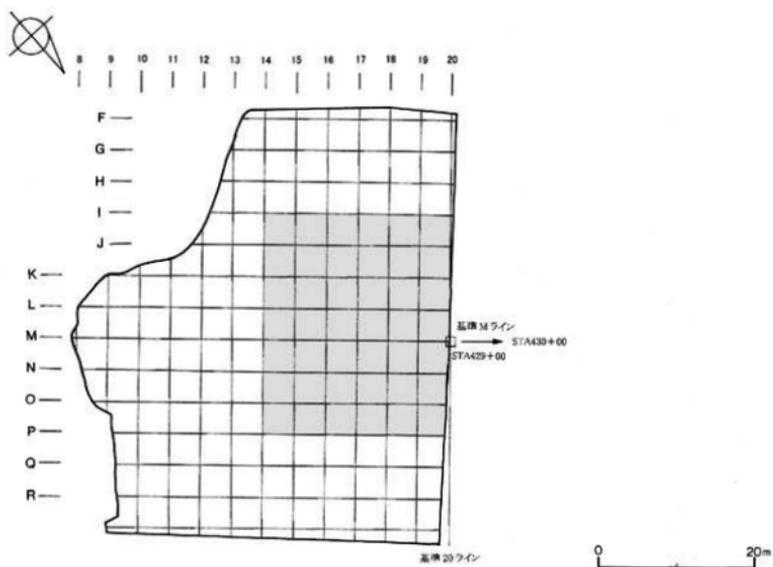
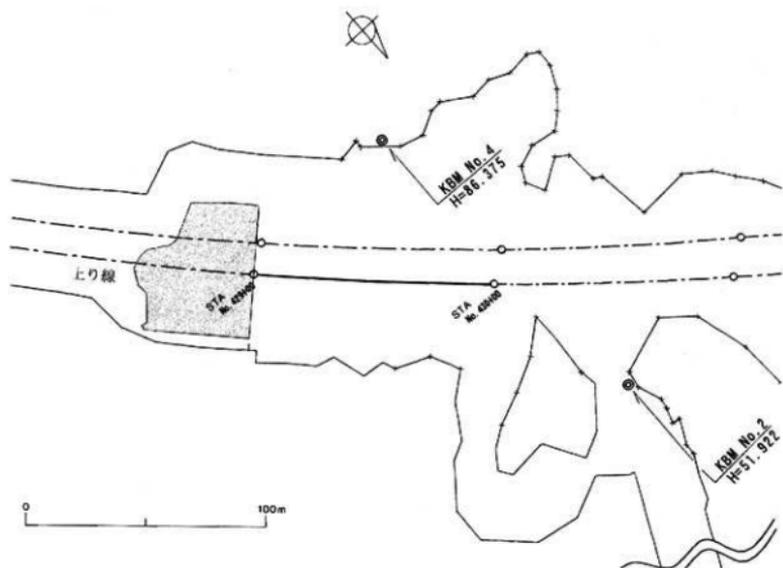


図1-1 遺跡の位置(1)



図1-2 遺跡の位置(2)



4 調査概要

(1) 調査区の設定

調査区の設定にあたって、北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）地蔵川橋工事（日本道路公団北海道支社函館工事事務所）縮尺1000分の1を使用した。工事予定上り線の中央線上の中心杭成果から、STA 4 2 9 + 0 0 と STA 4 3 0 + 0 0 を結び、これを延長して基準のMライン（図 I - 3）とした。Mラインから平行に南西へ向かって 4 m 毎に L、K…とアルファベットを廻り、同様にMラインの北東へ N、O…とした。STA 429+00を基準としMラインと直交する線を20ラインとし 4 m 毎に南西へ向かって 19、18…、北東へ 21、22…とし、それぞれ交差する地点に杭を打設した。調査区はこの 4 m 方眼を基本とし、その南側の交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称される。例として図 I - 4 左の方眼图中的の J - 15、K - 16、L - 17、M - 18、N - 19 を表示した。

Mラインは真北に対し $N-46^{\circ} 50' - E$ である。

基準杭の座標は平面直角座標系第 X I 系と緯度、経度は以下のとおりである。

STA 4 2 9 + 0 0 （調査区杭番号 M-20）

日本測地系（改正前） X = -206, 807, 735 Y = 20, 803, 368

世界測地系（測地成果2000） X = -206, 551, 330 Y = 20, 510, 209

北緯 $42^{\circ} 08' 25.0777$ 東経 $140^{\circ} 29' 53.2555$

STA 4 3 0 + 0 0 （調査区杭番号 M-45）

日本測地系（改正前） X = -206, 739, 1432 Y = 20, 730, 6252

水準測量は日本道路公団で設置した KBM NO. 4 を用いて、各測量に使用した。

KBM NO. 4 H = 86.375

（谷島）

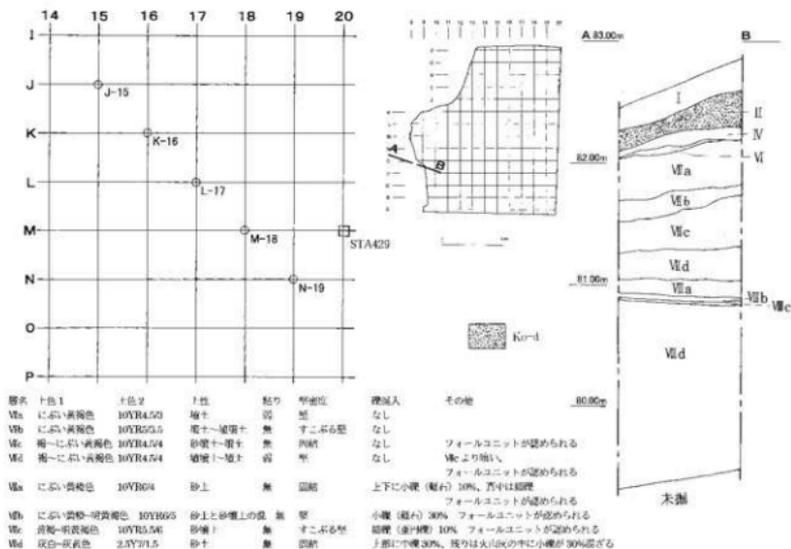


図 I - 4 グリッド表示とカット面の土層

(2) 基本土層

基本土層は以下のとおりである(図 I-5)。これは調査区海側の土層断面である。また、Ⅶ層以下については崖側カット面の柱状図(図 I-4 右側)を示した。

I層: 表土。層厚0.2m。

II層: 駒ヶ岳火山灰 d 層 (Ko-d)、層厚0.8~1.0m。1640年の駒ヶ岳起源の降下火山灰である。

III層: 黒褐色土。層厚5~10cm。

IV層: 黒色土。層厚0.2~0.3m。

白頭山苦小牧火山灰 (B-Tm): IV層上位に夾在、層厚1~3cm。約1000年前に朝鮮半島白頭山起源の降下火山灰。

IV~V層: 黒色土に下位の砂粒が混じる。層厚5~10cm。

V層: 駒ヶ岳火山灰 g 層 (Ko-g)。層厚0.25~0.3m。約6,000年前の駒ヶ岳起源の降下火山灰で砂粒状である。

VI層: 漸移層。層厚1~3cm。

Ⅶ層: 褐~にぶい黄褐色、層厚1.1~1.3m。約12,000年前の濁川カルデラ (Ng) 起源の降下火山灰で上部はローム質化している。下半にフォールユニットが認められる。

Ⅷ層: にぶい黄褐色~明黄褐色、層厚1.5m以上。約12,000年前の濁川カルデラ (Ng) 起源の火砕流堆積物で上部に細礫が多い。また、上半にフォールユニットが認められる。

これらⅦ層・Ⅷ層の濁川カルデラ起源のテフラ (Ng) を総称して「石倉層」と呼称されている。本遺跡では下底まで確かめることが出来ず層厚は不明である。海岸線に近い石倉の露頭では上記Ⅶ・Ⅷ層に相当する堆積物が層厚6メートルに達している。

遺物の包含層はⅢ・Ⅳ・Ⅵ層である。

駒ヶ岳火山灰 d 層 (Ko-d) ~ 苦小牧白頭山火山灰 (B-Tm) の間のⅢ・Ⅳ層は縄文時代を含め、中・近世の遺物包含層である。鉄製品が出土している。

白頭山苦小牧火山灰 (B-Tm) ~ 駒ヶ岳火山灰 g 層 (Ko-g) の間のⅥ層は縄文時代を含め統縄文時代・縄文時代晩~前期に下る、遺物包含層である。

駒ヶ岳火山灰 h 層 (Ko-h 約17,000年前) を挟み、Ⅵ層は縄文時代早期の文化層で、少量の遺物を検出した。それより下位に旧石器時代の文化層が存在する可能性があるが、Ⅶ・Ⅷ層が厚いため確認は行えなかった。発掘調査の最終面はⅦ層の上面または上位である。(谷島)

(3) 調査の方法

調査区は4m方眼を基本とし、これに、アルファベットと数字を組み合わせた呼称を用いた。

調査は表土とⅡ層 (Ko-d) を重機で除去した後、包含層の調査を実施した。

始めに25%調査を人力で行った。その結果、沢に面した崖側に遺物の分布が多くみられた。山側1/3は調査の都合上後にした。

崖の先端部分は土砂の流出を防ぐため帯状に残し、平坦面が終了した後に先端部分の調査を行った。風倒木痕が多く、土壌の堆積状況に攪乱がみられたが、遺物確認のため風倒木痕の黒色土は掘り抜いている。

Ⅲ・Ⅵ層については移植ゴテを使用し、遺構・遺物の検出に努めた。Ⅴ・Ⅵ層はスコップ、ジョレン、移植ゴテを併用した遺構・遺物確認の調査を行った。

遺構の調査は、確認された時点で半截ないし平面形の中央に土層観察用の土手を設定し掘り下げた。

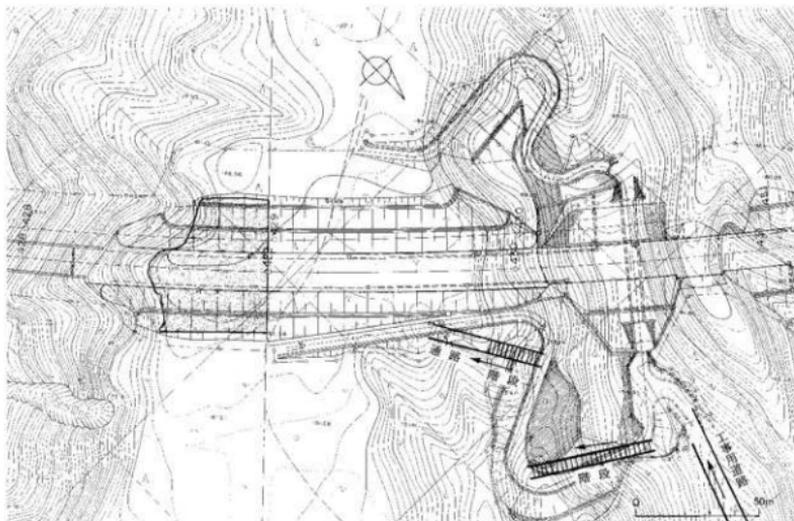


図1-6 遺跡に至る通路

掘り下げに伴い、遺構の形態や特徴・遺物の出土状況などを記録した。

写真は6×7版・35mmフィルムのリバーサル・ネガカラー・黑白フィルムを使用した。

遺物の取り上げは、Ⅲ層からⅥ層の包含層について調査区、層位、日付をビニール袋に明記して取り上げた。遺構の遺物は基本的に図に位置を記録しながら取り上げている。

遺物の整理は、水を少量しか運び込めないため現地で行えなかった。本茅部1遺跡の現地調査を終了した後、森川3遺跡の調査事務所で遺物の整理を実施した。

調査方法のあらまはは以上の様である。調査の実施にあたって、プレハブを部材に分けたものとトイレをクローラードンプによって調査区の傍に運び込み、器材収納を兼ねた休憩所とした。濁川左岸遺跡を本拠として、ここから本茅部1遺跡に通った。調査に従事した作業員と調査員はバスと連絡車に分乗し標高20mの工事用道路入口から比高60mの仮設階段を登って調査区に到着した。カルバートボックスの工事が行われていたため、通路は図1-6を通行した。飲料水と雑用水は同じルートを通り20ℓ入りポリタンク2缶を毎日運び込んだ。(谷島)

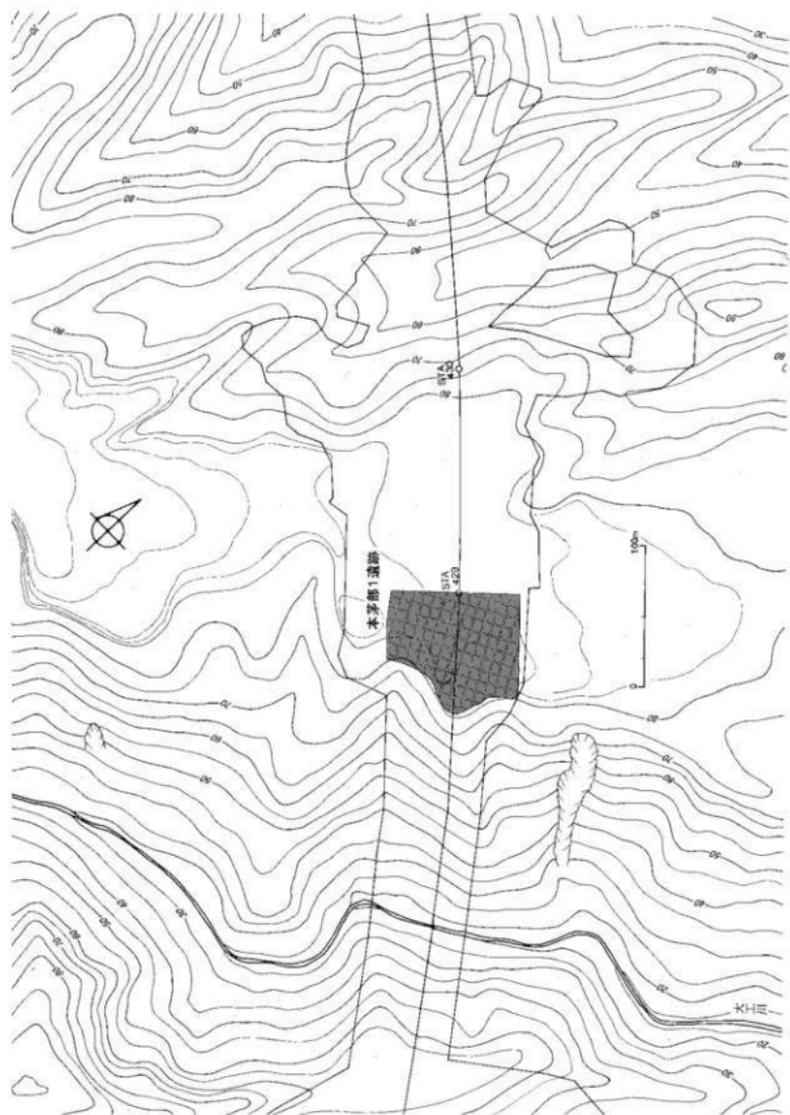


図 1-7 遺跡周辺の地形

(4) 整理の方法

現地では一次整理を行える環境が整わなかったため、引き続き調査を行った森川3遺跡で遺物の水洗、分類、遺物カードの作成、台帳記入、注記作業を行った。遺物の注記は以下のように行った。

遺構の遺物

本茅部1遺跡	遺構名	層位	遺物番号
HK1.	P2.	フク土.	2

包含層の遺物

本茅部1遺跡	グリット	層位	遺物番号
HK1.	J13.	IV.	5

台帳は後の作業簡略化のためパソコンを用いた。一次整理を終えた遺物は遺構毎と、包含層は分類、グリット別に分けコンテナに収納し江別へ搬送した。8月から土器、石器の接合を中心とする二次整理を一部開始し、11月から本格的に二次整理作業を行った。土器の接合、復元作業では同一個体の破片の把握に努めた。また土器・石器の分類の見直し、台帳補正、報告書掲載遺物の抽出、各種集計、記録類の整理、遺物の実測・写真撮影等、報告書作成のための作業を行った。

二次整理作業を終えた遺物は報告書掲載遺物と未掲載遺物に分けコンテナに収納した。

(5) 遺物の分類

(a) 土器

今回の調査で出土した土器は縄文時代のものに限られる。縄文時代前期、中期、晩期のものが出土している。縄文時代のものをⅠ～Ⅴ群に分けた。Ⅰ群を縄文時代早期、Ⅱ群を縄文時代前期、Ⅲ群を縄文時代中期、Ⅳ群を縄文時代後期、Ⅴ群を縄文時代晩期とした。

Ⅰ群 縄文時代早期に属する土器群 今回の調査では出土していない。

Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器群

a類 縄文尖底土器群に相当するもの 今回の調査では出土していない。

b類 円筒土器下層式に相当するもの

Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群

a類 円筒土器上層式a～c式、サイベⅥ式、見晴町式に相当するもの

b類 覆林式、大安在B式、ノダツⅡ式、煉瓦台式に相当するもの 今回の調査では出土していない。

Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群 今回の調査では出土していない。

Ⅴ群 縄文晩期に属する土器群

大洞C1式、大洞C2式に相当するもの (袖岡)

(b) 石器

石器は、剥片石器類、礫石器類に大別し、形態ごとに分類した。分類の原則と区分を以下に示す。なお、礫石器に多くある、機能が複合している場合は使用痕の多寡により一方の機能にまとめている。

剥片石器類

石鏃 両面調整され、尖頭形のもの。

有茎のもの

石錐 端部に突出部の有るもの。

つまみ付ナイフ 端部につまみが作り出され、刃部が側縁、端部に連続して作り出されたもの。

両面調整のもの

片面調整のもの

両縁調整のもの

横形のもの

スクレイパー 急斜度の刃部が側縁に連続して作り出されたもの。

片面調整のもの

両縁調整のもの

片縁調整のもの

下部に刃部を持つもの

フレイク・チップ 石核・石器から剝離された不定形剝片。5mm未満のものをチップとした。

Rフレイクー二次加工のあるもの

Uフレイクー使用による刃こぼれのあるもの

二次加工のないもの—安山岩製のものは礫片とした

石核 石器の素材となりえる剝片を剝離した痕跡が複数あるもの。

礫石器類

石斧 打欠き・敲打・研磨により成形され、一端に刃部を作り出したもの。

たたき石 敲打痕があるものの内、持ち運び可能なもの。

棒状礫・扁平礫の一端もしくは両端に敲打痕のあるもの

両面礫器

すり石 擦痕があるものの内、持ち運び可能なもの。

北海道式石冠と称せられるもの

円礫などの一部又は全面にすり面のあるもの

円礫などの長辺にすり面のあるもの

扁平打製石器 敲打により周囲を楕円・半月形に、断面を扁平に成形したもの。

下端部に敲打痕と擦痕のあるもの

下端部に敲打痕のあるもの

下端部に刃部状の加工のあるもの

石皿・台石 擦りもしくは敲打を受けた痕があるものの内、持ち運びが困難なもの。

砥石 擦痕があるものの内、砥面が平滑かやや凹状になるもの。

原石 石器素材と成り得る礫の内、剝片の剝離がおこなわれていないか、不明瞭なもの。

礫 2～20cmほどの何の加工も受けていない自然のもの。主に安山岩である。

(中山)

(c)鉄製品

小刀が1点包含層から出土している。

現地では、出土位置を記録した後に取り上げ、シリカゲルと併に密閉容器に封入した。

保存処理にあたっては第1調査部第1調査課 田口 尚を中心に復元・保存処理を行った。保存処理の開始にあたり、処理前の状態をX線写真撮影した。保存処理はバラロイドB72で仮強化した後、エアブラシ等で錆を除去、アルコール洗浄、高温高圧の脱塩処理を行い、NAD-10を3回に分け

て減圧含浸した。その後、実測図の作成と写真撮影を行った。保管は脱酸素剤（RPシステム）を封入する。（谷島）

（6）調査結果の概要

本茅部遺跡（図1-7・II-1）は川と沢によって開析された標高83～86mの細長い舌状の台地上に立地し、遺跡付近で台地の幅は120m程である。この幅の狭い台地の函館側にあたる大工川に面した崖上に位置する。現在の海岸線から20～30m後方はこの台地の段丘崖斜面が始まり、続く緩斜面の海岸から約600m山側に本遺跡がある。さらに山側は、なだらかな斜面で後背の濁川カルデラの外輪山に続く。南西側に駒ヶ岳が望まれ、晴れた日には、内浦湾を間に遠く有珠山、羊蹄山、室蘭のある絵鞆半島を望むことが出来る眺望の良いところである。

本遺跡の乗る台地の裾を流れる森側の「大工川」と八雲側の根根を一つ挟んだ「地藏川」は、共に年間を通して流れている。本遺跡と川面との比高は約60mある。

検出された遺構は縄文時代中期前葉と考えられる土壌が7基である。遺物は縄文時代前期・中期・晩期及び近世のものが出土し、遺物は縄文時代中期が主体の遺跡である。

遺物の出土する包含層はⅢ層～Ⅳ層である。上から順に、Ⅲ層は近世の遺物包含層で、鉄製品が出土している。Ⅳ層上位に夾在するB-Tmより下位のⅣ層は縄文時代晩期・中期・前期の遺物包含層で主としてこの層から遺物が得られた。Ⅴ層Kog（層厚25～30）の下位にあたるⅥ層は縄文時代早期の文化層で、つまみ付きナイフが1点出土した。今回の発掘調査の最終面はⅦ層の上面または上位である。

最終面の地形（図1-8）は北西側の大工川に面した山側が最も高く標高約84.6mあり、海側の南西方向は標高約81.6mで海側に緩く傾斜して下る。調査区の中央部から東の海側には大工川に平行して浅い沢頭がみられる。調査期間中は強風も吹かず穏やかであったが、Ⅳ層は風倒木痕が多く、遺物の攪乱が多く見られた。前述の海岸に近い台地上に位置する地理的要因によるものと思われ、風倒木痕のうち深いものはⅦ層の上部に及んでいた。

遺構は土壌のみが7基検出され、すべて縄文時代中期の所産と考えられる。土壌のうちP-6・7の2基は長軸が2.5m程ある隅丸方形と楕円形の土壌である。P-3は長軸が1.5m程の長楕円形の土壌で、P-4は長軸が0.8m程の円形もの、他の3基は1mをやや上回る三角形から楕円形を呈すると思われる土壌であるが、そのうち2基は試掘溝と風倒木痕により全形は不明である。位置は中央部と北側に各1基で、他の5基は南西側の標高の高い部分にまとまっている。規模の大きい土壌3基もこの南西側の高い部分に分布している。

P-2はⅢ群a類の土器が1個体出土している。P-7は楕円形の土壌で一端に張り出しがみられ、反対側の墳底に長軸に直交する柱穴状の小ピット2ヵ所が検出されている。覆土の中ほどに焼土が出土している。

土器は縄文時代前期後半の円筒土器下層d式、中期の円筒土器b式（サイベ沢V式）～見晴町式、晩期は大洞C式が出土し、総計4,096点である。主体である円筒土器b式（サイベ沢V式）～見晴町式の分布は南西側の標高の高い部分に多く土壌の分布と重なり、ほとんどがⅣ層からの出土している。石器は1,142点出土し大半がⅣ層から得られている。出土した器種は石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパーなどの剥片石器や石斧、すり石、たたき石などの礫石器が出土している。土製品と石製品が各1点Ⅳ層から出土している。鉄製品は小刀1点がKod直下のⅢ層から出土している。出土層位から江戸時代初頭のものと考えられる。

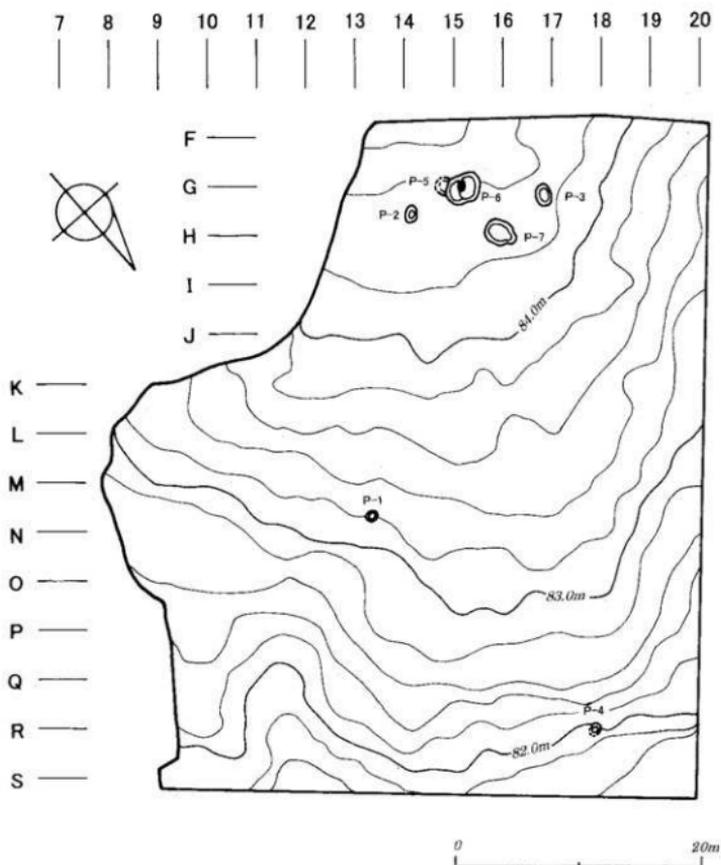


図1-8 遺構位置と最終面地形

遺物の分布についてみると、主体を成す縄文時代中期の土器は函館側の崖に突き出した部分を除き崖面と平行し特に山側は分布が多い。八雲側はまた分布が薄くなる。前期の土器は山側と海側に分布し中央部には出土していない。晩期の土器は海側の八雲方向に狭い範囲で分布する。(谷島)

表 1-1 検出遺構一覧

遺構名	位 置	検 出 層 位	時 期
P-1	Q・R-17	Ⅳ層	縄文時代中期
P-2	G-14	Ⅳ層	縄文時代中期前半
P-3	G-16	Ⅳ層	縄文時代中期前半
P-4	M-13	Ⅳ層	縄文時代中期前半
P-5	F・G-14	Ⅳ層	縄文時代中期前半
P-6	F・G-15	Ⅳ層	縄文時代中期前半
P-7	G・H-15・16	Ⅳ層	縄文時代中期前半

表 1-2 出土遺物

	土 器			土 器 小 計	剝 片 石 器				
	Ⅱ群B類	Ⅲ群A類	V群		石 鏃	石 錐	つば付計 <small>ツバ</small>	スクレイパー	Rフレイク
遺構		103		103				1	
包含層	245	3710	38	3,993	11	1	15	19	4
表採・その他								5	
小計	245	3,813	38	4,096	11	1	15	25	4
	剝 片 石 器				剝 片 石 小 計	礫 石 器			
	Uフレイク	石 核	フレイク	原 石		石 斧	たたき石	すり石	砥石
遺構	1		3		5		2		
包含層	17	5	135	1	208	6	37	25	96
表採・その他	1		3		9	1	5		
小計	19	5	141	1	222	7	44	25	96
	礫 石 器			礫石器 小 計	石 器 小 計	そ の 他			合 計
	扁平打製石器	石皿・台石	礫・礫片			土製品	石製品	鉄製品	
遺構	2	3	4	11	16				119
包含層	70	49	547	830	1,038	1	1	1	5,034
表採・その他	8	3	62	79	88				88
小計	80	55	613	920	1,142	1	1	1	5,241

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡周辺の環境

位置

森町は北海道の西南、渡島半島の中央に位置し、東西25.3km、南北24.7kmで、北東側は内浦湾に面し17.3kmの海岸線である。東は押出沢から駒ヶ岳山頂、大沼を結ぶ線を境に砂原町と、鹿部町に接している。南は渡島山脈から宿野辺川を隔て大沼に至る境界で大野町と七飯町に接し、南西は渡島山脈を境に厚沢部町に接している。西から北西側は渡島山脈から茂無部川を挟んで八雲町に接している。

本茅部1遺跡は森町の市街地から8km程八雲町側（北西）に寄った、海岸から約0.6km内陸に位置し、両側を川に開析された細長い舌状の台地の函館側、標高83～86mに立地する。位置は北緯42度08分24秒 東経140度29分53秒である。

地形・地質・自然環境

森町の地形は一般に丘陵性で渡島山脈により北東に向かって傾斜し、海岸段丘を経て、内浦湾に面している。内浦湾は直径約50kmで南東側の開いた馬蹄形を呈し、湾口は27km程に狭まり、最大水深は107mである。内浦湾は一般的に「噴火湾」と呼称され、駒ヶ岳の他、有珠山、羊蹄山などに囲まれ、1796年に来訪したイギリス海軍スループ艦艦長のプロトンは円形の湾形と周囲の山から噴煙を吹く景色を見て「噴火湾」と呼んだことに由来するとされる。

陸側は、南東に駒ヶ岳（1,131m）の山麓が北西方に緩やかな傾斜をなし、所々に台地と開析された小谷と平地をつくっている。また、北西には濁川カルデラ盆地がある。西側は渡島山脈の連峰である駒ヶ岳（899m）、三九郎岳（802m）など600～800mの山が連なり日本海側と境している。

独立峰である駒ヶ岳はコニーデ型（成層火山）の活火山で、山頂部の東側は馬蹄形に火口が崩壊して開いている。1640年の噴火は山体崩壊を伴う激しい噴火で町内に約2mの火山灰（Ko-d）を堆積したほか山体崩壊に伴う津波を引き起こしている。また、近隣の町村に火山灰を堆積している。それ以前の噴火では折戸川を堰き止め大沼などの湖沼を残すなど有史以来、大噴火、小噴火を幾度も繰り返している。これらの噴火に起因する火山灰は道南の発掘調査において時期を知る「鍵層」として用いられている。

濁川カルデラは約20,000年～12,000年前に噴火し、火砕流台地と呼ばれる平坦な地形を作った後、火口を陥没させカルデラを生成した。その火砕流堆積物などのテフラ（Ng）が森町内に見られ、とくに石倉の海岸線の崖では約6mの厚さに堆積し、「石倉層」と呼ばれる軽石流堆積物を形成している。

河川は後背の渡島山脈を源にした小規模なものが多く最も大きな鳥崎川で20.8km、他は1～13kmと短い。段丘を開析した急流が多い。川の殆どが北東に流れて内浦湾に注いでいるが、南部の宿野辺川（19.1km）は南東に流れて大沼に注いでいる。

森町内の最下位の地層は訓縫層（凝灰角礫岩層、約1,500万年前）で、その上位に新第三紀の八雲層（硬質頁岩層、約1,000万年前）と黒松内層（泥岩層、約300万年前）がある。さらに上位には約150万年前と推定される毛無山溶岩層が鳥崎川中流に発達し、第四紀岩層として森層（火山砕屑物で溶結凝灰岩の薄層）、濁川カルデラ起源の石倉層、段丘堆積物、崖堆積物、駒ヶ岳火山噴出物が覆っている。

森町の気候は北海道の中でも温暖な地帯に属し、盛夏の候でも30℃を超えることは少なく、厳寒の候でも零下15℃まで下がることは珍しい。8月の平均気温は20.2℃、1月の平均気温は-4.9℃で、

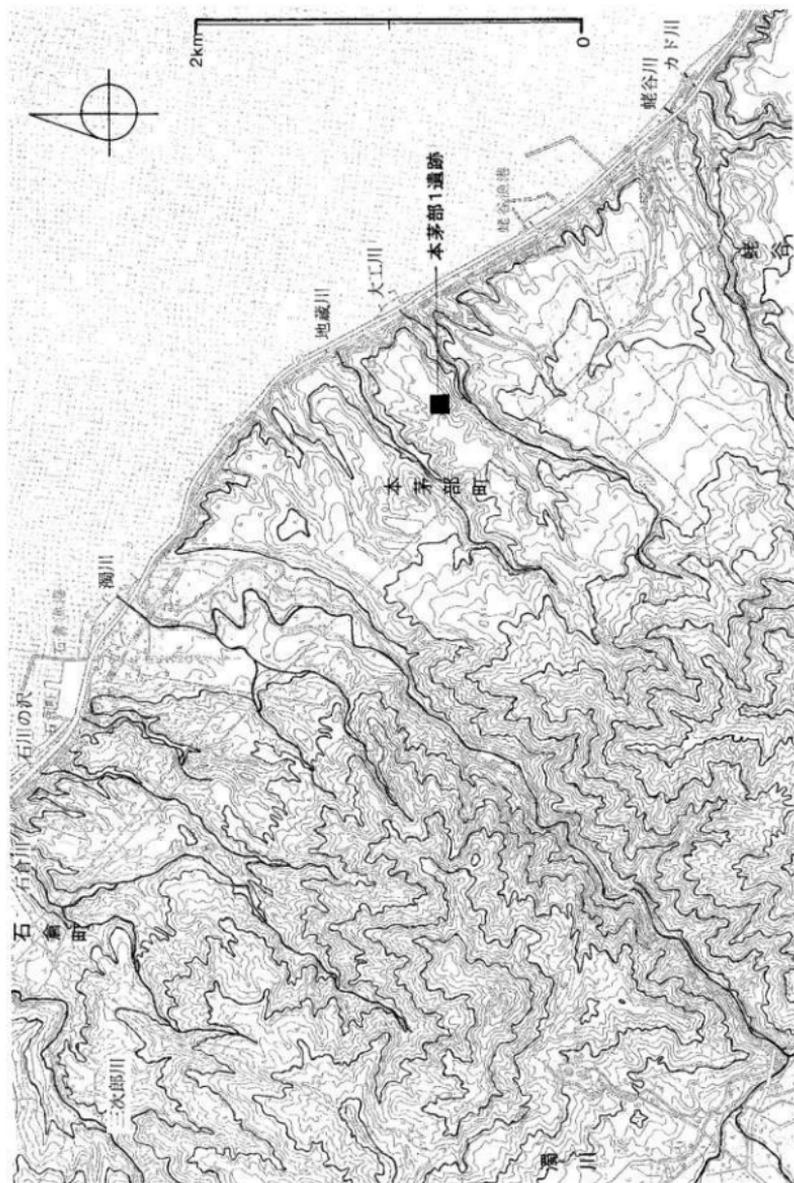


図1-1 遺跡の立地

夏季は北東風、冬季は北西風が多く、風の強さは、5月の乾燥季と、12月の吹雪季にやや強い程度である。降水量はやや少ない方で、降雪は11月上旬に初雪を見、12月中旬に根雪となり、翌年3月中旬には消滅する。積雪量は内浦湾沿岸から山脈に近づくに従って深くなり、130cmに達するところもある。霧は太平洋に面する海岸地方としては少ないが、4月頃から8月に発生する。

本茅部1遺跡周辺の地形は濃川盆地（カルデラ）に起源をもつテフラ（石倉層）などから成る海岸段丘が海岸線まで迫っている。石倉層の上には縄文時代から江戸初頭までの包含層中の下位に駒ヶ岳火山灰g層（Ko-g、約6000年前噴火）を、上位に白頭山苦小牧降下火山灰（B-Tm、約1000年前）を挟んでいる。さらにその上は駒ヶ岳火山灰d層（Ko-d、1640年噴火）が層厚0.8～1.0mあり、包含層を近世以後の擾乱から保護していた。

本遺跡付近の地形は海岸段丘を舌状に細長く開析された段丘平坦面である。この平坦面は「石倉層」と呼ばれる軽石流堆積物からなり、海側は海岸から20～30mに段丘崖を形成し本遺跡の山側は標高150m程から傾斜を増し濁川カルデラの外輪山となっている。

海岸線に直行する方向に川と濡れ沢があり、内浦湾側を含め三方が急斜面となっている。森側の川は大工川で流域長は2.6kmと短い小河川であるが渇水期でも濡れることは無い。八雲側の濡れ沢は無名の濡れ沢で地蔵川の支流をなしている。地蔵川は尾根を一つ挟んで流れている。地蔵川の流域長は2.8kmと短い。水流量は大工川より地蔵川が多い。両川とも源流が標高200m付近にある流れの短い河川で、森町内では他にもこの様な標高200～300m付近に源流を持ち、流域長の短い河川が約10カ所ある。テフラの堆積層と地下水が密接に結びついているものと思われる。

大工川と地蔵川の本遺跡付近で川面の標高は約20mあり、本茅部1遺跡との比高は60m程である。大工川の川底からメノウ原石が確認された。

地名

森町の地名は、アイヌ語で「オニウシ」(O-niushi)で「オ」生えている「ニ」木「ウシ」所（樹木の多くある所）からの意識で付けられた。

「本茅部」の地名について山田秀三は『北海道の地名』（1994）で「茅部」郡名。茅部郡は森町から恵山までの長い海岸地方。松浦武四郎が郡名とすることを建議した。上原熊次郎は「カヤベ。帆形の処と訳す」と書いた。海岸の岩や崖が舟の帆形だと、よくカヤ（帆）を地名にしたものである。カヤ・ウン・ベ（kaya-un-pe 帆・の・処）から茅部になったとの見方は自然である。永田地名解はわずかが形が違うが「カヤ・ウン・ベ」。帆崖。茅部郡の元名。往時帆状の禿崖あり、故に名くと云ふ。今其の帆状見ず」と書いた。地名の順序から見ると蛭谷と石倉の間である。安政の「野作東部日記」には、その間の本堂部村に、本堂部岬ありと書かれた。たぶんそこがこのカヤ（ウン）べと呼ばれた崖のあった処であろう。国鉄石谷駅のそばに今でも本茅部（森町）の名は残っている。茅部郡の端の所であった。」と著している。

『森町史』（1980）では、ジョン・パチュラーの『日本地名研究』を引用して「茅部」の名称は、石倉付近から海上遙か東南に見える駒ヶ岳の姿が、あたかも水平線に浮かぶ一大帆船のようにも見えるので、これを「カヤベ」と呼んだという説がある。そして「カヤウンベシュ」でなく、「カヤベ」とし、「ベシュ」（崖）にあらず、ベ【物・山・所】であるとするが、駒ヶ岳は往時「内浦岳」又は「茅部岳」といったから、あるいは、後説が正しいかもしれない」と紹介している。しかし、「本茅部」の地名のうち「本」の部分について触れていない。寛政年間の菅江真澄『えぞのてぶり』（寛政3年、1791）では「カヤベ」、高橋寛光『蝦夷巡覧筆記』（寛政9年、1797）では「カヤヘ」、谷元旦『蝦夷紀行』（寛政11年1799）では「カヤヘ村」と記され「本」が抜けている。文化年間に降の山崎半蔵「松前

下蝦夷地記行』(文化3年、1806)では「本茅部」、高麗鱗平『蝦夷渡海記』(文化6年1809)では「本カヤベ」と記され「本」が付されている。松浦武四郎は『廻浦日記』(1856、安政3年)では「ホンカヤベ」とし、『武四郎蝦夷地紀行』(秋葉実解説1988)『渡島日誌 巻の四』(慶応元年1865)のなかで「茅部村 三十三軒文化度十三軒 茅部は此辺一畝の名なるを、今此旭茅部と云えども実はボンカヤベと云し由也」と記している。この様に「本茅部」の「本」について曖昧な点が残されるが、一般的にアイヌ語で「ホン」はボン(小さい)の意があり、(子)と訳される場合もある。

歴史

森町内の考古学的な調査で、人間の痕跡が検出されたのは縄文時代早期からである。出土した遺構・遺物から縄文時代以来、統縄文時代、擦文時代、アイヌ文化期から現代に至るまでほぼ途切れずに人が住み続けていた様である。東蝦夷地といわれ記録に残されているものは、江戸時代の津軽藩史『津軽一統志』や寛永17年(1640)の駒ヶ岳の噴火を記録した松前藩の『新羅之記録』、『松前年々記』が噴火の様子や被害などを伝えている。それ以前にも和人が漁期の入り稼地(出稼ぎ地)となり、しだいに漁業を中心に住み着くようになったと思われる。

寛永17年(1640)の駒ヶ岳の噴火では、「クルミ坂岩屑なだれ」により、内浦湾から太平洋沿岸に津波が起き、七百余の死者を出し、昆布取りの磯舟百余艘が巻きこまれている。この様に、内浦湾の沿岸ですでに昆布漁等、漁業によって人が多く集まり住んでいることが知られる。

記録に残されているものは、公的記録類や紀行・手記などで、本茅部に関係するものを凡そ年代順に引用した。慶長6年(1601)上磯からの移住者が鷲ノ木の浜名主を努めたと「森町史」にあるのが出典は不明である。これが周辺での最も古い記録と思われる。

寛文9年から起こったシャクシャインの蜂起を記録した『津軽一統志』では、本茅部周辺を

「一、とち崎 秋おとなイツライ持分 家四、五軒

一、かやべ から家四、五軒」とあり、アイヌ民族の支配地域でアイツライが長であったことが知られる。

「茅部場所」は元禄8年(1695)の「ノタオイ場所」との境界論争で、その存在が知られる。その後、『蝦夷商売聞書』元文4年(1739)など記録に表れる。函館付近の小安から野田追までを函館六ヶ場所(商業知行制)と称し、そのうち現在の森町・砂原町一帯「松屋川(砂原町砂崎付近)～茂無部川(森町と八雲町の境界)に至る沿岸」が、「茅部場所」と呼ばれていた。知行主は松前藩家臣北見助右衛門で1688年から代々北見家に受け継がれている。請負人は函館の間屋、門屋太郎右衛門らである。労働力は土着の漁師、出稼ぎの漁師、及び、アイヌ民族である。漁獲されたのは「ニシン・タラ・マス・イワシ・コンブ・ナマコ・ホタテガイ・オットセイ」などである。

寛政12年(1800年)、東蝦夷地が幕府直轄地となり、函館六ヶ場所一円の和人の人口が次第に増加したため幕府はここを和人地と定め、場所制度を廃止して、各村落の独立を認めた。

当時の森町の中心地は鷲の木で、他はその支郷であった。内浦湾を廻る交通路であったため幕府直轄以後は往来が多くなり、それらの人による記録・紀行文などが多くなる。周囲の人口の推移や生活を記録類の中から記すと以下のようである。

菅江真澄の著した『えぞのでり』では、寛政3年(1791)福山から有珠を訪れた往路、6月2日に本茅部を通り過ぎている。該当する部分は、

「ボウヒ、エヒヤコタン、メツタマチ、カヤベ、濁川、石倉、ボンナキなどの浦々をつたってくると、きょう初めて昆布刈をする小舟が、沖も狭いほどたくさんつらなり漕いでおり、潜って刈ったり、舟から棹にからめたり、錨引きでとるなど、浦々によってその方法は異なっていた。」と『森町史』

に引用されている。

「いたどり多くしげりて、あし原のやうにつづけり。このほとり竹なれば、めぐりの垣をも皆これにてつくる。めなれし草木は稀なる中に萩、ふきなどたけ高く、ふきの葉はかさにもかへ、萩のふるえは杖ともなしつべし。また、うどのたぐひによとうといふ草ありてふときは花をさしはさむ筒となせり。ただ松杉などたえて見えざるける。』『松前紀行』(文化4年1807) 幕府若年寄堀田正敦が記し、周囲の植生が知れる。

「<本茅部>

- 一、煎海鼠 駄昆布 但取揚高元場所驚ノ木ヨリ書上仕候
- 一、鱒 千六十束 去丑年取揚高 但老東二付直段二束五分
- 一、鮎 千廿束 去丑年取揚高 但老東二付老ゞ五百分
- 一、鱒柏 貳千ゞ目 前同断 金老両に付け緒九段四十ゞ目
- 一、船数 廿三艘
 - 内 筒船 貳艘
 - 持符 十三艘
 - 磯船 八艘
- 一、鱒引小網 貳投
- 一、鱒差網 貳百五拾放
- 一、這繩 七十放」、嘉永7年(1854)の松前藩の調書に残されているほか、

「本茅部 村入口より村外迄五丁、家数十四軒、人数六十七人、外に出稼家一軒、人五人有、舟は筒舟二艘、持符十三艘、いそ舟八艘有。村中稲荷一社有。寅年産物は鱒貳千四百束、役立五分也。丑年産物は秋味五百束、鮮廿五束、駄昆布六百駄夏いわしゞ柏六十本この役立五分也。畑よりそば十二俵、大豆五俵、小豆一俵出る。」と、『東蝦夷地海岸図台帳』(安政二年1855)に南部藩士長沢盛至が記録している。

船の詳細は『蝦夷日記』(安政3年1856)松浦武四郎に詳しい。それによると、

「持符 是は至て小舟也。漸拾石位迄のもの也。然し其の作り方筒船の作りあらざるが故に積荷をすることなし。唯沖合通ひ又は漁罾の節通行斗に用ゆ。此言葉は函館にてのみ申こと也。

磯船 同じ千成。こちら言江差+松前にて言ことなり。其の船異なることなし」と記述されている。

同じく『蝦夷日誌』(弘化2年1845)では、当時の様子を

「本茅部 人家一三四軒、後ろの方岸壁ニし而高し。皆漁者のミ也」と著し、『廻浦日記』(安政三年1856)では「ホンカヤへ 此処人家文化の頃十三軒有し由なるが当時三十三軒、人別百五十二人有り」と描いている。

幕府吏員 市川十郎は『蝦夷地地検考録』(安政4年1857)の中で

「一、本茅部廿一戸四十九口。船三十拾六艘。家役五十貳駄、此錢四百六拾拾文。四半數老ゞ三百文。巳年漁鱒六千九百束、鮮千枚余。稲荷社享保中再建。又地藏堂一字」と記録している。この稲荷社は現在大工川沿いにある「本茅部稲荷神社」のことと考えられ、また、地藏堂は地藏川沿いに見られるものがこの記載のものと思われる。両者とも段丘崖より若干山側に入った谷間に位置し、海風には直接晒されない。

周辺で原油の産出について記載がある。近年、発掘調査で出土するアスファルト塊や遺物に付着しているアスファルトが注目されている。これはアスファルトの原産地を知ることで「ものの移動」を通して「人の移動」を知る手段と考えられている。

原油について「クソズ(臭水)¹⁾」として江戸時代の記録に表れ、紹介されている。松浦武四郎は『蝦夷日誌』(弘化2年1845)の中で「鬼ウシベツ 一名烏サキ川。此川、森と鷺の木の境也。川巾十七、八間。水の有間は常に八間位也。仮橋をかけたなり。渡りて川原に川柳、玫瑰²⁾、茨、虎杖³⁾等多し。川魚少し有。此川上十丁計にして息水⁴⁾の出る処有よし」と記載し、玉蟲左太夫は『入北記』(安政4年1857)の中で「サテーノ珍シキコトアリ、ユライ村ヲ発シテ六七丁斗ニシテ油ノ湧出ル所アリ。一見セシニ油臭鼻ヲ衝キ紛々タリ、同所詰下役大林弥一郎嘶ニテ承ルニ燈油ニハ用ヒガタシ、漆或ハチャン⁵⁾ノ代リニナルト伝フ」記載を残している。

その後、明治になってベンジャミン・スミス・ライマンや農務省技師小林儀一郎などが濁川、鷺ノ木等で試験採掘を行っている。

このように、温暖な気候に恵まれ海産物や山林の食料が多く取れ、メノウ・頁岩・アスファルトが近隣で採取されるなど、当地は恵まれた環境にあったものと考えられる。(谷島)

注1 原油

注2 はまなす

注3 イタドリ

注4 「チャン」-蘆青、ピッチアスファルトなど

2 森町の遺跡

森町の遺跡は駒ヶ岳や濁川の噴火によるテフラが厚く堆積し、所在の確認がなかなか出来ない。特に1640年噴火に起因するKo-d火山灰は2m程堆積している所もあり、昔の地形を覆い隠し、集落など縄文時代の人々の痕跡を覆っている。

隣町の八雲町や七飯町で各70遺跡以上確認されているにも拘らず、森町で確認された遺跡数が34ヶ所と少ないのは、この様な地理的に不利な状況による。しかし、森町文化財調査委員であった故 熊野吉蔵氏は精力的に踏査や調査を行い、発見された遺跡が幾つもある。その資料は熊野コレクションとして道立開拓記念館に所蔵されている。同氏の尽力により明らかになった遺跡が多いことを記しておきたい。

近年に至り、北海道縦貫自動車道の建設により事前に遺跡の有無を確認する所在確認調査が行われた結果、16ヶ所の遺跡が発見された。さらに、今後も所在確認・試掘調査が行われることから新たに発見追加される遺跡が増えるものと思われる。

遺跡の立地は海岸段丘上に多く、川に沿った内陸部は5ヶ所である。時代別に立地と遺跡数を概観する。旧石器時代の遺跡は未発見である。

縄文時代に到ると、海岸に近い低位海岸段丘上から中位段丘に集落が出来始め、中期に至って中位段丘又は丘陵上に遺跡数は多くなり更に内陸に進出する。後期は中小規模の集落がやや奥まった段丘又は丘陵上に散在する。中期と14遺跡で分布が重なる。晩期から遺跡数は減少し、その後続縄文時代以降は海岸近くに拠点を移して貝塚などを残している。

遺跡名の後の()内は登録番号で、固有の数字は遺跡分布図(図Ⅱ-2・3)上のマークの数字と対応する。

時期 \ 地形	海岸に近い 低位海岸段丘	中位段丘又は丘陵上	川に沿った内陸	合計
縄文時代早期	1 ◎	1 ◎		2
縄文時代前期	2 ◎	4 ◎		6
縄文時代中期	4 ●	15 ◎	5 ○	24
縄文時代後期	3 ○	16 ●		19
縄文時代晩期	1 ▲	5 ○		6
続縄文時代	2 ▲ ○	5 ○		7
擦文時代	2 ▲ ○	2 ○		4
中・近世	3 ■ □ ○	1 ■		4

●集落跡 ◎小規模集落 ○遺物包含地 ▲貝塚 ■細跡 □台場

姫川1遺跡 (B-15-1) 姫川上流の小河岸段丘に位置する。縄文時代中期円筒土器上層式が主体の遺物包含地である。1958年の熊野吉蔵の調査では石で囲んだ炉跡を検出し、復元可能土器1点、破片多数の他、石臼1点が出土している。

姫川2遺跡 (B-15-2) 標高112mの河川に沿った斜面に位置する。縄文時代中期円筒土器上層式が主体の遺物包含地。1959年、熊野吉蔵の踏査で発見され、同氏の調査では土器片多数が出土している。

白川遺跡 (B-15-3) 尾白内川下流の河岸段丘の小さな沢地に位置する。縄文時代晩期、擦文時代、北大式土器が出土している。貝塚が含まれる。1962年の熊野吉蔵の調査では土器8点、石器4点、土製品、骨格器が出土している。

森川貝塚遺跡 (B-15-4) 森川B遺跡を統合し森川貝塚遺跡とした。標高13～15mの低位海岸段丘上に位置する。縄文時代前期円筒土器下層式の遺物包含地の他、上層から統縄文時代恵山式や擦文時代の貝塚が検出されたほか中近世の遺物包含地でもある。土器片多数の他、石器、鉄製品、陶磁器、古銭などが出土している。1953年、函館博物館館長竹内収太、熊野吉蔵他が調査している。

森川1遺跡 (B-15-5) 森川A遺跡・森川C遺跡・森川D遺跡を統合し森川1遺跡とした。標高15～18mの低位海岸段丘上に位置する。縄文時代前期(円筒土器下層式)・中期(円筒土器上層式)の集落遺跡。1961年、熊野吉蔵によって発見されている。1981年の調査では3軒の堅穴住居跡が検出されている。1971・1981年、森町教委によって発掘調査が実施された。「森川D遺跡のしおり」森町教委1971熊野吉蔵、「茅部郡森町森川A遺跡出土の前期縄文式土器」『北海道考古学』第10輯1974熊野吉蔵・八木光則、「森川A遺跡—縄文時代前期住居址の調査—」森町教委1982石本省三が刊行されている。

森川2遺跡 (B-15-6) 北海道縦貫自動車道に関連した所在確認調査で発見された。森川に開析された平地の左岸、標高80～100mに位置する。縄文時代晩期、擦文時代の遺物包含地。縄文時代晩期と擦文時代の文化層の間に土石流の層を挟む。2002年森町教委によって発掘調査が実施された。

本内川右岸遺跡 (B-15-7) 北海道縦貫自動車道に関連した所在確認調査で発見された。本内川右岸標高40～60mの台地に位置する。縄文時代中期・後期の遺物包含地で円筒土器上層式、ノダップⅡ式が出土している。2001年道埋文によって発掘調査が実施された。「北埋調報182」2003が刊行予定である。

茂無部川右岸遺跡 (B-15-8) 北海道縦貫自動車道に関連した所在確認調査で発見された。茂無部川右岸、標高40～60mの台地に位置する。縄文時代中期・後期の遺物包含地。土器片・礫石器が出土している。

尾白内貝塚遺跡 (B-15-9) 標高10mの海岸段丘上に位置する。縄文時代晩期と統縄文時代の貝塚。統縄文時代(恵山式)が主体の遺跡である。東京大学駒井和愛らにより複数回にわたり調査が行なわれている。恵山式土器と石器・骨角器多数を出土したほか、土師器・須恵器も出土している。1951～1953・1958・1980・1992年に発掘調査を実施している。「北海道茅部郡森町尾白内貝塚について—火山性地遺跡調査の一例」市立函館博物館1954千代肇、「尾白内」森町教委1981千代肇・三浦孝一・石本省三・長谷部一弘ほか、「尾白内2」森町教委1994藤田登が刊行されている。

鳥崎遺跡 (B-15-10) 旧国鉄の鉄道補修工事の際に発見された。標高10～30mの海岸段丘上に位置する。縄文後期の遺物包含地。住居址様プラン・ピット14基が検出された他、近年になって調査報告書の「Ko-d層直下に人工によると見られる溝の跡10条」から1640年降下火山灰以前の畠跡の畝間状遺構と確認されている。トリサキ式土器の標式遺跡である。1974年森町教委によって発掘調査が実施された。

「鳥崎遺跡」森町教委1975佐藤忠雄ほかが刊行されている。

蛭谷遺跡 (B-15-11) 蛭谷川の下流北岸の標高30～32mにあたる河岸段丘上に位置する。縄文時代中期（円筒土器上層式）～後期の遺物包含地。土器片や石器などが出土している。1971年、森町教委によって発掘調査が実施された。

赤井川1遺跡 (B-15-12) 年金保養基地建設に伴う所在確認調査で発見された。旧赤井川A遺跡で、標高175～195mの丘陵に位置する。縄文時代中期（円筒土器上層式）の遺物包含地。土器片・石器片が出土している。

赤井川2遺跡 (B-15-13) 年金保養基地建設に伴う所在確認調査で発見された。旧赤井川B遺跡で、標高230～235mの丘陵に位置する。縄文時代中期の遺物包含地。土器片・石器片が出土している。

赤井川3遺跡 (B-15-14) 年金保養基地建設に伴う所在確認調査で発見された。旧赤井川C遺跡で、標高210mの丘陵に位置する。縄文時代中期の遺物包含地。土器片・石器片が出土している。

オニウシ遺跡 (B-15-15)、海岸段丘上に位置する。縄文時代早期（貝殻条紺文土器・東銅路Ⅲ式）・中期（円筒土器上層式）の集落跡で堅穴住居跡4軒などが検出されている。1976年、森町教委によって発掘調査が実施された。

「森町 オニウシ遺跡発掘調査報告」森町教委1977久保泰が刊行されている。

御幸町遺跡 (B-15-16) 低位海岸段丘上、縄文時代早・中期円筒土器上層式・後期、擦文時代の集落跡で堅穴住居跡が検出されているほか、フラスコ状ピットが多数検出されている。1984・1993年、森町教委によって発掘調査が実施された。

「御幸町」森町教委1985藤田登ほか、「御幸町2」森町教委1994藤田登が刊行されている。

清澄遺跡 (B-15-17) 森高校テニスコートの整地中に発見された。旧高校台遺跡を改称した。標高33～39mの高位海岸段丘上に位置する。縄文時代中期円筒土器上層式・後期の遺物包含地。住居跡と石器製作址が検出されている。

鷺ノ木1遺跡 (B-15-18) 標高15～20mの海岸段丘上に位置する。縄文時代中期円筒土器上層式の遺物包含地。土器片・石器片が出土している。

鷺ノ木2遺跡（B-15-19）海岸段丘上に位置する台場跡。明治2年、旧幕軍が鷺の木上陸時に築いた台場跡と伝えられ、浅い溝が見られる。

鷺ノ木3遺跡（B-15-20）桂川左岸、標高40～45mの中位河岸段丘上に位置する。縄文時代中期円筒土器上層式、統縄文時代恵山式の遺物包含地。土器片が出土している。

鷺ノ木4遺跡（B-15-21）桂川左岸、標高45～50mの中位河岸段丘上に位置する。縄文時代前期・中期（円筒土器上層式）・後期・晩期、統縄文時代（恵山式）の集落跡。縄文時代中期末～後期初頭を主体とした竪穴住居跡、石組炬、土坑、配石遺構などが検出されている。2001・2002年森町教委によって発掘調査が実施された。

調査概報「鷺ノ木4遺跡・栗ヶ丘1遺跡」森町教委2002荻野幸男ほかが刊行されている。

濁川左岸遺跡（B-15-22）北海道縦貫自動車道に関連した所在確認調査で発見された。濁川左岸の標高40～50mの河岸段丘上に位置する。縄文時代前（円筒土器下層式）・中期（円筒土器上層式）・後期前葉の集落跡。2001・2002年道埋文によって発掘調査が実施された。

「北埋調報190」2003が刊行予定である。

本茅部1遺跡（B-15-23）北海道縦貫自動車道に関連した所在確認調査で発見された。川に挟まれた標高80～85mの細長い舌状台地上に位置する。縄文時代前期・中期の遺物包含地。山側に遺物包含地は広がると考えられる。2002年道埋文によって発掘調査が実施された。

本報告書「北埋調報191」2003である。

栗ヶ丘1遺跡（B-15-24）北海道縦貫自動車道に関連した所在確認調査で発見された。鳥崎川左岸の中位河岸段丘、標高45～50mの斜面に位置する。縄文時代前期～晩期の遺物包含地。縄文時代後期を主体とし、竪穴住居跡、土坑が検出されている。2001・2002年森町教委によって発掘調査が実施された。

調査概報「鷺ノ木4遺跡・栗ヶ丘1遺跡」森町教委2002荻野幸男ほかが刊行されている。

倉知川右岸遺跡（B-15-25）北海道縦貫自動車道に関連した所在確認調査で発見された。倉知川、小無名沢との間の標高75～80mの丘陵上に位置する。縄文時代中期・後期の集落跡。縄文時代後期を主体とし、中期前半の竪穴住居跡、後期前葉の土坑などが検出されている。2002年道埋文によって発掘調査が実施された。

森川3遺跡（B-15-26）北海道縦貫自動車道に関連した所在確認調査で発見された。森川右岸の標高90～100mの河岸段丘上に位置する。縄文時代前期・中期の集落跡、縄文時代後期・統縄文時代恵山式の遺物包含地、中近世の畠跡。縄文時代前期を主体とした竪穴住居跡、土坑などが検出されているほか、約1000年前と1640年前の火山灰に挟まれた時期に営まれた畠跡が畝間状遺構として検出された。2002年道埋文によって発掘調査が実施された。

上台1遺跡（B-15-27）北海道縦貫自動車道に関連した所在確認調査で発見された。森川左岸、標高90～100mの河岸段丘上に位置し、森川との間に森川2遺跡と小沢を挟む。縄文時代後期の遺物包含地。土器片・石器片が出土している。

鷺ノ木5遺跡（B-15-28）北海道縦貫自動車道に関連した工事用道路断面などから遺物が採集されたことから発見された。桂川の一支流、上毛無沢川の標高70mの左岸段丘上に位置する。縄文時代後期の遺物包含地。土器片・剥片が出土している。

石倉1遺跡（B-15-29）北海道縦貫自動車道に関連した所在確認調査で発見された。濁川の一支流（無名）、標高30～40mの左岸丘陵上に位置する。縄文時代後期の遺物包含地。統縄文時代後北式の土器が1個体出土している。土器片・石器片が出土している。2002年道埋文によって発掘調査が実施された。

森川4遺跡（B-15-30）北海道縦貫自動車道に関連した所在確認調査で発見された。森川に開析された標高90mの右岸平地で、森川3遺跡の段丘崖下に位置する。縄文時代中期・後期、擦文時代の遺物包含地。

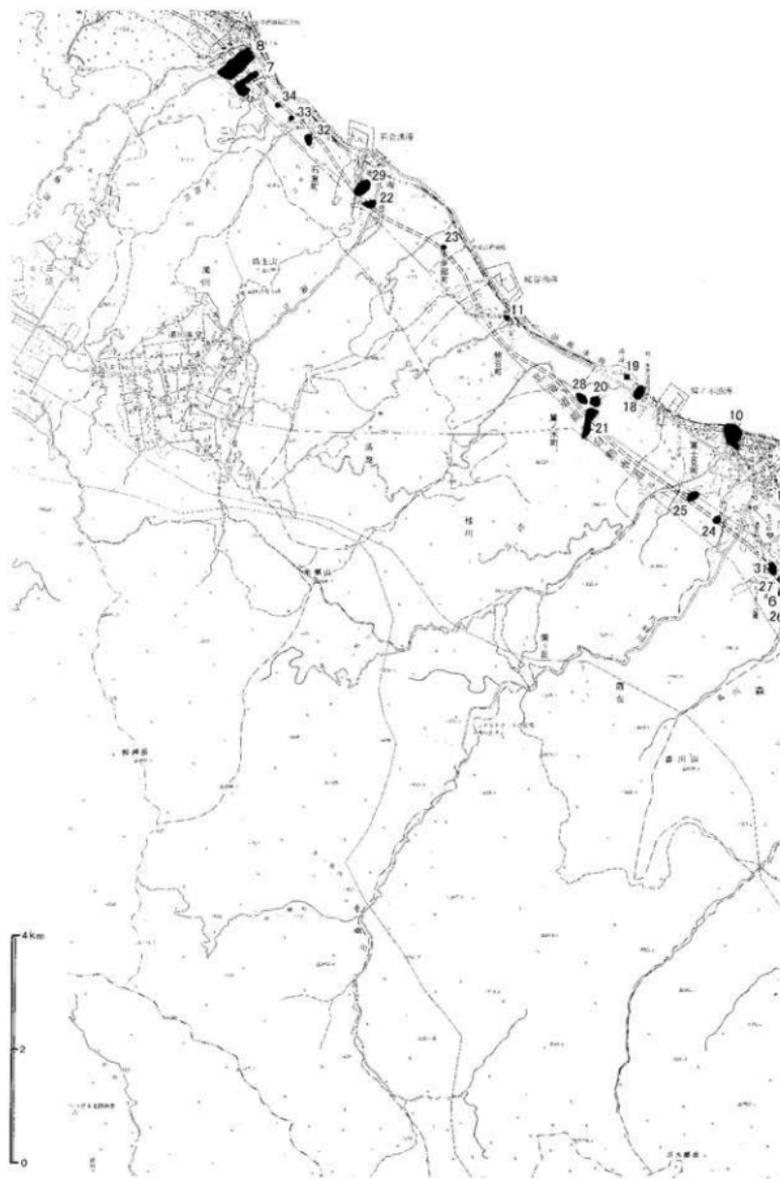
上台2遺跡（B-15-31）北海道縦貫自動車道に関連した所在確認調査で発見された。小沢の左岸、標高90～100mの段丘～緩斜面に位置する。縄文時代中期・後期の集落跡。土器片・石器片が出土している。

石倉2遺跡（B-15-32）北海道縦貫自動車道に関連した所在確認調査で発見された。石倉川の標高60～70mの高位段丘（尾根状）に位置する。縄文時代中期～晩期の集落跡。土器片・石器片が出土している。

石倉3遺跡（B-15-33）北海道縦貫自動車道に関連した所在確認調査で発見された。小川の左岸、標高65～75mの段丘上に位置する。縄文時代後期の遺物包含地。土器片・石器片が出土している。

石倉4遺跡（B-15-34）北海道縦貫自動車道に関連した所在確認調査で発見された。三次郎川右岸、標高60mの段丘上に位置する。縄文時代後期の遺物包含地。土器片・石器片が出土している。

（谷島）





図Ⅱ-3 森町の遺跡(2)

表Ⅱ-1 森町の遺跡一覧

登録番号	名称	所在地	登録番号	名称	所在地
1	姫川1遺跡	字駒ヶ岳132-1~4	18	鷺ノ木1遺跡	字鷺ノ木145-1ほか
2	姫川2遺跡	字駒ヶ岳17-216、-217、-6	19	鷺ノ木2遺跡	字鷺ノ木455ほか
3	白川遺跡	字白川49-14	20	鷺ノ木3遺跡	字鷺ノ木499-2ほか
4	森川貝塚遺跡	森川町76~79ほか	21	鷺ノ木4遺跡	字鷺ノ木506~510
5	森川1遺跡	森川町69-2ほか	22	濁川左岸遺跡	字石倉町401, 446-1, 448
6	森川2遺跡	字霞台34-1, 35-2	23	本茅部1遺跡	字本茅部町205, 272~274, 294
7	本内川右岸遺跡	字石倉町610-7・8	24	栗ヶ丘1遺跡	字栗ヶ丘38~44
8	茂無部川右岸遺跡	字石倉町610-2・5	25	倉知川右岸遺跡	字栗ヶ丘7, 11-1・2
9	尾白内貝塚遺跡	字尾白内926, 929-1ほか	26	森川3遺跡	字森川町317-1・7
10	鳥崎遺跡	鳥崎31-1, 字富士見町13ほか	27	上台1遺跡	字上台33-1, 42-1, 364
11	蛭谷遺跡	字蛭谷町146-1ほか	28	鷺ノ木5遺跡	字鷺ノ木503-1, 495-4・5
12	赤井川1遺跡	字赤井川229	29	石倉1遺跡	字石倉町395~397, 403, 404, 439
13	赤井川2遺跡	字赤井川229	30	森川4遺跡	字森川町317-18
14	赤井川3遺跡	字赤井川229	31	上台2遺跡	字上台町326-5
15	オニウシ遺跡	字上台町326-18	32	石倉2遺跡	字石倉町146, 623-134, 624-1, 306
16	御幸町遺跡	字御幸町132-2, 字清澄3-1ほか	33	石倉3遺跡	字石倉町482, 483, 490
17	清澄遺跡	字清澄27, 29-2	34	石倉4遺跡	字石倉町511, 520, 521

III 遺構とその遺物

土 墳

土墳は7基確認されている。試掘坑の断面観察によって検出できた一部の土墳を除き、包含層中から遺構を検出した面は黒色土IV層下位においてである。調査区は台地の先端部が南西に張り出し、北側には緩やかな沢状地形が2条走る。P-1、4、縄文時代晩期の土器を除き遺構、遺物を多く検出したのは調査区南から南西にかけての沢状地形の影響を受けない比較的平坦な面である。ここに位置する遺構は縄文時代中期前半に位置づけられる土器の分布と重なる。遺構は、当該期の土器が伴うものの、また埋め戻しの覆土中にそれらの土器片を検出したものが多い。このことからこれらの土墳は縄文時代中期前半に属する土墳であると考えられる。(袖岡)

P-1 (図III-1、図版1、表1・2)

位 置：Q、R-17

規 模：(0.82) × (0.56) / (0.77) × (0.39) / (0.29) m

確認・調査：道教委による試掘調査坑の壁面に掘り込みを確認した。上面も精査したところ、IV層下位でプランも確認できた。試掘坑により約1/4が失われている。

覆 土：4層に分けられる。ほぼIV層とV層の混ざったものなので埋め戻しと考える。

形 態：約1/4が失われているが不整な卵形。墳底は皿状で、壁の立ち上りはなだらかで、明瞭である。

付属遺構：なし

遺物出土状況：覆土上位、包含層IV層面で磔1点出土。

時 期：決め手となる遺物がないが、確認層位により縄文時代中期の土墳と考える。(中山)

掲載遺物：1は自然磔。上下端に黒色物が薄すらすら付着している。蛍光X線分析によるとマンガンが主成分なので、人為的なものではなく自然のものと考えられる。

P-2 (図III-1、図版1・7、表1・2)

位 置：G-14

規 模：1.11 × 0.61 / 0.87 × 0.43 / 0.44 m

確認・調査：IV層包含層を5cmづつ平坦に掘り下げていたところ、土器1個体の口縁部が円形に、埋められているような状態を想定できる形で検出した。土壌が存在することを推定し周辺を精査したところ僅かに暗褐色の落ち込みを確認した。土器にかかるよう暗色の落ち込みを半截したところ明瞭な掘り込みと壁の立ち上がりを確認し土墳と認定した。土器は土墳中に北側へわずかに傾き立った状態で出土した。

覆 土：1~10層に分けた。黒褐色へにぶい黄褐色を呈する。埋め戻しによるものと考えられる。

形 態：平面は不整な卵形を呈する。壁の立ち上りは明瞭である。

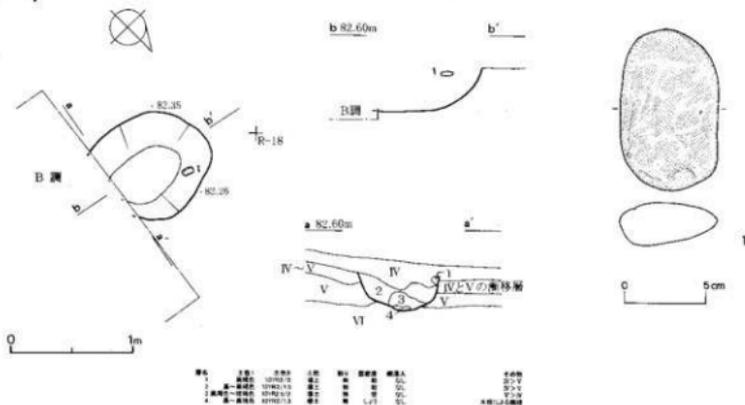
付属遺構：なし

遺物出土状況：Ⅲ群a類土器が1個体、おおよそ正立した状態で検出した。破片数にして53点である。

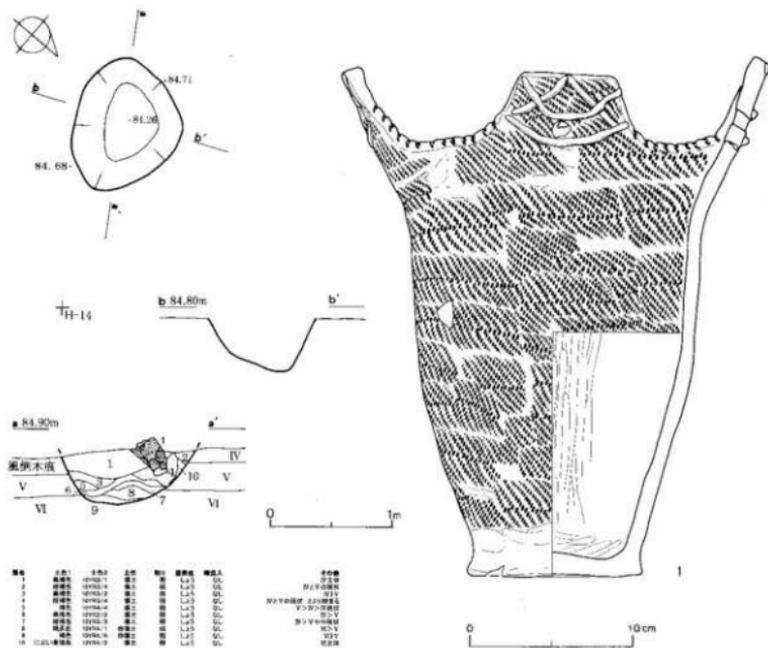
時 期：埋め戻しの覆土中からⅢ群a類土器が1個体出土したことから縄文時代中期前半の土墳である。(袖岡)

掲載遺物：1は大きく開く波状口縁である。胴部は微弱に張り出す。底部はわずかに上げ底気味になる。地文は斜行縄文。波頂部の上に細い貼り付けが施され、穿孔が加えられる。波頂部を除く口唇上

P-1



P-2



には縄による刻みが増えられる。実測図には入れていないが突起下部と胴部の境に補修孔が2ヶ所あり、一ヶ所は貫通していない。サイベ沢Ⅶ式に比定されるもの。

P-3 (図Ⅲ-2・3、図版2・7、表1・2)

位置: G-16

規模: (1.57) × 1.24 / 0.82 × 0.54 / 0.40m

確認・調査: 包含層調査によって調査区南側の台地先端部に遺物が比較的多いことがわかり、この周辺で遺構の有無を確かめる精査を行った。この作業の中で、暗色の落込みを確認し、半載したところ明瞭な掘り込みを検出し土壌と認定した。土壌南側の一部は木根による攪乱を受け壊されている。

覆土: 1～3層に分けた。黒～暗褐色を呈する。埋め戻しによるものと考えられる。

形態: 平面は楕円形を呈する。墳底は平坦で壁の立ち上りは明瞭である。

付属遺構: なし

遺物出土状況: 墳底からは台石2点が出土した。覆土中からはⅢ群a類土器10点、スクレイパー1点、フレイク1点出土している。

時期: 周辺の検出遺構、遺物と埋め戻しの覆土中からⅢ群a類土器が出土したことから縄文時代中期前半の遺構である。 (袖岡)

掲載遺物: 6、7は墳底出土遺物、その他は覆土出土遺物である。1、2は深鉢形土器の突起部。1は半載竹管状の工具によって沈線による文様が施される。2は細い貼付によって施文され、割れ口近くに縦に走る沈線が観察できる。3は小形の深鉢形の体部破片。やや張り出していたものとみられる。無文地に横走る沈線と、貼付が施される。4はスクレイパー、背面の周縁に刃部を作り出している。右側縁中央から上部にかけては刃こぼれが顕著である。5は原石面を残すフレイク。6、7は熱を受けた痕跡のある台石。ともに使用面は1面のみである。7の下端部には敲打痕がみとめられる。また、左端部と下端部には黒色物が僅かに付着しているが、実体顕微鏡による観察ではP-1の礎付着物に似る。

P-4 (図Ⅲ-4、図版2、表1・2)

位置: M-13

規模: 0.72 × 0.47 / 0.65 × 0.41 / 0.52m

確認・調査: 道教委による試掘調査坑の壁面に掘り込みを確認した。Ⅳ層下位でプランを確認できた。掘り込みはⅤ層の直上あたりと思われる。

覆土: 3層に分けた。ほぼⅣ層土だが、まばらにⅤ層が混ざるところから埋め戻しによるものと考えられる。

形態: 円形。上面の1/2は試掘坑により失われている。墳底は平坦で壁の立ち上りは明瞭である。

付属遺構: なし。

遺物出土状況: 覆土中～下位から、Ⅲ群a類土器片6点、自然礎2点が出土した。

時期: 出土遺物と掘り込みの層位から縄文時代中期前半の土壌と考える。 (中山)

掲載遺物: なし

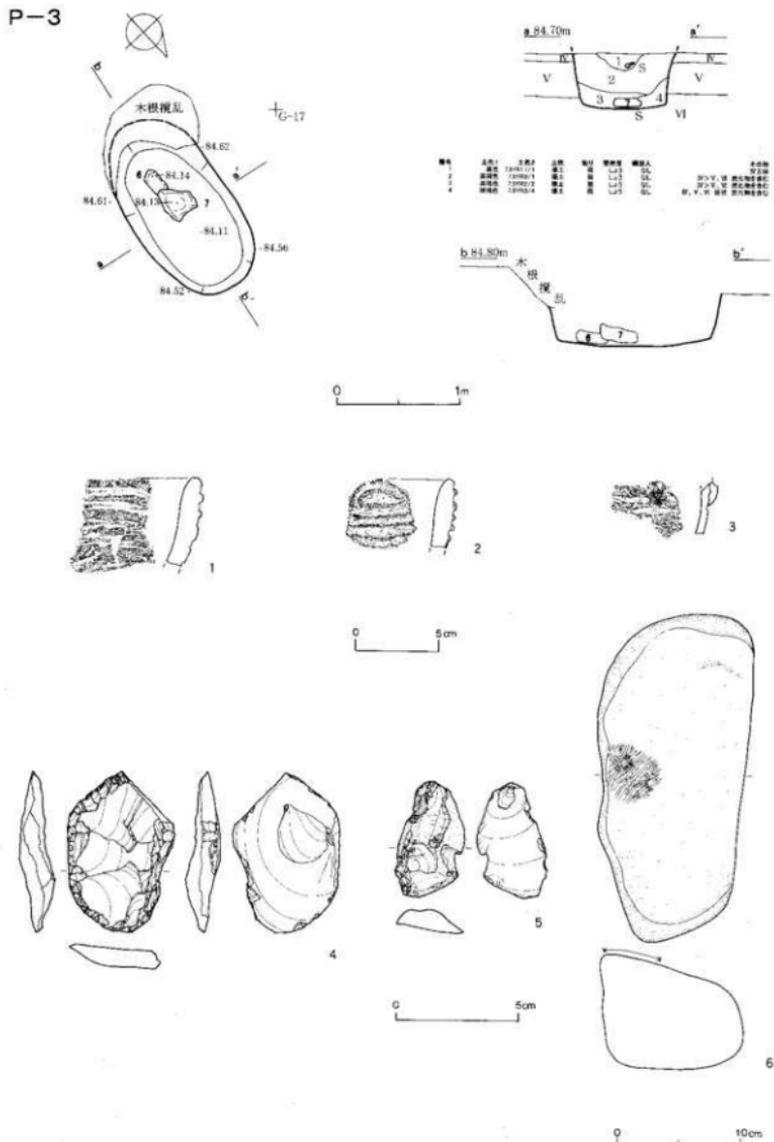
P-5 (図Ⅲ-4、図版2・7、表1・2)

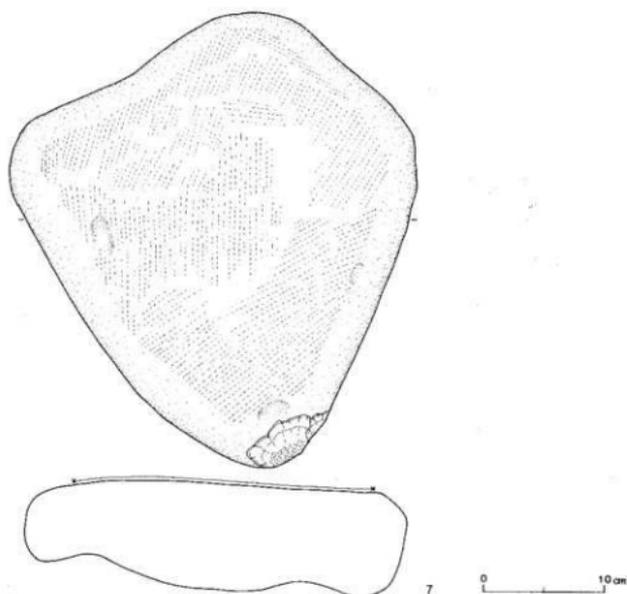
位置: F、G-14

規模: (0.87) × (0.62) / (0.82) × (0.70) / 0.34m

確認・調査: 包含層調査によって調査区南側の台地先端部に遺構、遺物が比較的多いことがわかり、

P-3





図III-3 P-3 (2)

この周辺で遺構の有無を確かめる精査を行った。遺構の可能性がある暗色の落ち込みの半載を行って
いたところ、風倒木とP-6によって壊された土壌を検出した。

覆 土：1～6層に分けた。黒褐色～褐色を呈する。自然堆積による覆土であると考えられる。

形 態：平面は円～楕円形を呈していたと考える。壁の立ち上りは明瞭である。

付属遺構：なし

遺物出土状況：墳底からたたき石が1点出土した。

時 期：遺構周辺の遺物出土状況や遺構の検出面などから縄文時代中期前半の遺構である。（袖岡）

掲載遺物：1はたたき石。円礫の下端部を使用している。

P-6（図III-5、図版2・3、7、表1・2）

位 置：F、G-15

規 模：2.53×2.24/2.26×1.88/0.50m

確認・調査：包含層調査によって調査区南側の台地先端部に遺構、遺物が比較的多いことがわかり、
この周辺で遺構の有無を確かめる精査を行った。広範囲に暗色の落ち込みが見られたので、土層観察
用に、この落ち込みに掛る土層観察用のベルトを設定し掘り下げを行った。調査の結果、明瞭な掘り
込みと墳底を検出し土壌と認定した。

覆 土：1～8に分層した。黒色～灰褐色を呈する。自然堆積によるものと考えられる。

形 態：平面形は隅丸に近いような楕円である。墳底は2段になっている。土壌の改築によるもの
と考えられる。

付属遺構：焼土を検出した。焼土粒と炭化物を含む土と被熱し褐色化した土の塊とに分けられる。この場所で焼成を受けた焼土ではないものと考えられる。

遺物出土状況：覆土中よりⅢ群a類土器5点、Uフレイク1点、フレイク2点、扁平打製石器1点出土している。

時期：周辺の遺構、遺物と覆土中の遺物から縄文時代中期前半の遺構であると考えられる。(袖岡)
掲載遺物：1はⅢ群a類、深鉢形土器の胴部破片。R Lの斜行縄文で、端部の結節が観察できる。2、3は頁岩のフレイク。4はUフレイク。剥片の縁辺に僅かな刃部をもつ。右側縁の刃部に刃こぼれが見受けられる。5は扁平打製石器。全周を打ち欠いて整形している。下端部にすり面はなく、鋸歯状である。

P-7 (図Ⅲ-6・7、図版4、表1・2)

位置：G、H-15、16

規模：2.46×2.12/1.68×1.54/0.64m

確認・調査：包含層調査によって調査区南側の台地先端部に遺構、遺物が比較的多いことがわかり、この周辺で遺構の有無を確かめる精査を行った。暗色の落ち込みが見られたため半載したところ明瞭な掘り込みと壁の立ち上りを確認し土壌と認定した。

覆土：1～12層まで分けた。黒色～明褐色を呈する。V層、VI層を多く含み、澆った土が主体であり、埋め戻しによるものと考えられる。覆土中からは焼土を検出した。ここで焼成を受けているものではなく、埋め戻す際に入れられたものと考えられる。

形態：平面は、楕円形に先端ビットのような張り出しを持つ形である。壁は所々わずかにオーバーハングしながら立ち上がる。墳底は柱穴周辺と先端部の張り出しを除き平坦である。先端部の張り出しは1段高くなり、柱穴の周辺の墳底は浅く落ち込んでいる。墳底のほぼ中央には燻化したような炭化物の広がり張り付くように認められた。

付属遺構：墳底からは柱穴状の小ビットを2ヶ所検出した。いずれも直径30cm、深さ50cm、覆土の堆積状況もほぼ同様である。土壌の上層構造を支えたものの痕跡かと推測する。

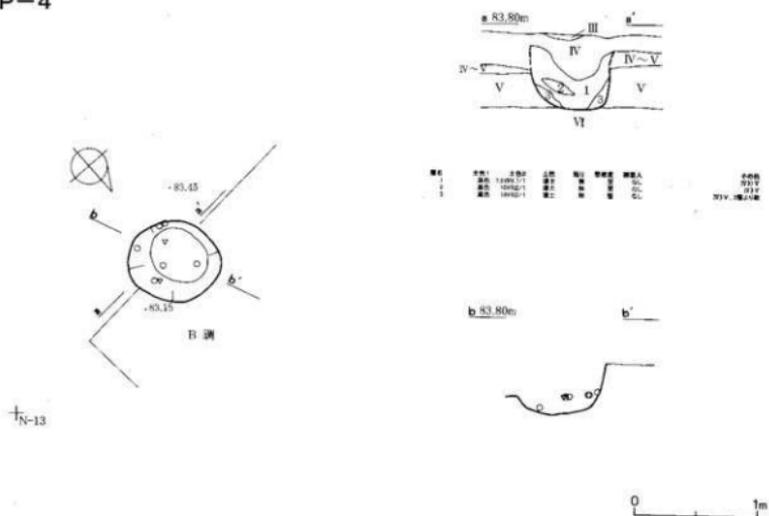
遺物出土状況：覆土中よりⅢ群a類土器29点、フレイク1点、たたき石1点、扁平打製石器1点、台石2点出土している。

時期：周辺の遺構、遺物と、埋め戻しの覆土中からⅢ群a類土器が出土したことから縄文時代中期前半の遺構である。

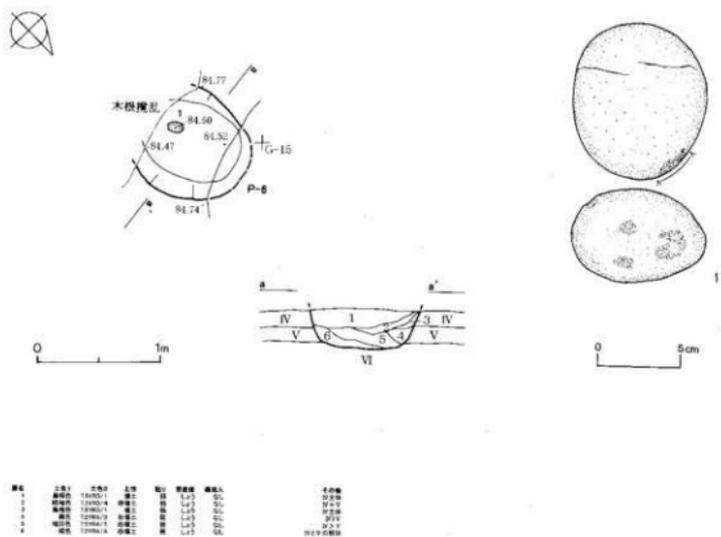
(袖岡)

掲載遺物：1a～1cは同一個体破片。口唇上に地文の縄文と同じ原体の閉端部による深い刻みが入られる。地文は羽状縄文が基本となって施文され、端部の結節が縄線のように見えるようになっている。2は小形と見られる深鉢形土器の突起部分。地文の縄文に細い貼付帯によって施文される。貼付にも縄線によって文様を加えられる。突起頂部以外の口唇は剥落している。3a、3bも小形の深鉢形のもの。摩滅により地文は判然としない。4は質の悪い頁岩製のフレイク。原石面の左端部に僅かな刃部がある。5は自然礫の上下端を使用したたたき石。6は扁平打製石器。左右両辺は両面から調整を加えられる。下端部は剥離の後、擦った様子が窺える。7は礫。8は熱を受けた台石。1面のみの使用である。右上部に黒色物が付着するが、実体顕微鏡による観察ではP-1の礫付着物に似る。

P-4

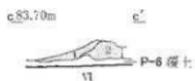
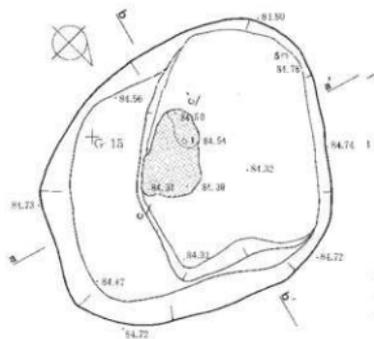


P-5

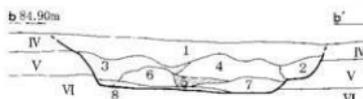


図III-4 P-4・P-5

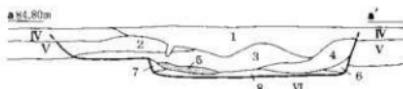
P-6



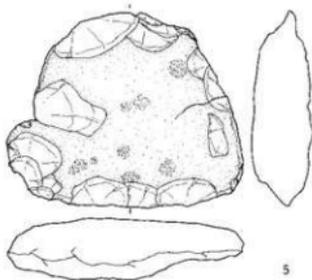
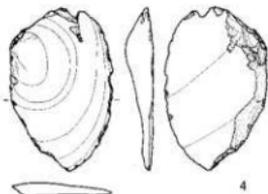
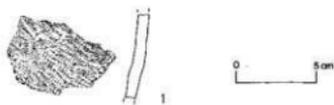
番号	土層名	土層記号	土層色	土層質	土層厚	土層深	土層底	土層頂	土層底	土層頂	土層底	土層頂
1	表土	T1000-1	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
2	表土	T1000-2	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
3	表土	T1000-3	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
4	表土	T1000-4	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
5	表土	T1000-5	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
6	表土	T1000-6	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
7	表土	T1000-7	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
8	表土	T1000-8	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
9	表土	T1000-9	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
10	表土	T1000-10	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1



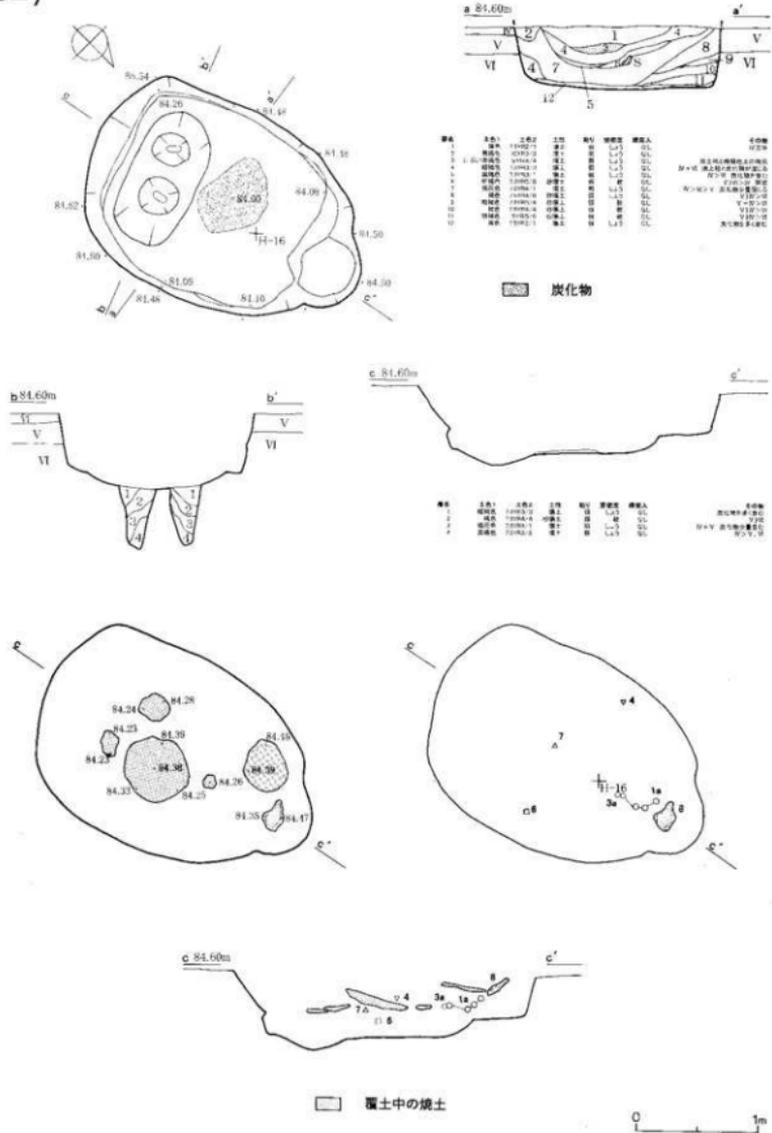
番号	土層名	土層記号	土層色	土層質	土層厚	土層深	土層底	土層頂	土層底	土層頂	土層底	土層頂
1	表土	T1000-1	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
2	表土	T1000-2	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
3	表土	T1000-3	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
4	表土	T1000-4	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
5	表土	T1000-5	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
6	表土	T1000-6	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
7	表土	T1000-7	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
8	表土	T1000-8	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
9	表土	T1000-9	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
10	表土	T1000-10	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1



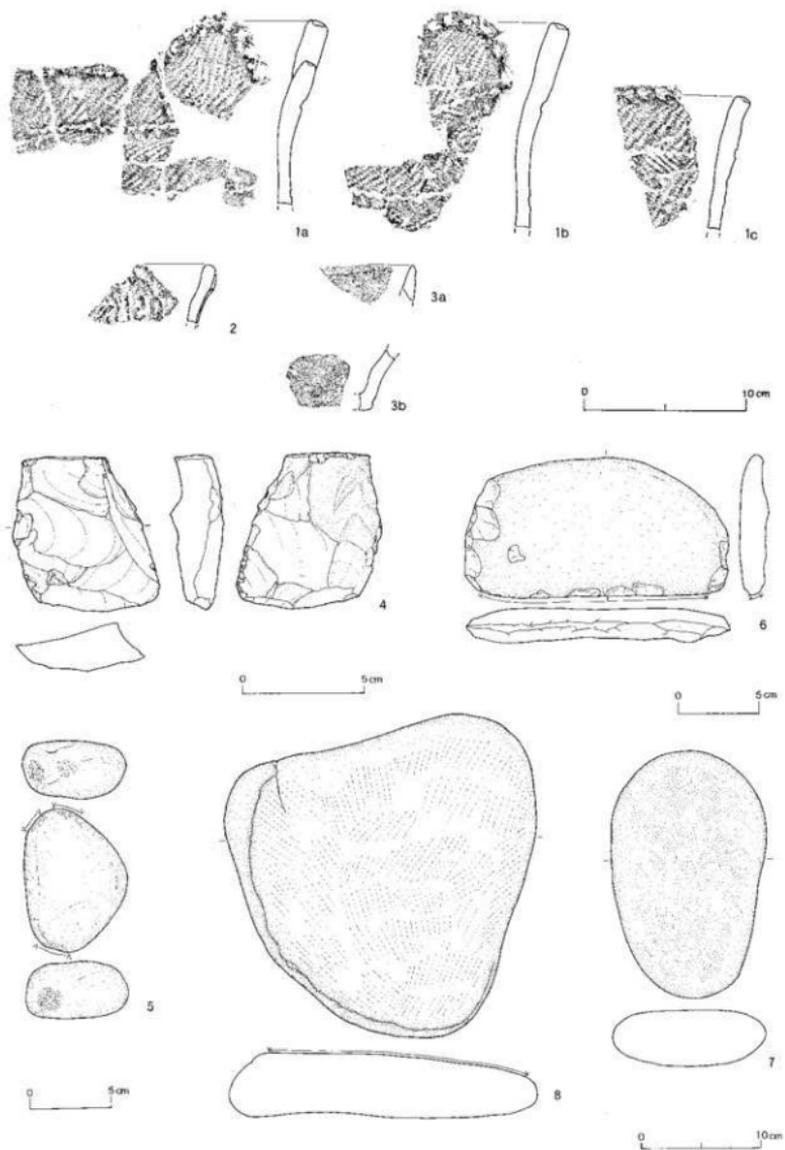
番号	土層名	土層記号	土層色	土層質	土層厚	土層深	土層底	土層頂	土層底	土層頂	土層底	土層頂
1	表土	T1000-1	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
2	表土	T1000-2	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
3	表土	T1000-3	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
4	表土	T1000-4	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
5	表土	T1000-5	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
6	表土	T1000-6	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
7	表土	T1000-7	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
8	表土	T1000-8	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
9	表土	T1000-9	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
10	表土	T1000-10	黄褐色	粘土	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1



P-7



図III-6 P-7 (1)



IV 包含層出土の遺物

1 土器

包含層出土の土器は縄文時代中期前半に属するⅢ群 a 類土器が最も多く破片数にして3,710点出土している。ついで多いのが縄文時代前期に属するⅡ群 b 類土器で245点、縄文時代晩期のⅤ群土器が38点出土している。調査区から検出した遺構は縄文時代中期前半に属する遺構が主体であり、遺構、遺物の分布域が重なる。Ⅱ群 b 類土器に関しては、Ⅲ群 a 類と検出区が重なるが、調査区南端の、工事用道路として削平されている部分などの台地際にその分布があったのではないかと推測する。

(1) 縄文時代前期の土器

Ⅱ群 b 類土器 (図Ⅳ-1-1-1~4)

円筒土器下層 d 1 式に相当するもの (図Ⅳ-1-1-2、図版10)

2は口縁部破片。口唇は摩滅し、剥落している。文様区画帯直下に縦絡文のようなものが観察できる。

円筒土器下層 d 2 式に相当するもの (図Ⅳ-1-1-3・4、図版10)

1・3・4は、口頸部文様帯を縄による刻みを加えた貼付によって区切ったもの。文様帯内には縄線文が施される。1・3・4の体部には多軸絡条体によって文様を加えられる。1は体部がほぼ筒形で、口頸部文様帯が外反する。口唇には縄によって刻みが加えられる。体部の施文後に器表面や底面は磨かれ光沢がある。3は口頸部文様帯と貼付がわずかに残る体部破片。4 a・bは同一個体と考えられるもの。体部は筒形で口頸部は外反しない。緩い波状口縁をなす。

(2) 縄文時代中期の土器

Ⅲ群 a 類土器 (図Ⅳ-1-5、Ⅳ-2-6~Ⅳ-9-64)

今回の調査で出土した土器の主体をなすものである。本来ならばⅢ群 a 類のなかでもさらに区分すべきであるが、包含層からの破片資料が多いため、内容を検討した結果、後述する大まかな区分にとどめた。

円筒土器上層 b 式に相当するもの (図Ⅳ-1-5、Ⅳ-5-17、図版10・11・13)

5は文様帯が外反する波状口縁と考えられるもの。馬蹄形瓦痕文が加えられる。口縁部文様帯は2本組の、縄による刻みの入った貼付によって区画される。文様帯は無文地貼付が施され、3本組の縄線がその間を挟むように施文される。胴部は羽状縄文が施される。17は山形の突起。無文地に縄による刻みの入った貼付が加えられる。突起を除く口唇上には棒状工具によって太い刻みが入る。

サイベツⅥ式 (円筒土器上層 c、d 式) に相当するもの (図Ⅳ-2-6~8・Ⅳ-5-16・Ⅳ-6-18~26、図版11・13・14)

6は突起が外反し、胴部がわずかに張り出す。底部は上げ底になる。突起を含む口縁部には縄による縦長の刻みが入る。地文の羽状縄文上に縄による刻みの入った貼付が突起周辺と、口縁部文様帯を区画するためのものがあつたとみられ、剥落している。7は平縁と考えられるもの。底部から直線的に立ち上がる。口唇は細い工具によって刻みが加えられる。地文は羽状縄文。底面には網代のような痕跡が観察できる。8は口縁が余り開かず、胴部下半が膨らみを持つ。突起を持っていたものと考えられる。口縁には縄による刻みが加えられる。地文は羽状縄文である。16 a~cは同一個体のもの。把手がつく山形の小突起を有する。口縁は外へ大きく開き、胴部は張り出し底部ですぼまる。文様帯は縄による刻みの入った貼付によって区画される。文様帯は無文で、中空円形の棒状工具による刺突が加えられる。貼付は口縁では波状に、突起下部で縦に貼り付けられる。18 a・bは同一個体破片で突起部分。穿孔されている。18 bはその把手部分。a・b共に貼付には縄線が加えられる。19~23は縄文地に太目の貼付によって文様が施される土器で、19・20の貼付には縄による刻みが、21~23は貼付に縄線が加えられる。21は突起部分である。20・22・23は突起に穿孔をしている。24は平縁で外に開くもの。口唇には縄によって刻みが加えられた波状の貼付がある。胴部は羽状縄文が施文される。25は波状口縁のもの。波頂部から下垂する貼付があつたものと推測する。26は突起に穿孔をしている。口縁と突起下部に縄による刻みが加えられた貼付がある。地文は羽状縄文であるが、整然とした羽状をなしていない。

サイベツVII式に相当するもの (図Ⅳ-3-9・Ⅳ-4-15・Ⅳ-6-27~54、図版11・12・14~17)

施文の違いにより下記の3つに分けた。

細い貼付帯によって文様が施されるもの (図Ⅳ-7-33~38、図版15・16)

33は小形の深鉢形のもの。地文の斜行縄文に、細い粘土紐による貼付が加えられる。小振りな山形突起を有する。口唇、貼付帯上には縄線による施文があったと見られるが、表面摩滅が著しく、不明瞭である。34は突起頂部が欠損する。36は小形の深鉢形で胴部破片。37は平縁に棒状の突起とそこから下垂する把手が付く。突起、把手には細い波状の貼付が加えられる。口縁下部に幅広の貼付を持ち、口唇と矢羽根状になるように細い貼付が加えられる。

沈線を有するもの (図Ⅳ-3-9・Ⅳ-7-39~48、図版11・16)

9の外反する4つの突起は穿孔されている。突起上部には3本の縄線が加えられた貼付がある。突起を除く口唇上には2本組みの縄による刻みが入られる。地文は結束第2種の羽状縄文が施される。突起周辺と胴部には半截竹管状の工具によって沈線が加えられる。40は棒状突起が窪むもの。真上から中空円形の棒状工具による刺突が加えられる。41・42は突起に貼付と沈線を有するもの。41は貼付に細い棒状工具による刻みが入り、半截竹管状の工具によって沈線が加えられる。43は突起頂部に中空円形の棒状工具によって刺突が加えられるもの。45は口唇に縄による刻みが入る。46は山形の突起に棒状工具による刻みが入る。47a・bは同一個体破片。小形の深鉢形とみられる。鋸歯状の沈線を施文したもの。48は突起を欠損する。口唇には縄による刻み加えられる。

文様帯の区画がなく、突起周辺に文様が施されるもの (図Ⅳ-3-10~Ⅳ-5-15・Ⅳ-6-27~Ⅳ-8-54)

施文、地文の違いから更に下記の5つに分けた。

① **縁結文が施されているもの** (図Ⅳ-3-10・Ⅳ-6-27・31・32、図版12・14・15)

10は突起が棒状で凹むもの。27は平縁に小突起が付けられるもの。縄線が加えられる。口唇上には縄による刻みが入る。31は切り出し状の口縁に縄による刻み加えられる。32は比較的細形の深鉢型。突起と口唇上には細い棒状工具によって刻み加えられる。

② **突起に簡素な貼付があるもの** (図Ⅳ-6-28・29・30、図版14)

29は縄による刻み加えられる。30では地文と同じ複節の縄文が施される。29は山形の小突起。突起頂部から縦に縄線が1条加えられる。

③ **地文が羽状縄文のもの** (図Ⅳ-8-49・50・52、図版16・17)

13は4つの山形突起を有していたもの。口縁は棒状工具によって刻まれ、地文は斜行縄文が施される。口縁はほとんど開かず、胴部が微弱に張り出す。底部付近と底面が良く磨かれ、光沢がある。49a・bは小形の深鉢。山形の突起を持つ。胴部は余り張り出さず、底部は広角度になって立ちあがるが、削りのような痕跡は見られず、雑なナデによって地文が消えている。底面は磨かれ光沢がある。口唇は縄によって刻まれる。50a・bは表面摩滅が著しい。突起を欠損する。口唇部に刻みが入り、切り出し状となる。52a・bは山形突起を有する。

④ **地文が斜行縄文のもの** (図Ⅳ-3-11・Ⅳ-4-12・15・Ⅳ-8-53~54、図版12・17)

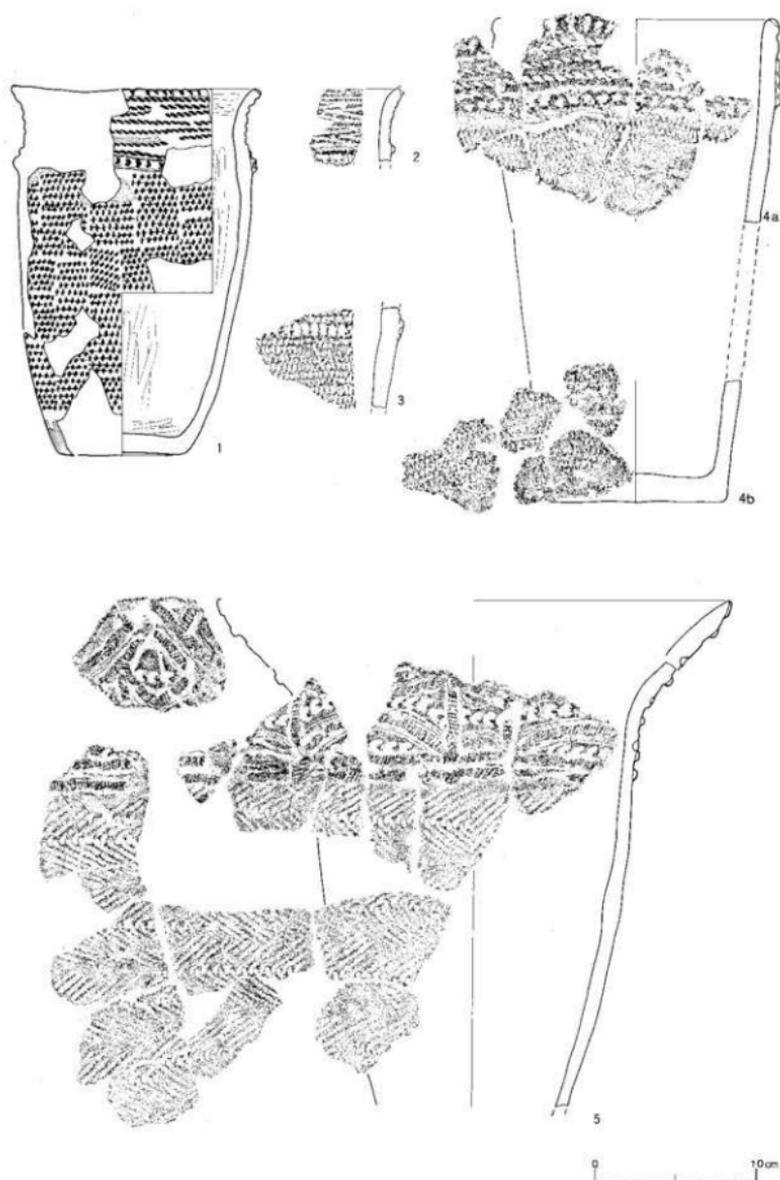
11は小振りな棒状突起を持つもの。地文は斜行縄文が胴部中間まで加えられる。突起直下には地文の縄文と同じ原体による縄線が2条施され、その下に下垂する突起状の貼付が見られる。12は小振りな棒状突起に把手がつくもの。突起や口縁は外反しない。15は台形になる突起を有していたと考えられる。開く突起には穿孔され、胴部は張り出す。地文は複節の斜行縄文。突起、突起下部と口唇に地文と同じ縄で刻み加えられた貼付がみられる。53・54は斜行縄文のもの。53a・bは口縁の断面が切り出し状となる。地文は整然としない斜行縄文で、底部付近と底面が磨かれ、張り出す。54a・bは突起を欠損するもの。突起下部や突起周辺に細い貼付によって文様が付けられているものと見られる。胴部は余り張り出さず、底部付近は磨かれる。地文は節が不明瞭な斜行縄文である。

⑤ **無文のもの** (図Ⅳ-4-14・Ⅳ-8-51、図版13・16)

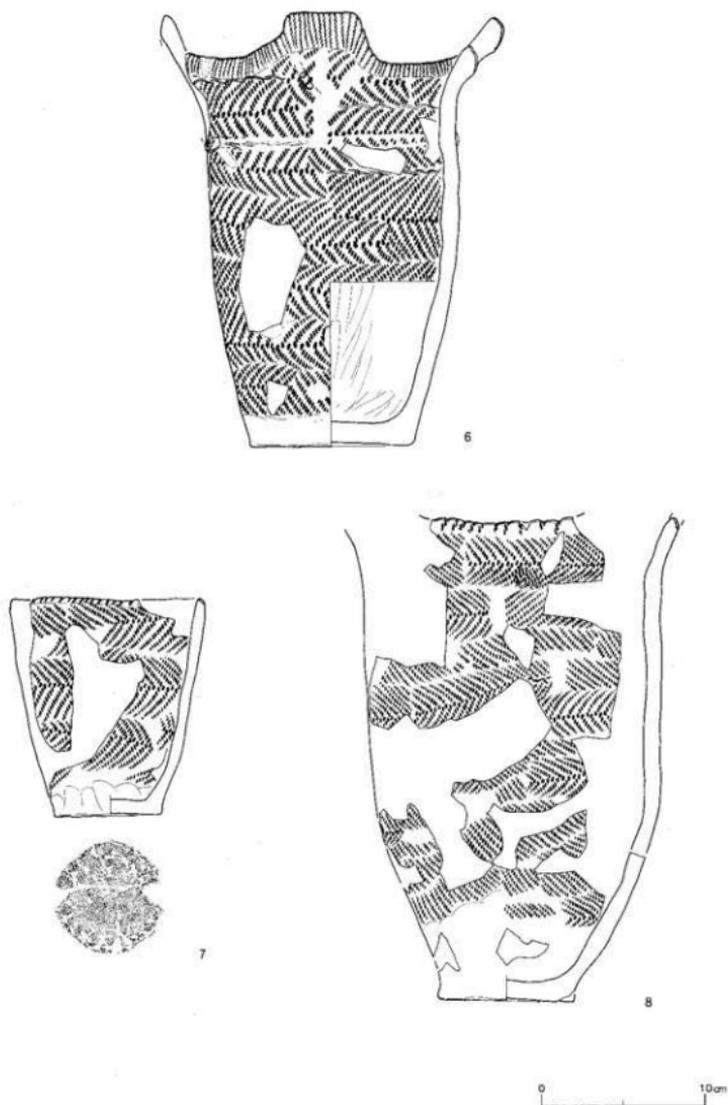
14、51は共に作りが粗雑で底部付近と底面が磨かれる。

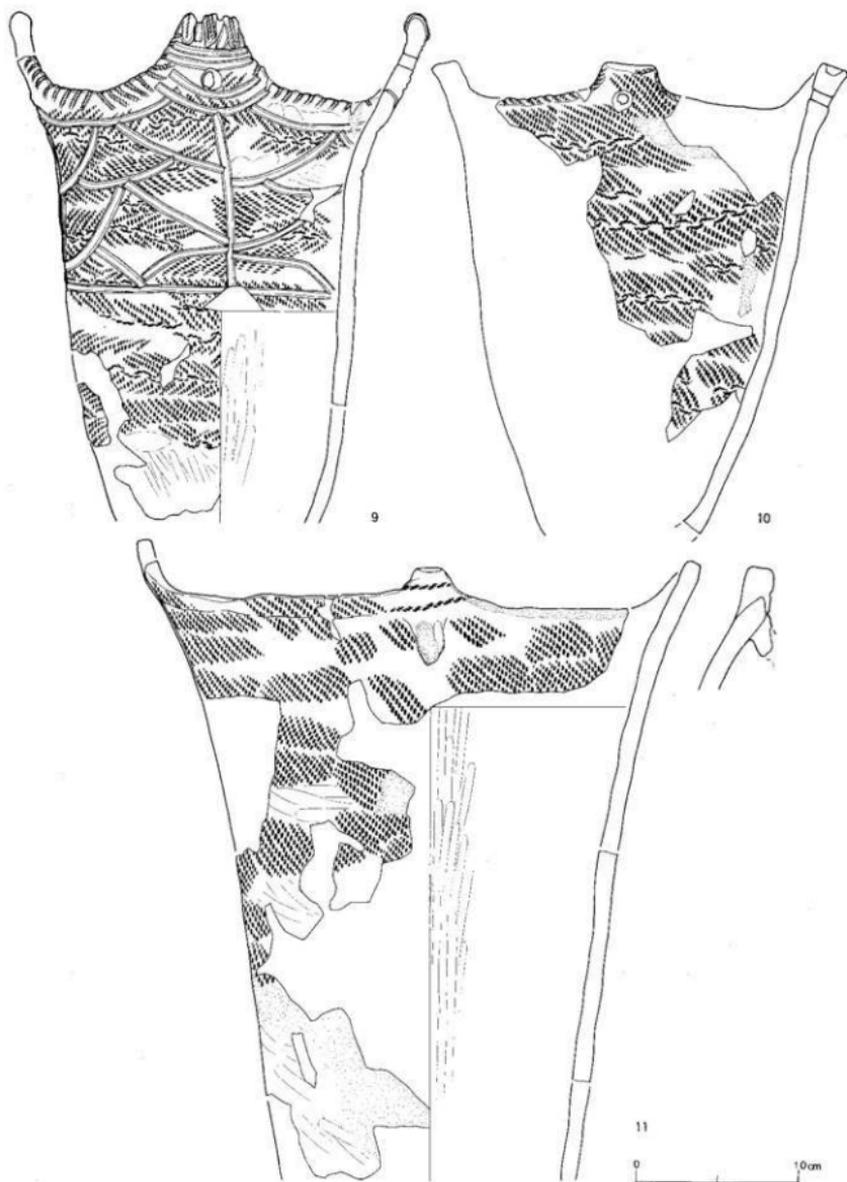
見晴町式またはそれに相当するもの (図Ⅳ-8-55~58、図版17)

55a・bは同一個体とみなされるもの。鋭角の山形突起に縦に貼付が加えられる。胴部は張り出し、底部は広角度で立ち上がる。口縁部は拓影図の突起部より右側にかけては口縁部を新たに粘土を貼り

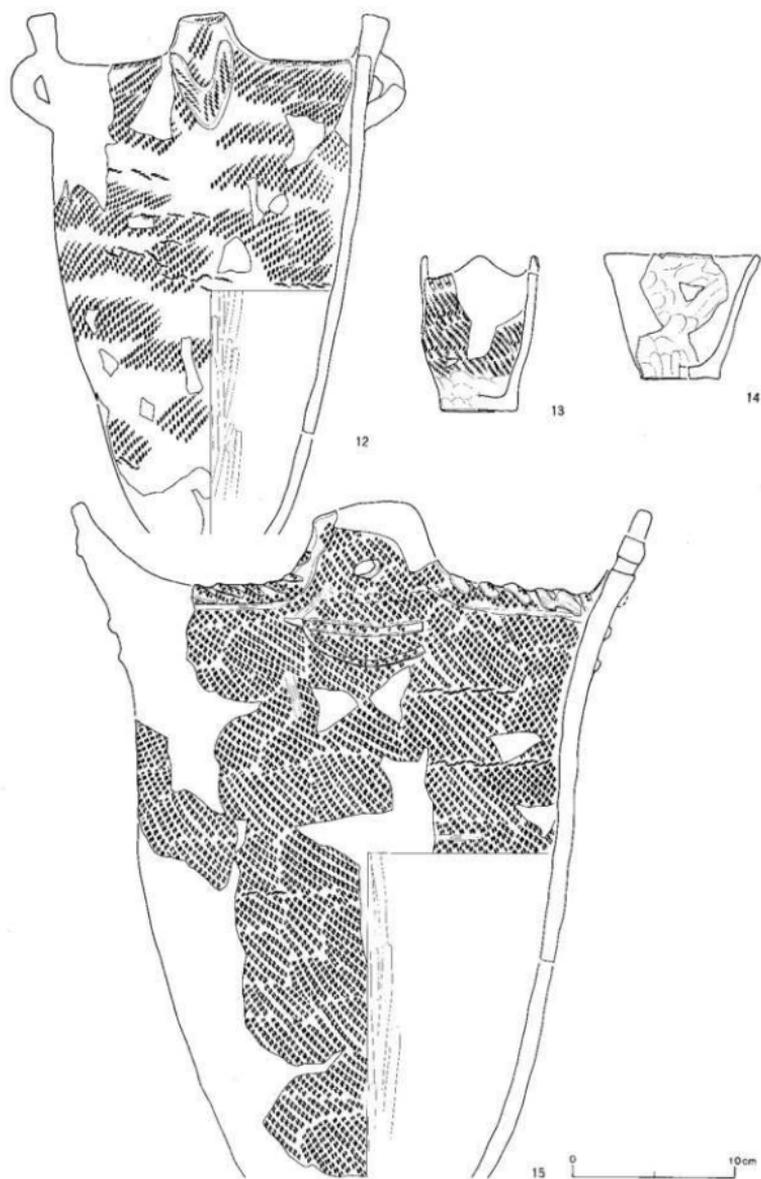


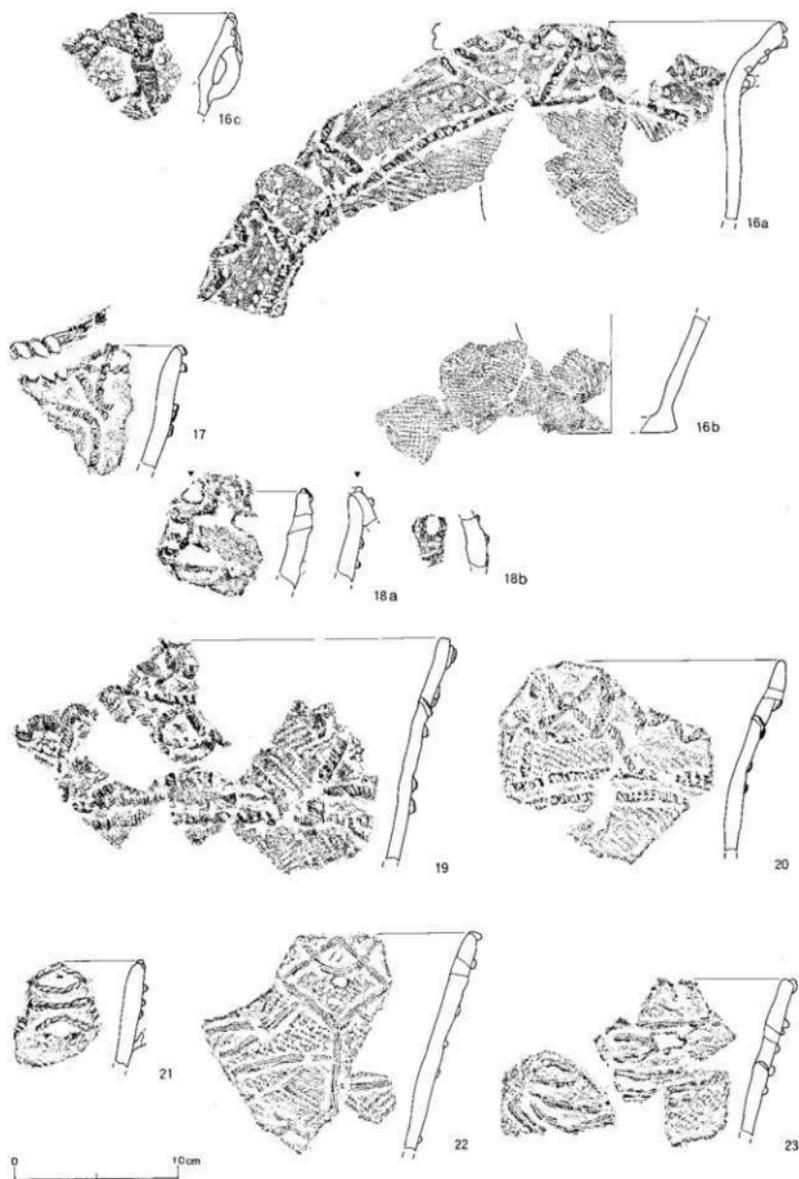
図IV-1 包含層出土の土器(1)





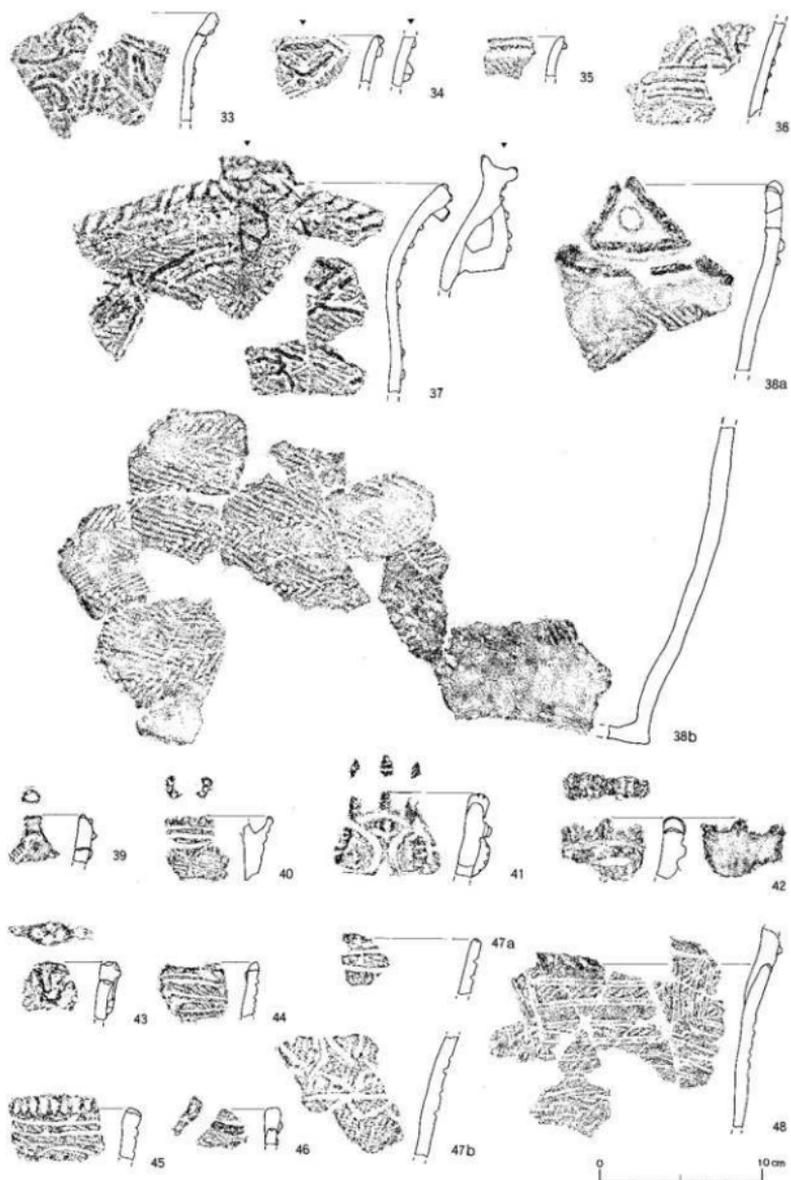
図IV-3 包含層出土の土器(3)



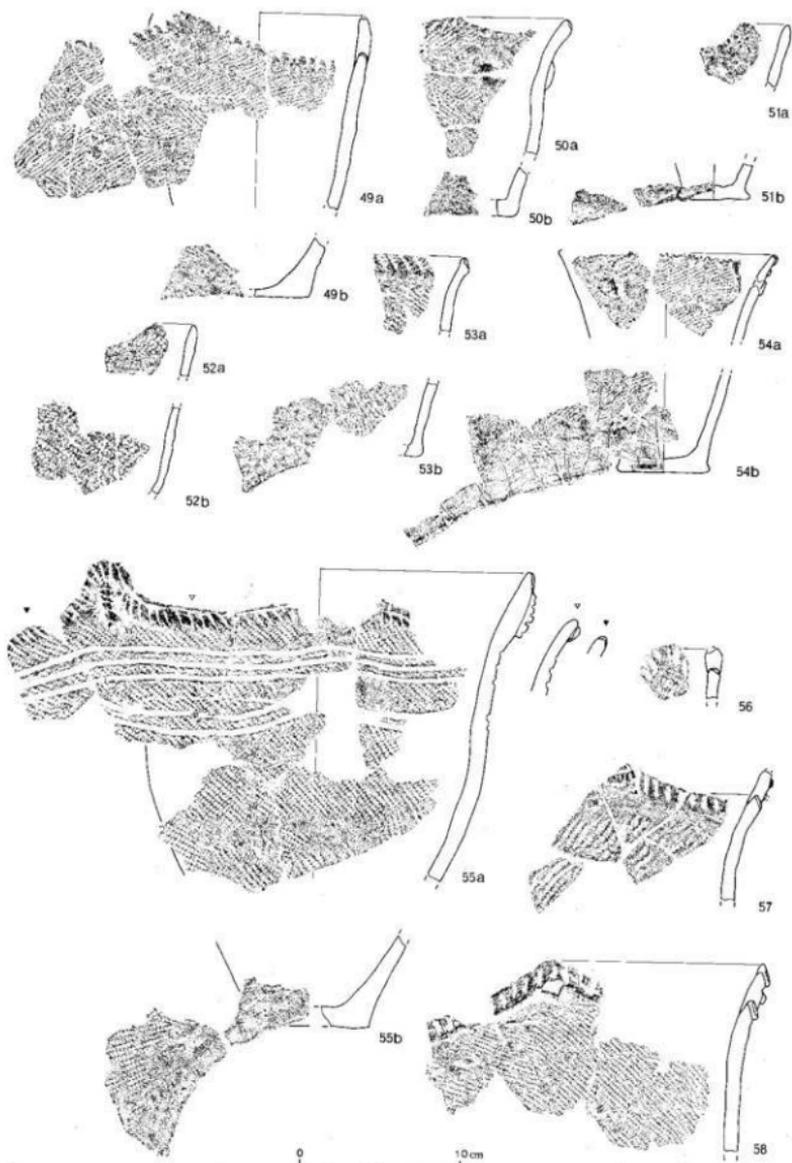


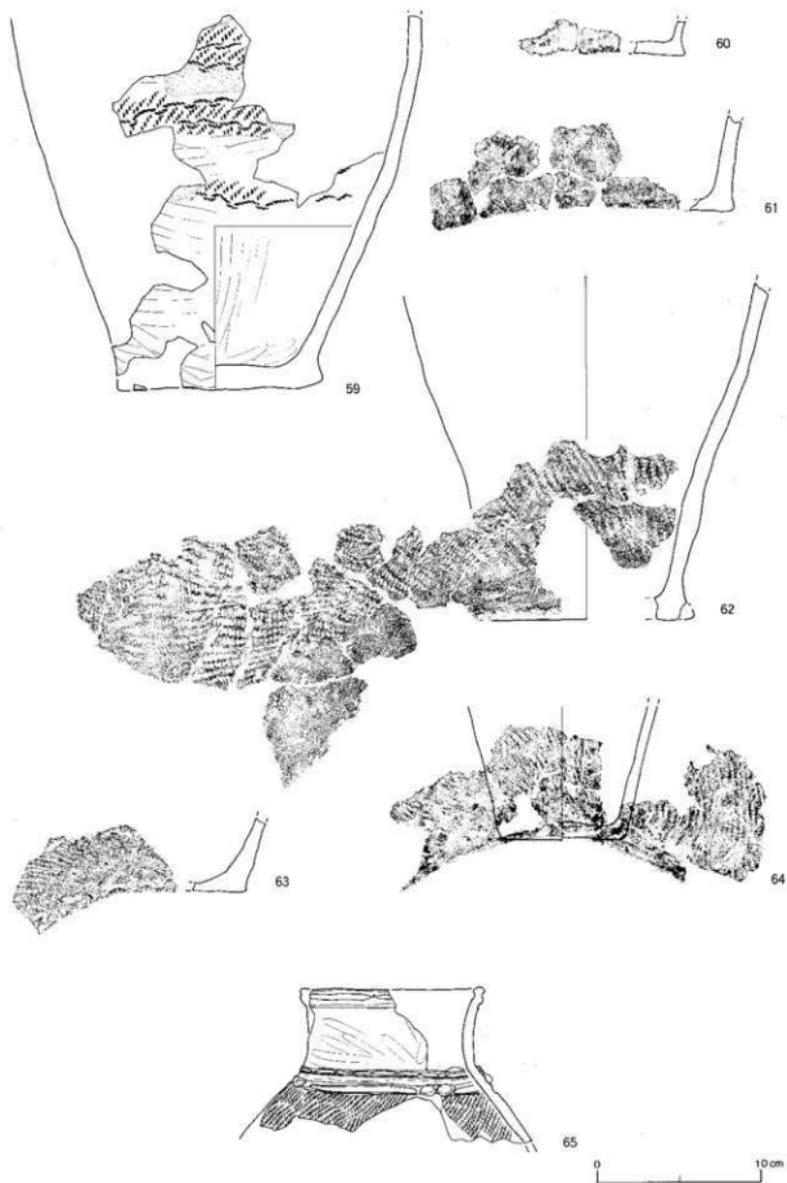
図IV-5 包含層出土の土器(5)





図IV-7 包含層出土の土器(7)

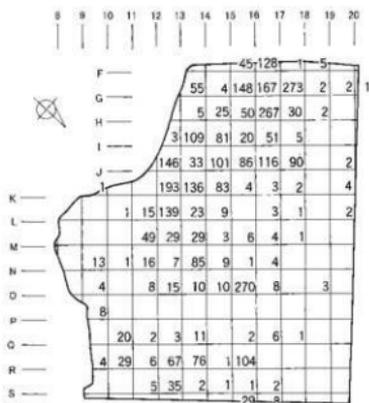
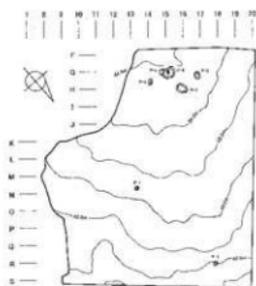




図IV-9 包含層出土の土器(9)

Ⅲ群a類土器

3,710点



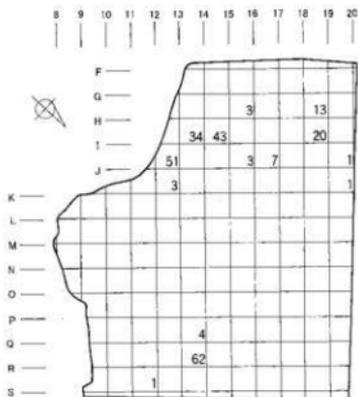
0 20m

Ⅱ群b類土器

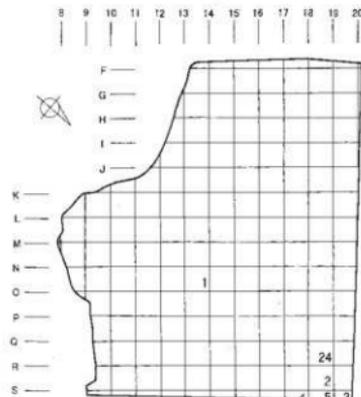
245点

V群土器

38点



0 20m



0 20m

付け雑に肥厚させ、縄による刻みが入られる。口縁部の調整は、突起より左側は口縁の断面が角に近い丸になる。地文は斜行縄文で、口縁に平行して横置する3本組の沈線が施され、その下位に突起間を繋ぐ2本1組の沈線が加えられている。58も山形の突起を持つもので、口唇部は縄による刻みが加えられた貼付によって肥厚させ切り出し状にしている。57は突起頂部を欠損するもの。口唇と貼付には細い棒状工具による刻みが加えられる。地文は斜行縄文。口唇の断面は切り出し状になる。56は山形の突起部分。棒状工具による刻みが加えられる。

底部のみのもの (IV-8-59~64、図版18)

59~62はいずれも底部にナデ調整が認められ、張り出す。60は小形のもの。62の地文は粗雑な斜行縄文。63は底部の立ち上りは広角度に立ち上がる。64は底部が張り出さず、磨きが底面にも施される。地文は斜行縄文。59は大型の深鉢型土器の底部。綾絡文のみを残す。

(3) 縄文時代晩期のもの

V群土器 (図IV-9-65)

調査区の北西端にわずかに出土する。

大洞C1、C2式に相当するもの (図IV-9-65、図版18)

65は壺形のもの。肩部から胴部に向かって強く張り出す。口縁部には口外帯が設けられ、沈線が加えられる。頸部は短くわずかに内傾する。肩部には間隔の短い沈線が加えられた貼付と沈線、突起が施文される。

2 石器

遺物合計点数は1127点だが、接合等を考慮すると個体数は1000点ほどになる。出土層位はほぼIV層のみと考えてよい。単一層のため、分層が出来なかったため層の上位と下位で遺物の傾向がどのように違うかは把握できなかった。遺物出土数が多くないので確かなことはいえないが、石鏃、つまみ付きナイフ、Uフレイクは調査区の北から南に延びる緩やかな沢地形を挟んで分布し、スクレイパー、フレイク、たたき石、すり石、扁平打製石器、石皿はその沢地形からより多く出土する傾向がある(図IV-18参照)。台石、砥石でM-15区、K-15区から多量の出土が有るものは、同一個体のものを含む破片を1点1点取り上げたからである。礫・礫片はほぼまんべんなく出土しているが、分布域はⅢ群A類土器に近く、これはこれらの遺物が人為的に持ち込まれた可能性もあることを示しているのであろうか。礫の609点を除いた石器組成率は図IV-18のとおりである。剥片石器ではフレイク類を除くとつまみ付きナイフ、スクレイパーが多く、礫石器では扁平打製石器についてたたき石、すり石が多い。石材等は表6にまとめてある。

石鏃 (図IV-11-1-1~10、図版19)

11点出土中10点を図示した。欠損品の10を除き全て有茎のものである。1~8は反しが不明瞭なもの。9は反しが明瞭なものである。

石鏃 (図IV-11-11、図版19)

1点出土。縦長剥片を簡素に加工調整して刺突部が作られている。先端は欠失する。

つまみ付きナイフ (図IV-11、12-12~24、図版19・20)

15点出土中13点を図示した。12は両面調整、13、14は片面調整、15~22は両縁調整のものである。12~23は縦長である。24は片面加工で、背面に周縁加工が施された横長のもの。12はVII層出土の唯一の遺物で、全面に丁寧な調整が施されている。22、23は剥片の縁部に簡素な加工を施したものである。

スクレイパー (図IV-12、13-25~44、図版20~22)

24点出土中20点を図示した。25~28が片面調整、29~33、39が両縁調整のもの、34~38が片縁調整のもの、40は下部に刃部を持つもの、41~44は片縁調整の簡素な刃部を持つものである。

40は刃部角が浅く、着柄して使うナイフの可能性も有る。44は原石面が多く残り、いわゆる棒状原石のようである。

R・Uフレイク (図IV-14-45~50、図版23)

Rフレイク4点出土中1点、Uフレイク18点出土中6点を図示した。45は背面の縁部に僅かに調整を加えたもの。46は背面の右側縁と腹面の下縁に調整が加えられる。47、48はスクレイパー的なもので、

47は背面下部の剝離に歯潰れが認められる。49はつまみ付きナイフにも見えるが、つまみ様の部分は意識して作られたものではなくUフレイクとした。腹面右側縁に使用痕があり、ナイフとしての機能が考えられる。50は右側縁に僅かに刃部が作り出されている。

石核 (図Ⅳ-14-51、図版23)

5点出土中1点を図示した。打面転移のないもので、1ヵ所礫表皮面を残し、推測される原石の大きさはソフトボール大ほどである。

石斧 (図Ⅳ-14-52~55、図版23)

7点出土中4点を図示した。52は敲打整形の後、全面を磨いたもので、刃部はかなり磨耗している。53は唯一の完型品で刃部破損の後、刃部の一部を再研磨している。54、55は研磨加工痕が明瞭に認められる刃先である。

たたき石 (図Ⅳ-15-56~59、図版24)

42点出土中4点を図示した。56は角柱状礫の一端を使用したもの。57は扁平礫の一端を使用し、中央部には皿状のくぼみがある。58は扁平な円礫の一端を使用している。59は礫器ともいうべきもので、礫の下部に鋸歯状の刃部を作り出したもので、刃部先端に使用による歯潰れが残る。

すり石 (図Ⅳ-15-60~63、図版24)

25点出土中4点を図示。60、61は北海道式石冠と称されるもので、60は全面敲打整形で作られている。61は握り部の敲打加工が一周せず長側縁だけに見られる。62は扁平な円礫の長辺を使用しているが、擦痕だけではなく敲打痕も見受けられる。63は円礫のほぼ全面に擦痕の残るものである。

扁平打製石器 (図Ⅳ-16-64~69、図版24)

78点出土中6点を図示した。完形品に限ってみると、下端部に敲打痕と擦り面のあるもの9点、下端部に敲打面のあるもの10点、下端部に刃部のごとき加工のあるもの9点となる。礫の片面のみを加工したものが多い。長軸と短軸の比を短軸を1として取ると、敲打痕と擦り面のあるもの1.84:1、敲打面のあるもの1.65:1、刃部のごとき加工のあるもの1.54:1で、明らかに後者が丸い傾向が得られた。これは素材自体の形状も大いに関係するが、使用による消耗、刃部再生等の作業過程に起因する可能性とも考えられる。64、65は下端部に敲打痕と擦り面のあるもの。66、67は下端部に敲打面のあるもの。68、69は下端部に擦り面も敲打面もなく刃部のごとき加工のあるものである。

石皿・台石 (図Ⅳ-17-70~74、図版25)

石皿7点。台石45点出土。しかし台石の34点は接合するので実数は12点である。70は扁平な素材の両面を使用している。72は厚みのある円形の礫を素材とし、両面に使用痕が認められるが、一面を主に利用し、裏面はほぼ中央にもくぼみがある。73、74は共に表面に若干の研磨整形痕がある。73は焼けて表面が剝離している。74は下端部を整形し、長軸面も稜をつけるかのように剝離されている。

砥石 (図Ⅳ-17-75、図版25)

96点出土中1点を図示した。その内90点は同一個体なので実際は7点の出土である。75は棒状の亜角礫を用いている。砥面は平滑で1面だけである。

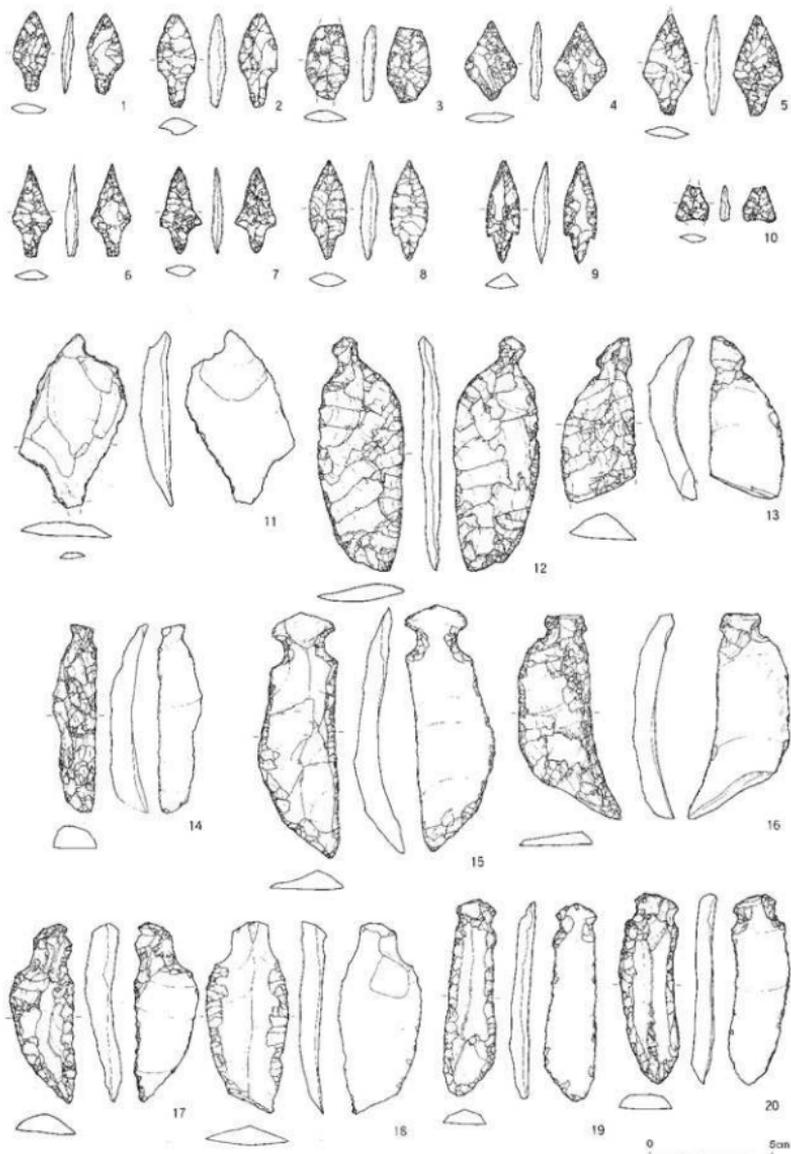
礫 (図Ⅳ-17-77~79、図版25)

609点出土中3点を図示した。礫の大部分のものがこのようなものであるという意味で掲載した。ほとんどのものが安山岩である。僅かに泥岩、流紋岩が混ざる。出土礫中80%以上が300g未満のものである。中には800gを超える大型のものが18点あるが、加工痕のないものでも大型のものは何らかの人為的行為があった可能性は残っている。礫片のうち打点のあるものなどは扁平打製石器、すり石、たたき石等の製作、使用によるものとしてそれらの機種の中に含めた。

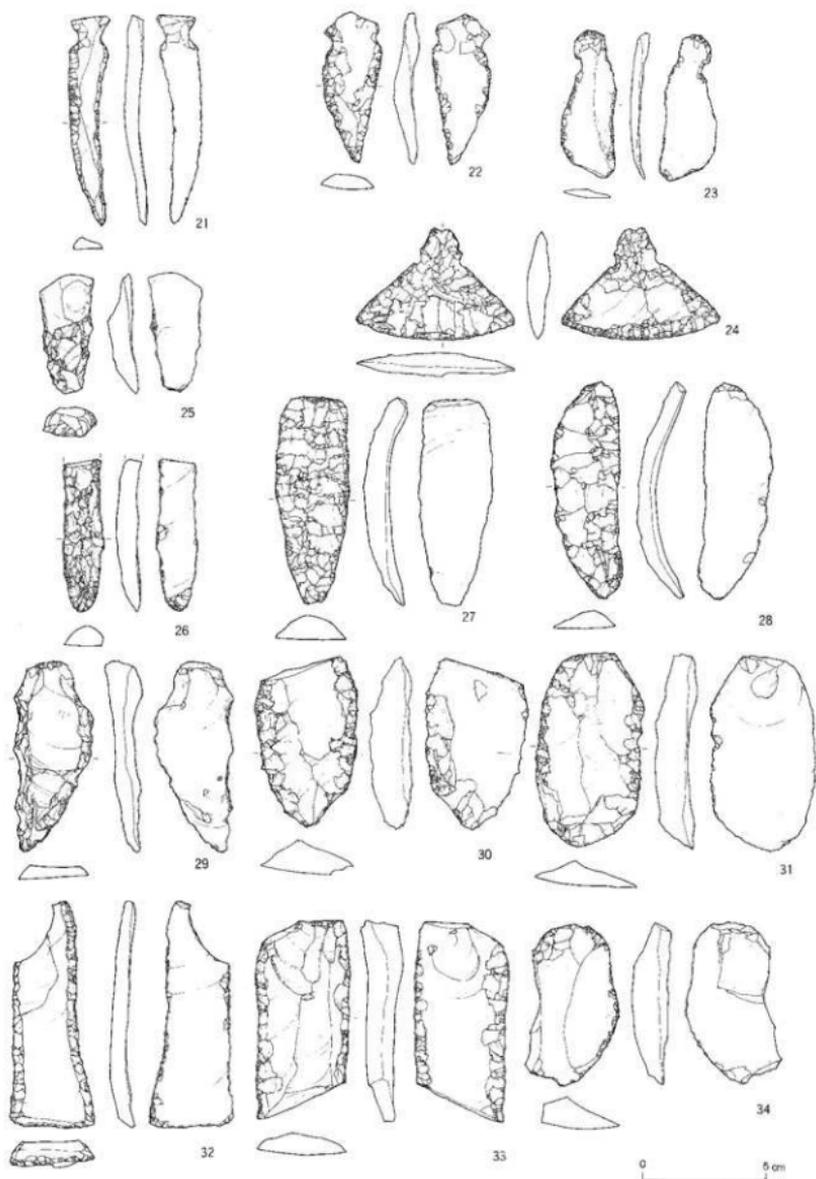
3 土・石製品 (図Ⅳ-17-79・80、図版25)

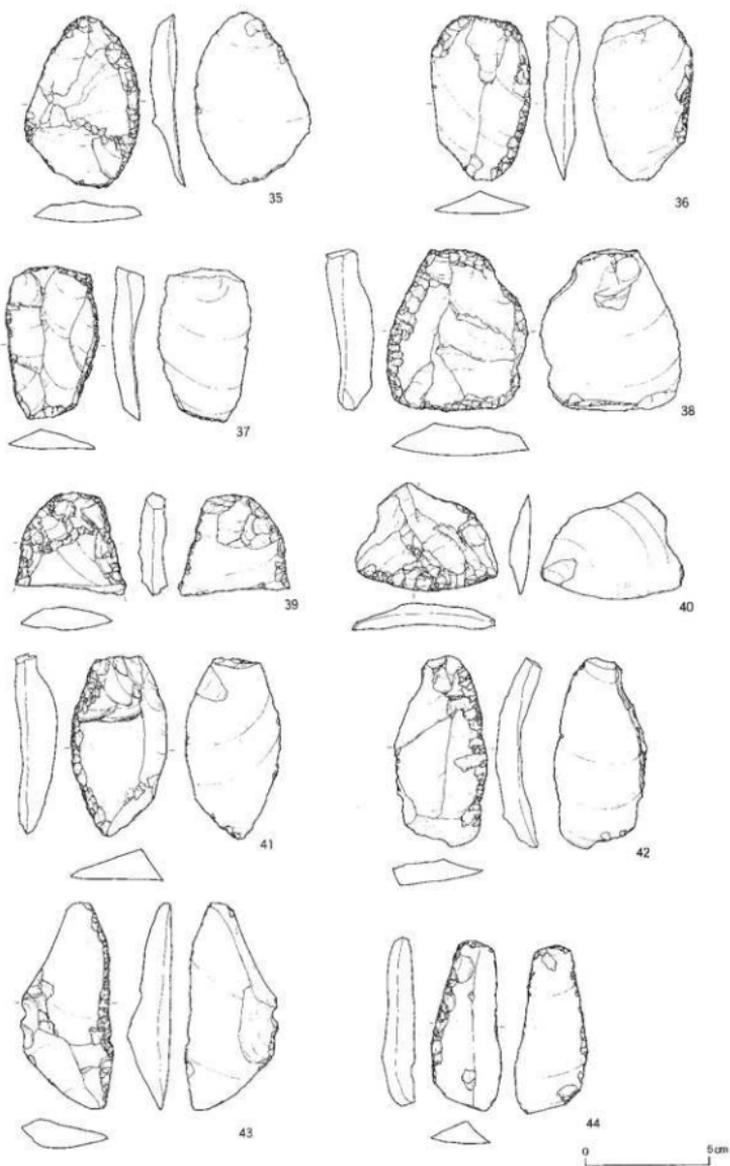
土製品 79はスタンプ状のもので上部を欠損する。円柱状で底部に張り出しを持ち、複節の縄文が施されている。底面は円形で無文である。同様の土製品は「キウス5遺跡(4)B・C地区」において報告、集成したものに類例がある。

石製品 80は上面と右側縁を平らに加工し、上面の中央に錐状のもので厚さの1/3程まで穿孔してある。軽石製。

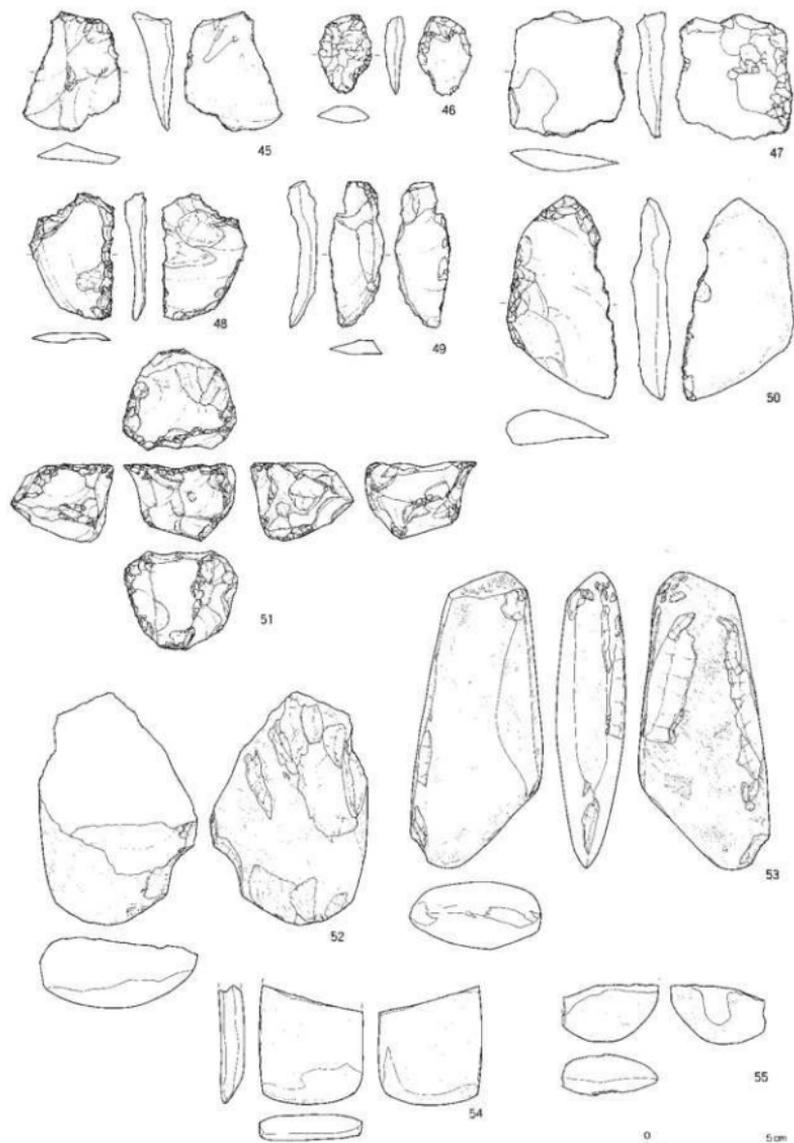


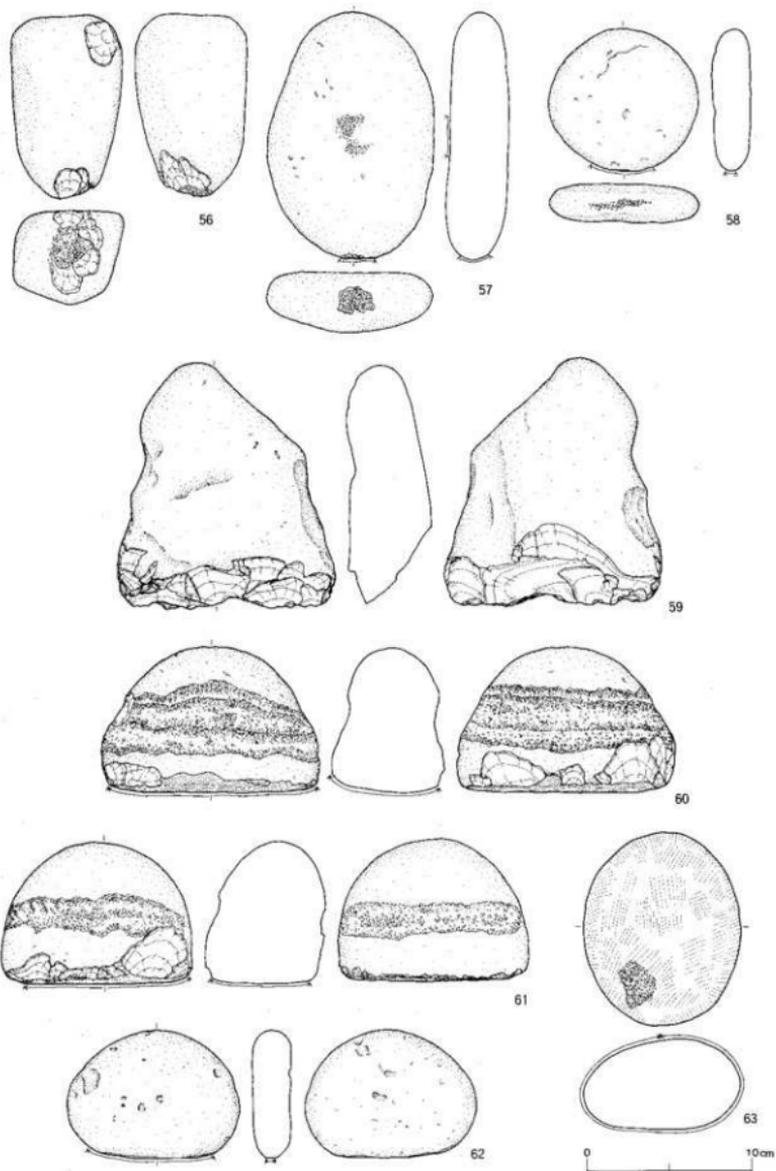
図IV-11 包含層出土の石器(1)



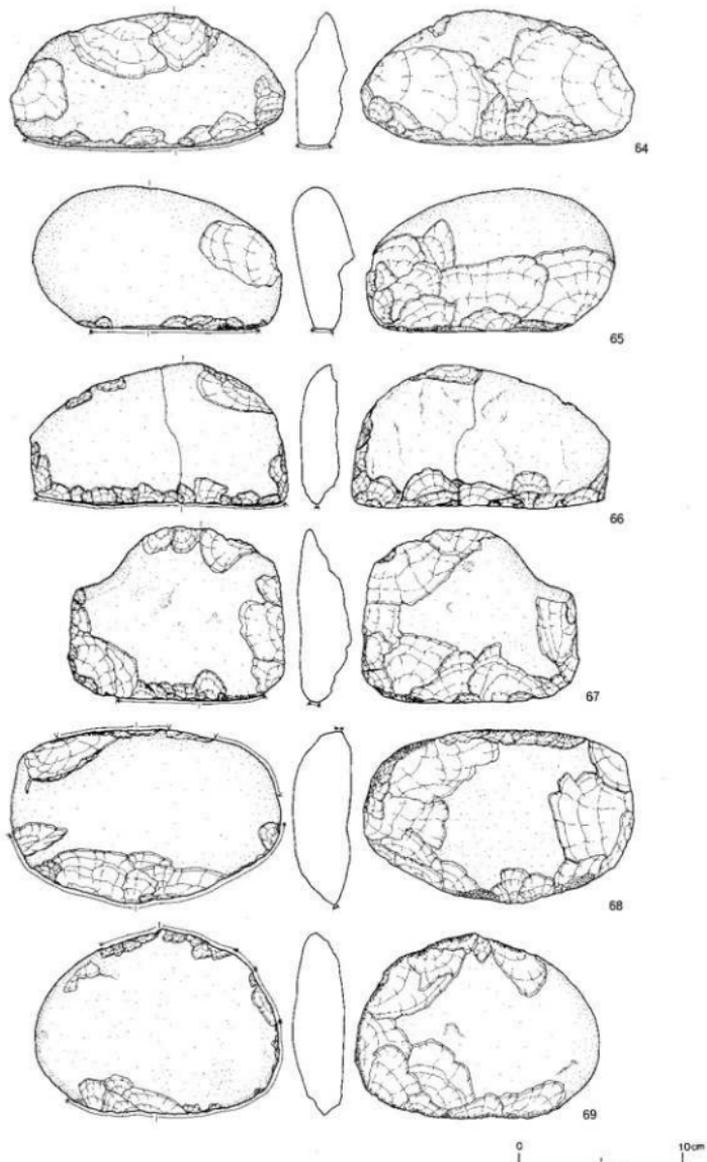


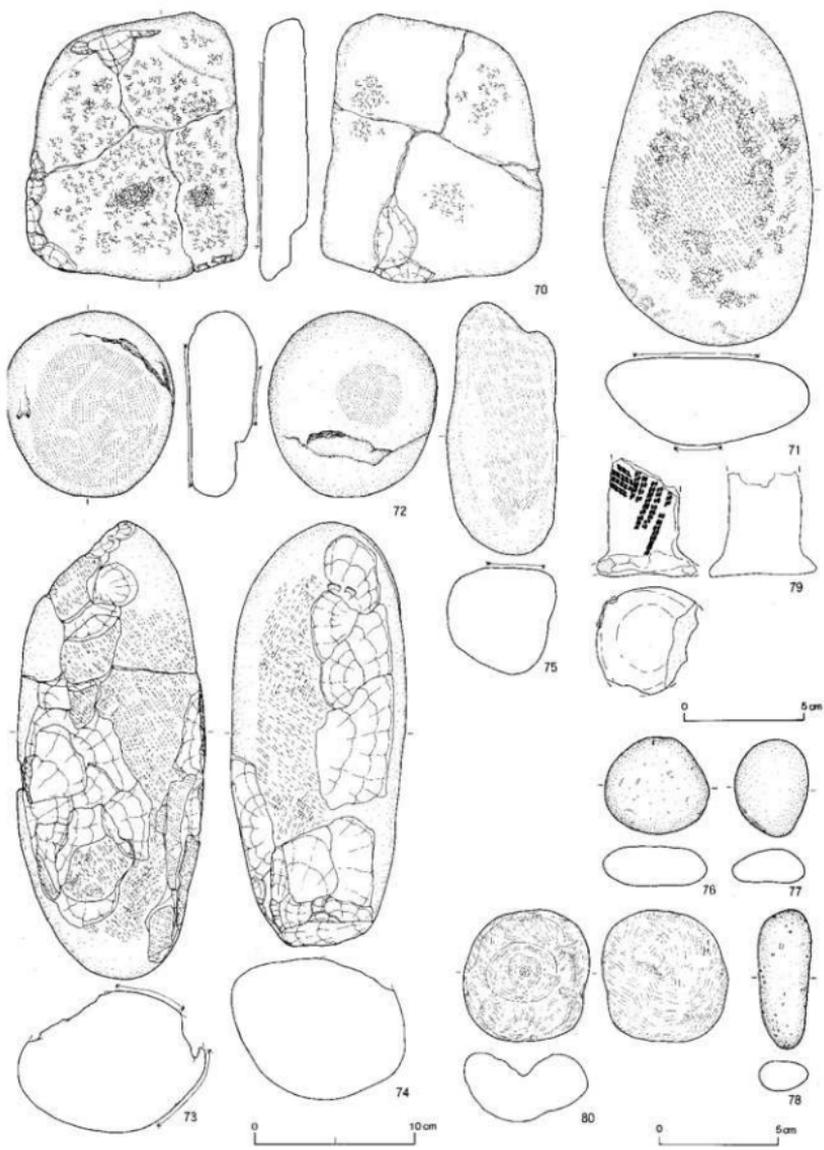
図IV-13 包含層出土の石器(3)





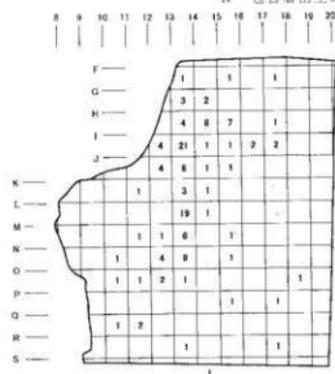
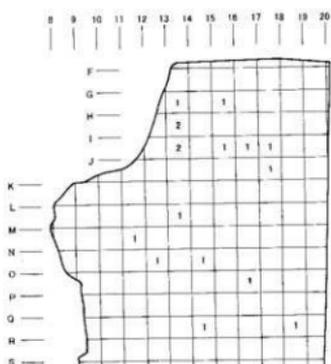
図IV-15 包含層出土の石器 (5)



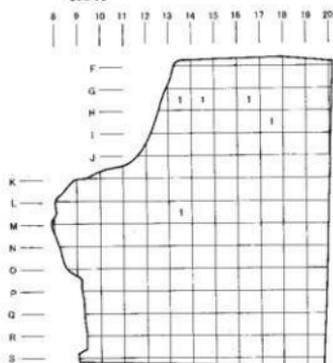


図IV-17 包含層出土の石器(7)

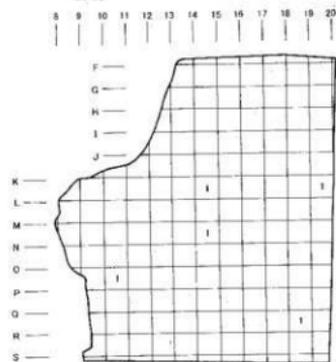
IV 包含層出土の遺物



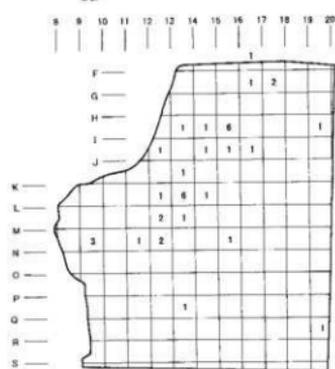
Uフレイク



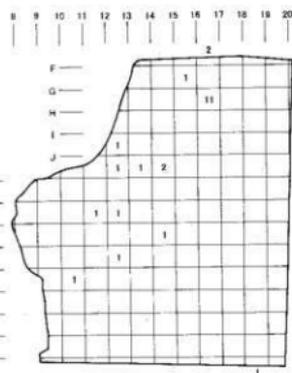
フレイク



石鏃



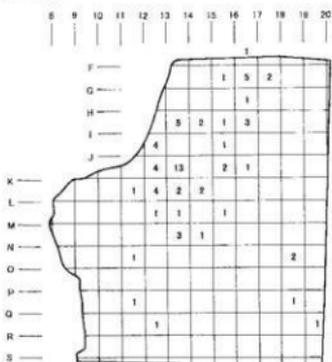
石鏃



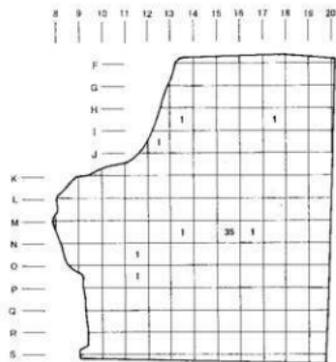
たたき石

たたき石

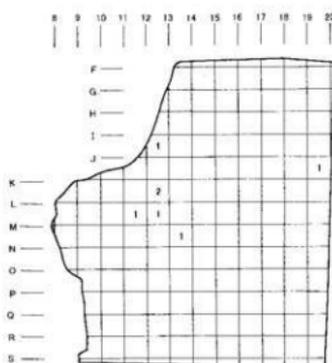
図IV-19 IV層出土石器 分布状況(2)



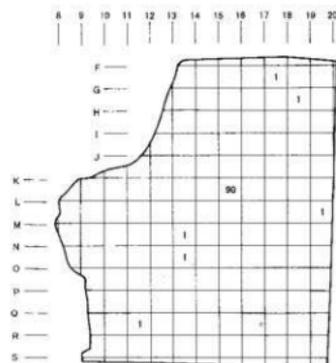
扁平打製石器



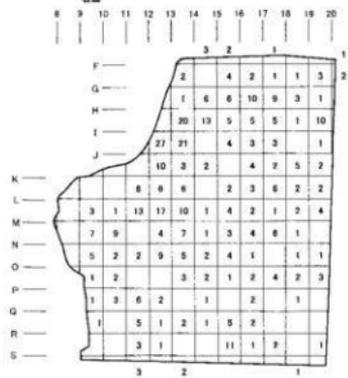
骨石



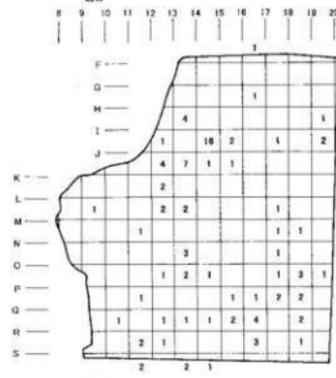
石品



網石



■



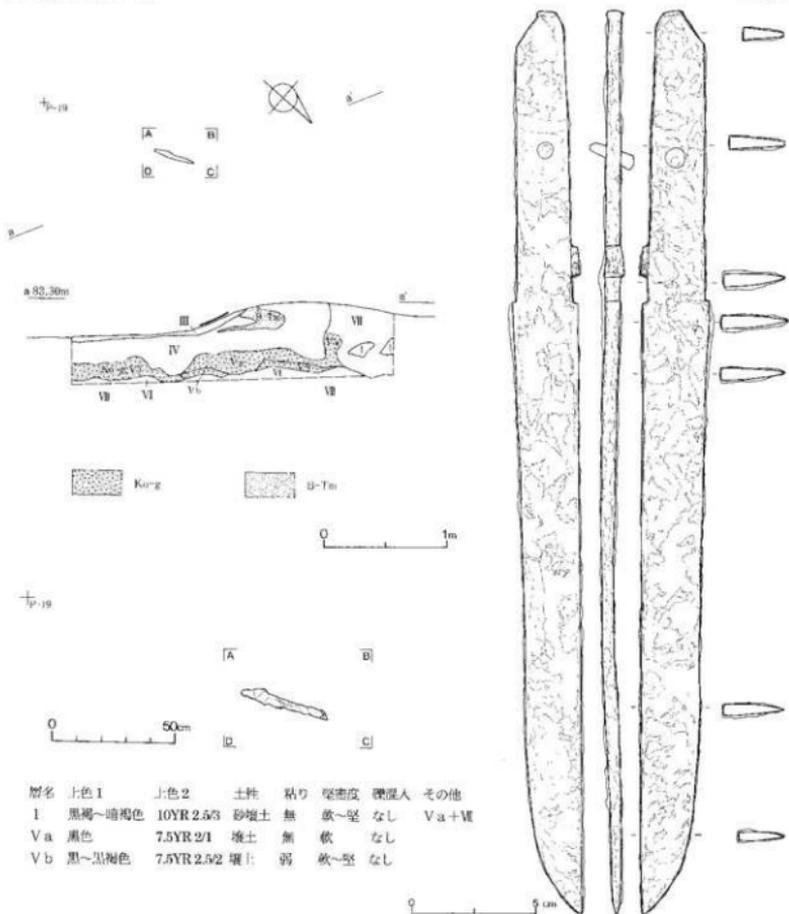
●

4 鉄製品 小刀

II層 (Ko-d) 除去後に風倒木痕の盛り上がりを確認した。風倒木痕を覆っていたIII層を除去中に鉄錆の塊が出土した。これを精査し遺物を確かめたところ小刀であることが確認された。切先を北側に向け1本の錆の塊状に風倒木痕の上から出土している。中まで腐食が進んでいたため、取り上げでは1~15cmの小破片に割れてしまった。II層直下で出土したことから江戸時代初期と考えられる。

小刀は刃長25cm、元幅2.7cm、茎11.8cm、全長36.8cmで反りのほとんどみられない平造の平棟である。切先に「ふくら」がつく。茎のはぼ中央に目釘穴があり、茎尾は「卒塔婆」の様に見えるが下側の破損した「栗尻」の可能性もある。区刃から1cmの茎上部に柄の木質部が残存する。図の左側の目釘は残存し斜めになっている。図の右側の目釘は推定復元である。刀身は腐食が進み中空に近い状態から復元している。

(谷島)



図IV-21 鉄製品 小刀

表1 遺構規模一覧

遺構名	位置	規模(m)			時期
		長	短	深さ	
P-1	Q, R-17	(0.82) × (0.56)	(0.77) × (0.39)	(0.29)	縄文時代中期
P-2	G-14	1.11 × 0.61	0.87 × 0.43	0.44	縄文時代中期前半
P-3	G-16	(1.57) × 1.24	0.82 × 0.54	0.4	縄文時代中期前半
P-4	M-13	0.72 × 0.47	0.65 × 0.41	0.52	縄文時代中期前半
P-5	F, G-14	(0.87) × (0.62)	(0.82) × (0.70)	0.34	縄文時代中期前半
P-6	F, G-15	2.53 × 2.24	2.26 × 1.88	0.5	縄文時代中期前半
P-7	G, H-15, 16	2.46 × 2.12	1.68 × 1.54	0.64	縄文時代中期前半

表2 遺構掲載遺物一覧

遺構名	図番号	図版番号	分類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	掲載(接合/破片単位)		同一個体破片		器形	掲載部位		
							遺構・調査区・層位	遺物番号()/点数	遺構・調査区・層位	遺物番号()/点数				
P-2	Ⅲ-1-1	7	Ⅲ a	26.1	32	10.8	P-2 覆土 G-13 IV	1 2	(42)/53 (2)/2			深鉢	復元個体	
P-3	Ⅲ-2-1	7	Ⅲ a				P-3 覆土 P-3 覆土	3 4	(1)/4 (2)/6			深鉢	口縁部突起	
	Ⅲ-2-2	7					P-3 覆土	3	(1)/4			深鉢	口縁部突起	
	Ⅲ-2-3	7					P-3 覆土	4	(2)/6	P-3 覆土	4	(3)/6	深鉢	胴部破片
P-6	Ⅲ-5-1	8	Ⅲ a				P-6 ① 焼土	3	(1)/1			深鉢	胴部破片	
P-7	Ⅲ-7-1a	8					P-7 覆土 P-7 覆土 P-7 覆土 P-7 覆土 P-7 覆土 G-15 IV	1 2 3 4 10 3	(1)/3 (1)/1 (1)/3 (2)/3 (1)/19 (1)/3	P-7 覆土 P-7 覆土 P-7 覆土 E-16 IV E-16 IV F-16 IV	3 4 10 1 6 4	(2)/3 (1)/3 (1)/19 (1)/74 (1)/11 (1)/72	深鉢	口縁部突起
	Ⅲ-7-1b	8	Ⅲ a				G-15 IV G-15 IV G-16 IV	1 3 2	(3)/41 (1)/6 (1)/53	F-17 IV F-17 IV G-15 IV	4 5 1	(1)/125 (5)/111 (22)/41	深鉢	口縁部突起
	Ⅲ-7-1c	8	Ⅲ a				G-15 IV	1	(3)/41	G-15 IV G-15 IV G-16 IV G-16 IV G-17 IV H-16 IV I-12 IV I-15 IV J-14 IV	2 3 2 6 1 3 1 2 5	(1)/3 (1)/6 (18)/53 (14)/99 (1)/2 (1)/45 (1)/34 (4)/61 (1)/9		口縁部
	Ⅲ-7-2	8	Ⅲ a				P-7 覆土	10	(1)/19	P-7 覆土	10	(7)/19	深鉢	口縁部突起
	Ⅲ-7-3a	8	Ⅲ a				P-7 覆土	1	(1)/3					口縁部
	Ⅲ-7-3b	8	Ⅲ a				P-7 覆土	10	(1)/19					底部

表3 遺構出土石器一覧

遺構名	図番号	図版番号	付属遺構名	層位	器種名	点数	素材	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備考
P-1	Ⅲ-1-1	7		覆土	磯	1	安山岩	9.9	6.0	2.7	225	Mg付着*
P-3	Ⅲ-2-4	7		覆土	スクレイパー	1	頁岩	6.5	4.3	1.4	32.9	
P-3	Ⅲ-2-5	7		覆土	フレイク	1	頁岩	4.7	2.8	1.2	7.9	
P-3	Ⅲ-2-6	7		壊底	台石	1	安山岩	26.8	12.5	9.3	5000	Mg付着?*
P-3	Ⅲ-3-7	7		壊底	台石	1	安山岩	37	33	12	15500	Mg付着?*
P-5	Ⅲ-4-1	7		覆土下	たたき石	1	安山岩	9.5	8.1	5.8	564	
P-6	Ⅲ-5-2	8	F1	焼土	フレイク	1	頁岩	1.8	2.2	0.3	0.6	
P-6	Ⅲ-5-3	8	F1	焼土	フレイク	1	頁岩	1.9	2.3	0.5	1.1	
P-6	Ⅲ-5-4	8		覆土	Uフレイク	1	頁岩	6.9	4.4	1.2	20.9	
P-6	Ⅲ-5-5	8		覆土上位	扁平打製石器	1	安山岩	14.9	12.3	3.9	679	下部部鋭歯状
P-7	Ⅲ-7-4	8		覆土	フレイク	1	頁岩	6.4	6.0	2.2	62.9	
P-7	Ⅲ-7-5	8		覆土	たたき石	1	安山岩	6.4	8.8	3.6	280	
P-7	Ⅲ-7-6	8		覆土	扁平打製石器	1	安山岩	16.0	8.5	1.9	419	下部部鋭打痕あり
P-7	Ⅲ-7-7	8		覆土	磯	1	安山岩	15.2	9.53	3.6	765	Mg付着?*
P-7	Ⅲ-7-8	8		覆土	台石	1	安山岩	26.5	25.4	5.8	5150	Mg付着?*

*蛍光X線分析による **実体顕微鏡でP-1の磯付着物と比較観察したものの

表4 包含層掲載土器一覧(復元土器)

図番号	図版 番号	分類	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	器数(集合)		同一個体破片		器形				
						調査区・層位	器物番号	()/点数	調査区・層位		器物番号	()/点数		
IV-1-1	10	II b	15.2	22.7	8.2	調査区・層位	Q-13 IV	1	(5) / 8	調査区・層位	Q-13 IV	2	(14) / 29	深鉢
							Q-13 IV	2	(13) / 29	調査区・層位	Q-13 IV	5	(10) / 23	
							Q-13 IV	4	(2) / 2	調査区・層位	P-13 IV	1	(3) / 4	
							Q-13 IV	5	(10) / 23					
IV-2-6	11	III a	(20.7)	26.4	9.8	調査区・層位	J-12 IV	1	(1) / 58	調査区・層位	K-12 IV	2	(1) / 49	深鉢
							J-12 IV	6	(1) / 18	調査区・層位	跡土	1	(1) / 1	
							J-12 IV	7	(1) / 13					
							J-13 IV	3	(1) / 74					
							K-12 風筒木	1	(1) / 18					
							K-12 IV	2	(6) / 19					
							K-12 風筒木	4	(28) / 31					
IV-2-7	13	III a	(11.6)	(13.4)	(6.7)	調査区・層位	K-12 IV	5	(24) / 40					深鉢
							K-12 IV	6	(1) / 1					
							跡土	6	(1) / 1					
							I-14 風筒木	2	(3) / 7					
							I-14 IV	4	(4) / 7					
							I-14 IV	5	(1) / 20					
							I-15 IV	2	(1) / 61					
IV-2-8	11	III a	(20.2)	29.6	8.3	調査区・層位	I-16 IV	5	(4) / 7					深鉢
							J-17 IV	1	(1) / 1					
							F-16 IV	1	(13) / 74	調査区・層位	F-16 IV	1	(7) / 74	
							F-16 IV	2	(5) / 31	調査区・層位	F-16 IV	2	(8) / 31	
IV-3-9	11	III a	22.5	(36.2)	(—)	調査区・層位	F-16 木の根	3	(7) / 9	調査区・層位	F-16 IV	6	(1) / 11	深鉢
							F-16 IV	6	(1) / 11	調査区・層位	F-15 IV	1	(1) / 2	
							F-16 木の根	1	(6) / 18	調査区・層位	F-15 IV	2	(2) / 146	
							F-16 IV	1	(6) / 72	調査区・層位	F-16 木の根	1	(1) / 18	
IV-3-10	12	III a	(23.5)	(28.8)	(—)	調査区・層位	H-13 風筒木	13	(37) / 40				深鉢	
							H-13 IV	7	(1) / 2					
							I-16 IV	2	(19) / 97	調査区・層位	I-14 IV	3		(1) / 33
IV-3-11	12	III a	(35.4)	(39.2)	(—)	調査区・層位	I-16 IV	4	(1) / 6	調査区・層位	I-16 IV	1	(1) / 3	深鉢
							I-16 IV	2	(1) / 6	調査区・層位	I-16 IV	2	(35) / 97	
							I-16 IV	4	(1) / 6	調査区・層位	I-16 IV	4	(4) / 6	
							I-16 IV	2	(1) / 6	調査区・層位	I-16 IV	2	(1) / 6	
IV-3-12	12	III a	(35.4)	(39.2)	(—)	調査区・層位	N-15 IV	1	(2) / 5	調査区・層位	N-15 風筒木	2	(1) / 9	深鉢
							N-15 IV	3	(1) / 2	調査区・層位	I-14 IV	3	(1) / 33	
							N-15 IV	4	(19) / 111	調査区・層位	I-14 IV	5	(1) / 20	
							N-15 IV	5	(21) / 149	調査区・層位	I-14 IV	6	(2) / 27	
							N-16 IV	2	(1) / 5	調査区・層位	I-15 IV	2	(2) / 61	
							N-18 IV	1	(2) / 3	調査区・層位	I-16 IV	2	(2) / 97	
										調査区・層位	I-17 IV	4	(2) / 19	
										調査区・層位	J-14 IV	1	(2) / 67	
										調査区・層位	J-14 III	5	(1) / 9	
										調査区・層位	M-16 IV	2	(2) / 3	
IV-4-12	12	III a	(20.2)	(32.0)	(—)	調査区・層位	N-15 IV	2	(2) / 5	調査区・層位	N-15 IV	1	(2) / 5	深鉢
							N-15 IV	2	(1) / 1	調査区・層位	N-15 IV	2	(2) / 5	
							N-15 IV	3	(5) / 31	調査区・層位	N-15 IV	2	(2) / 5	
							N-15 IV	4	(106) / 111	調査区・層位	N-15 IV	4	(10) / 13	
IV-3-13	13		(7.3)	(9.6)	(4.6)	調査区・層位	N-15 IV	5	(17) / 149	調査区・層位	N-15 IV	5	(17) / 149	深鉢
							N-15 IV	2	(1) / 5	調査区・層位	N-15 IV	2	(2) / 5	
							N-15 IV	2	(1) / 5	調査区・層位	N-16 IV	2	(2) / 5	
							N-18 IV	1	(2) / 3	調査区・層位	N-16 IV	2	(2) / 5	
IV-3-14	13	III a	(9.5)	(7.8)	(4.8)	調査区・層位	N-15 IV	2	(1) / 61	調査区・層位	I-15 IV	2	(2) / 61	深鉢
							I-15 IV	2	(1) / 61	調査区・層位	I-15 IV	4	(1) / 12	
							I-15 IV	4	(4) / 12	調査区・層位	I-16 IV	6	(2) / 3	
							I-15 IV	4	(4) / 12	調査区・層位	I-16 IV	6	(2) / 3	
IV-3-15	12	III a	(35.5)	(41.7)	(—)	調査区・層位	P-10 IV	1	(2) / 2	調査区・層位	Q-13 IV	1	(4) / 74	深鉢
							P-10 IV	2	(13) / 18	調査区・層位	R-12 IV	1	(8) / 35	
							Q-10 IV	2	(1) / 23	調査区・層位	Q-12 IV	3	(4) / 29	
							Q-11 IV	1	(3) / 3	調査区・層位	Q-13 IV	1	(4) / 74	
							Q-11 IV	2	(1) / 3	調査区・層位	Q-13 IV	1	(4) / 74	
							Q-12 IV	1	(5) / 25	調査区・層位	R-12 IV	1	(18) / 35	
							Q-12 IV	2	(8) / 12	調査区・層位	Q-12 IV	1	(1) / 25	
							Q-12 IV	3	(3) / 29	調査区・層位	Q-12 IV	2	(3) / 19	
							Q-13 IV	1	(7) / 74	調査区・層位	Q-12 IV	3	(6) / 29	
							R-13 IV	1	(2) / 2	調査区・層位	Q-12 IV	3	(10) / 29	
IV-3-16						調査区・層位	Q-13 IV	1	(2) / 2	調査区・層位	Q-13 IV	1	(7) / 74	深鉢
							P-10 IV	2	(3) / 18	調査区・層位	Q-13 IV	1	(7) / 74	
							Q-9 IV	2	(1) / 1	調査区・層位	Q-9 IV	2	(1) / 1	
							Q-10 IV	1	(6) / 6	調査区・層位	Q-10 IV	2	(14) / 23	
							Q-10 IV	2	(1) / 23	調査区・層位	Q-11 IV	2	(2) / 3	
							Q-11 IV	1	(13) / 25	調査区・層位	Q-12 IV	1	(1) / 25	
							Q-12 IV	2	(3) / 19	調査区・層位	Q-12 IV	3	(6) / 29	
							Q-12 IV	3	(1) / 12	調査区・層位	Q-13 IV	1	(45) / 74	
							Q-13 IV	1	(45) / 74	調査区・層位	Q-13 IV	3	(1) / 1	
							Q-13 IV	3	(1) / 1	調査区・層位	Q-13 IV	6	(1) / 1	
							Q-13 IV	6	(1) / 1	調査区・層位	Q-14 IV	1	(1) / 1	
							Q-14 IV	1	(1) / 1	調査区・層位	R-11 IV	1	(2) / 4	
							R-11 IV	3	(1) / 1	調査区・層位	R-11 IV	3	(1) / 1	
							R-12 IV	1	(5) / 35	調査区・層位	R-12 IV	1	(5) / 35	

本芽部1遺跡

図番号	図版 番号	分類	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	掲載(接合)		同一器体破片		器形
						調査区・層位 遺物番号	()/点数	調査区・層位 遺物番号	()/点数	
IV-9-59	18	Ⅲ a	(-)	(22.8)	12.5	G-16Ⅳ	1 (9)/15	F-14Ⅳ	4 (1)/25	深鉢
						G-16Ⅳ	2 (5)/53	G-16Ⅳ	1 (1)/15	
						G-16Ⅳ	4 (10)/70	G-16Ⅳ	2 (3)/33	
						G-16Ⅳ	6 (3)/99	G-16Ⅳ	3 (1)/ 2	
						H-16Ⅳ	3 (1)/45	G-16Ⅳ	4 (10)/70	
						H-17Ⅳ	2 (1)/ 1	G-16Ⅳ	6 (11)/99	
								G-16Ⅳ	9 (1)/ 1	
								G-16Ⅳ	10 (5)/ 8	
								G-17Ⅳ	2 (14)/28	
								H-16Ⅳ	3 (2)/45	
								J-17Ⅳ	2 (1)/ 1	
								G-16Ⅳ	4 (15)/70	
								G-16Ⅳ	4 (7)/70	
								G-17Ⅳ	2 (7)/28	
								G-16Ⅳ	3 (1)/ 2	
								G-16Ⅳ	4 (3)/70	
								G-16Ⅳ	4 (6)/70	
		G-16Ⅳ	6 (1)/99							
		G-16Ⅳ	10 (1)/ 8							
		P-3裏土	4 (1)/ 6							
		G-16Ⅳ	4 (7)/70							
		G-16木の根	5 (1)/ 1							
		F-17Ⅳ	5 (3)/11							
IV-9-65	18	Ⅲ a	11.2	(9.9)	(-)	Q-18Ⅳ	1 (3)/ 6	Q-18Ⅳ	1 (2)/ 6	壺
						Q-18Ⅳ	2 (11)/18	Q-18Ⅳ	2 (6)/18	
						R-18Ⅳ	1 (2)/ 2	S-18Ⅳ	1 (3)/ 5	
						S-17Ⅳ	1 (1)/ 4			
						S-18Ⅳ	1 (2)/ 5			
						S-19Ⅳ	1 (1)/ 2			

表6 包含層出土掲載石器一覧

図番号	図版番号	調査区	器種名	出土層位	石材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量g	備考
N-11-1	19	H13	石鐮	IV層	黒曜石	33	15	4	1.6	
N-11-2	19	H14	石鐮	IV層	頁岩	38	15	6.5	3.11	
N-11-3	19	P19	石鐮	IV層	黒曜石	31	18	5	2.58	
N-11-4	19	Q14	石鐮	IV層	黒曜石	32	21	4	2.18	
N-11-5	19	O15	石鐮	IV層	黒曜石	41	20	5	3.27	
N-11-6	19	H19	石鐮	IV層	黒曜石	38	16	4	1.65	
N-11-7	19	H19	石鐮	IV層	頁岩	35	12	4	1.43	
N-11-8	19	N13	石鐮	IV層	頁岩	41	15	7	2.95	
N-11-9	19	N13	石鐮	IV層	頁岩	42	13	6	2.75	
N-11-10	19	L11	石鐮	IV層	黒曜石	15	13	3	0.57	
N-11-11	19	H12	石錐	IV層	頁岩	72	44	8.6	18.67	
N-11-12	19	O14	つまみ付きナイフ	IV層	頁岩	96	35	6	23.81	
N-11-13	19	G17	つまみ付きナイフ	IV層	頁岩	84	41	7.2	25.21	
N-11-14	20	O10	つまみ付きナイフ	IV層	頁岩	77	18	9	15.22	
N-11-15	19	P13	つまみ付きナイフ	IV層	頁岩	100	34	7	26.86	
N-11-16	19	E18	つまみ付きナイフ	IV層	頁岩	67	30	11.14	19.47	
N-11-17	19	F15	つまみ付きナイフ	IV層	頁岩	73	26	9.2	18.49	
N-11-18	20	N18	つまみ付きナイフ	IV層	頁岩	78	34	8	20.17	
N-11-19	20	F16	つまみ付きナイフ	IV層	頁岩	80	21	6	13.99	
N-11-20	20	N15	つまみ付きナイフ	IV層	頁岩	78	25	6	18.81	
N-12-21	20	H15	つまみ付きナイフ	IV層	頁岩	85	17	5	8.0	
N-12-22	20	R13	つまみ付きナイフ	IV層	頁岩	61	23	6	7.59	
N-12-23	20	R13	つまみ付きナイフ	IV層	頁岩	60	22	3	4.54	
N-12-24	20	G14	つまみ付きナイフ	IV層	頁岩	46	64	9	19.02	
N-12-25	20	N13	スクレイパー	IV層	頁岩	49	22	8.32	9.32	
N-12-26	20	H17	スクレイパー	IV層	頁岩	61	16	8	11.09	
N-12-27	20	R15	スクレイパー	IV層	頁岩	84	30	10	26.42	
N-12-28	20	K12	スクレイパー	風倒木	頁岩	88	30	7.4	19.17	
N-12-29	21	J13	スクレイパー	風倒木	頁岩	77	32	12.3	23.33	
N-12-30	21	H13	スクレイパー	IV層	頁岩	70	41	15.1	43.15	
N-12-31	21	J15	スクレイパー	IV層	頁岩	79	43	11.8	44.62	
N-12-32	21	E16	スクレイパー	IV層	頁岩	92	34	6.6	24.5	
N-12-33	21	J12	スクレイパー	IV層	頁岩	81	38	10.9	43.77	
N-12-34	21	H13	スクレイパー	IV層	頁岩	65	38	13.1	30.85	
N-13-35	21	H14	スクレイパー	IV層	頁岩	70	46	9.6	27.11	
N-13-36	22	H13	スクレイパー	IV層	頁岩	67	40	10.6	29.81	
N-13-37	22	K12	スクレイパー	IV層	頁岩	62	38	11.5	24.23	
N-13-38	22	Q17	スクレイパー	IV層	頁岩	65	57	13.8	59.71	
N-13-39	22	H13	スクレイパー	IV層	頁岩	42	44	9	18.74	
N-13-40	22	Q15	スクレイパー	IV層	頁岩	44	58	8	18.7	
N-13-41	22	G14	スクレイパー	IV層	頁岩	73	38	13.8	38.14	
N-13-42	22	H2	スクレイパー	IV層	頁岩	78	37	7.9	29.32	
N-13-43	22	R16	スクレイパー	IV層	頁岩	88	38	16.5	36.24	
N-13-44	22	O16	スクレイパー	IV層	黒曜石	68	30	12.4	19.87	

本茅部1遺跡

図番号	図版番号	調査区	器種名	出土層位	石材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量g	備考
N-14-45	23	G15	Rフレイク	IV層	頁岩	49	40	7.7	14.37	
N-14-46	23	H12	Rフレイク	IV層	頁岩	52	35	5.6	11.07	
N-14-47	23	H13	Uフレイク	IV層	黒曜石	32	22	7	4.51	
N-14-48	23	I15	Uフレイク	IV層	頁岩	60	22	6	10.82	
N-14-49	23	L13	Uフレイク	IV層	頁岩	51	47	10.1	22.94	
N-14-50	23	G15	Uフレイク	IV層	頁岩	84	45	14.0	51.76	
N-14-51	23	G16	石核	IV層	頁岩	31	46	41	47.23	
N-14-52	23	K14	石斧	IV層	泥岩	122	54	28	250	
N-14-53	23	K19	石斧	IV層	泥岩	96	65	28.8	179.42	
N-14-54	23	Q18	石斧	IV層	泥岩	49	42	9.17	36.41	
N-14-55	23	O10	石斧	IV層	泥岩	24	39	15.1	16.19	
N-15-56	24	M11	たたき石	IV層	安山岩	10.5	6.7	5.75	610	
N-15-57	24	J12	たたき石	IV層	安山岩	10	14.95	3.7	820	
N-15-58	24	P13	たたき石	IV層	安山岩	8.6	9	2.4	230	
N-15-59	24	K13	たたき石	IV層	泥岩	14.9	13.1	5.2	1180	両面礫器
N-15-60	24	F15	すり石	IV層	安山岩	8.75	13.15	6.85	970	
N-15-61	24	L12	すり石	IV層	安山岩	8.6	11.45	7.35	950	
N-15-62	24	L12	すり石	IV層	安山岩	7.75	10.50	2.4	275	
N-15-63	24	O10	すり石	IV層	安山岩	11.2	9.45	5.5	830	
N-16-64	24	M13	扁平打製石器	IV層	安山岩	8.25	16.75	3.4	510	
N-16-65	24	M14	扁平打製石器	IV層	安山岩	8.75	15.20	3.9	540	
N-16-66	24	N11	扁平打製石器	IV層	安山岩	8.80	15.80	2.4	460	2点接合
N-16-66	24	Q12	扁平打製石器	IV層	安山岩					
N-16-67	24	F15	扁平打製石器	IV層	安山岩	10.70	13.25	3.4	510	
N-16-68	24	M13	扁平打製石器	IV層	安山岩	10.70	16.50	3.7	850	
N-16-69	24	F16	扁平打製石器	IV層	安山岩	11.35	14.90	3.75	650	
N-17-70	25	M13	石皿	IV層	安山岩	15.65	14.15	6.0	1740	
N-17-71	25	K12	石皿	IV層	安山岩	226	186	40	2780	3点接合
N-17-71	25	L11	石皿	IV層	安山岩					
N-17-71	25	L12	石皿	IV層	安山岩					
N-17-72	25	I12	石皿	IV層	安山岩	281	176	74	6000	
N-17-73	25	M15	台石	IV層	安山岩	387	158	119	10000	石棒関連?
N-17-74	25	K12	台石	風倒木	安山岩	359	147	120	9500	石棒関連?
N-17-75	25	L19	砥石	IV層	砂岩	414	92	91	2750	
N-17-76	25	N14	礫	IV層	安山岩	6.1	6.5	2.56	133	
N-17-77	25	O19	礫	IV層	安山岩	6.1	4.58	2.16	79.7	
N-17-78	25	N9	礫	IV層	安山岩	8.75	3.3	1.97	73	
N-17-80	25	N13	石製品	IV層	軽石	56	53	29	52.34	

V章 まとめ

本遺跡は細長い台地上に位置する。遺構・遺物の分布は周辺の遺跡の例と同様に台地縁辺部に多い。ただし、この細長い台地の反対側（八雲側）の崖に沿った部分は遺跡の範囲ではない。八雲側の地藏川が小さな尾根と濡れ沢を挟み、さらに北向きの斜面であることが要因としてあるようである。

検出された遺構はすべて土壌で7基が検出され、縄文時代中期前葉、土器分類でⅢ群A類の所産と考えられる。土壌から出土した土器は総てⅢ群A類であった。土壌の形態は長軸が約2.5mの大型のもの2基、長軸が約1.5mの中形のもの1基の他は小形の土壌である。

P-6は隅丸方形の土壌で墳底が2段になっているがほぼ平坦で、中央部に焼土が検出されていることから、ベンチ状の床を呈する小形の住居、または、仮小屋としての機能を考慮しなければならないようである。

P-2・3・7は土壌墓と考えられるもの、または、可能性の有るものである。小形の土壌のうちP-2はⅢ群A類の土器1個体が覆土の上半に斜めの状態で検出されているほか覆土の堆積状態から土壌墓の可能性もある。P-3は楕円形の土壌で墳底から2点の台石が検出されている。覆土に炭化物を含んでいる。P-7は楕円形の土壌で一端に張り出しがみられ、反対側の墳底に長軸に直交する柱穴状の小ピット2ヵ所が検出されている。覆土の中ほどに焼土が出土している。他の遺跡の例では楕円形の土壌の一端や両端に小ピットまたは張り出しのある場合や配列をなさない小ピットが墳底に幾つかある場合、土壌の外側に小ピットがある場合などがある。しかし、P-7のように片側に2ヵ所の小ピットが並ぶ類例は見つけられなかった。この張り出し部分や2ヵ所の小ピットを墓標と考えるか、または、上屋があったとみるか、今後の類例を待って判断したい。

これら検出された7基の土壌のうち、前述の土壌を含めた5基は北西側の標高の高い部分に分布している。

出土した遺物は土器のうち93%が縄文時代中期前葉のⅢ群A類が占める。円筒土器上層式～見晴町式が出土しており、石器もこの時期のものが大半であると考えられる。縄文時代早期はつまみ付きナイフが1点出土している。出土層位はKo-g火山灰を挟み他の時期と分離される。前期は円筒土器下層d式が少数出土している。晩期の大洞C₂式土器も出土しているが数量は極少ない。

石器は剥片石器に比べ礫石器の比率が多い。礫石器のうち、石皿と台石各1点が細かく割れた状態で検出されているが、フレイクの出土数が製品に比べ少ないことや剥片の集中出土が無く、石器未成品がほとんど無い。さらに、礫石器の原材料を海岸や川から持ち込み加工した痕跡は得られていない。これらのことから、調査地点では剥片石器や礫石器の再加工程度は行われているだろうが、石器を始める前から製作していないと考えられる。

Ⅱ層直下のⅢ層から出土した小刀について、若干付け加える。江戸時代初頭に東蝦夷地のこの辺りはアイヌ民族の支配地であった。茅部場所が成立するのは1640年噴火の駒ヶ岳d火山灰の堆積後であり、和人の入稼（出稼ぎ漁師）の数はまだ少なかったものと思われる。更に、アイヌ民族と和人との交易品に小刀が含まれていることが文献に記されている。これらのことから、出土した小刀はアイヌ民族のうちの一人が所持していたものと考えられる。また、出土状況から、柄と考えられる木質部が残存するにもかかわらず鞘の木質部が検出されなかったことを考え合わせると、この小刀は刀身が露出したまま風倒木痕の高まりに残された可能性が推定される。

石器等について、本遺跡は濁川カルデラ起源のテフラ上に立地していることから、自然状態では礫が含まれることが全くないにもかかわらず、礫石器や礫が多数出土している。出土した礫は800g以

上のものも18点有るが80%以上が300g未満のもので多量に出土している。これらの礎については、持ち込まれたものと考えられるため何らかの目的を想定しなければならないものと考えられる。

以上の遺構・遺物を考慮すると、調査地点の後背は緩斜面が広がることや遺構・遺物の分布から、本遺跡の主体部は崖に沿った山側に広がる可能性がある。(谷島)

引用参考文献

森町 1980『森町史』

阿部千春ほか 1993『八木A遺跡・ハマナス野遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団

大沼忠春 1986「道南の前期土器群の編年について(Ⅱ)」『北海道考古学』第22輯

小笠原忠久 1984b「北海道南西部における縄文時代前・中期の集落」『北海道の研究』1 考古編

久保泰 1977『森町 オニウシ遺跡発掘調査報告』森町教育委員会

熊野喜藏・八木光則 1974「茅部郡森町森川A遺跡出土の前期縄文式土器群」『北海道考古学』第10輯

児玉作左衛門ほか 1958『サイベ沢遺跡』市立函館博物館

板井清彦 1961「北海道山越郡落部遺跡」『日本考古学年報』12

北海道埋蔵文化財センター『調査年報15 平成14年度』

佐藤忠雄 1975『島崎遺跡』森町教育委員会

高橋正勝・小笠原忠久 1980「4 縄文文化前期・中期」『北海道考古学講座』

玉森佐太夫著 稲葉一郎解説1992『蝦夷地・樺太巡見日誌 入北記』北海道出版企画センター

地学団体研究会道南版 1989『地質あんない 道南の自然を歩く』北海道大学図書刊行会

千代 肇 ほか 1981『尾白内』森町教育委員会

長谷部言人 1927「円筒土器文化」『人類学雑誌』第42巻第1号

福田裕二 1995『八木A遺跡・ハマナス野遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団

福田裕二 1997『八木A遺跡・八木C遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団

藤田 登 1994『御幸町』森町教育委員会

本多 貢 1999『北海道 地名分類字典』北海道新聞社

松浦武四郎著 秋葉 實翻刻・編 1999『校訂 蝦夷日誌』北海道出版企画センター

松浦武四郎著 秋葉 實解説 1988『武四郎蝦夷地紀行』渡島日誌 巻の四』北海道出版企画センター

山田秀三 2000『北海道の地名』草風館

報 告 書 抄 録

ふりがな		もりまちはんかやべいちいせき						
書名		森町本茅部1遺跡						
巻次								
シリーズ名		財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号		第191集						
編著者名		谷島由貴・中山昭大・袖岡淳子						
編集機関		財団法人 北海道埋蔵文化財センター						
所在地		〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地-1 TEL011-386-3231						
発行年月日		西暦2003年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °		m ²	
ほんかやべいちいせき 本茅部1遺跡	ほっほりどうかやべくん 北海道茅部郡 もりまちはんかやべまち 森町字本茅部町 にひらなむらじょうしほか 274ほか	01345	B-15-23	42 08 24	140 29 53	20020507 ～20020715	2,200	高速道路 北海道縦貫 自動車道 (七飯～長 万部)建設 工事に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
本茅部1遺跡	遺物散布地	縄文時代前期 中期 晩期 近世	土壌 7基	縄文土器 4,096点 円筒土器下層式 円筒土器上層式 見晴町式 大洞C ₂ 式 石器 1,142点 石鏃・ドリル・つま み付きナイフ・スク レイパー・Rフレイ ク・Uフレイク・石 核・剥片・原石・石 斧・たたき石・すり 石・砥石・石皿・台 石・加工痕のある鏃 ・鏃剥片・鏃 土製品 1点 石製品 1点 鉄製品小刀 1点		墳底に杭痕が2ヶ所 ある土壌 土製品 石製品 江戸時代初頭の小刀		

（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第191集

森町

本茅部1遺跡

－北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書－

発行 平成15年3月31日

編集 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野幌685番地1

TEL 011-386-3231

URL <http://www.domaibun.or.jp>

印刷 三浦印刷株式会社

〒064-0809 札幌市中央区南9条西6丁目

TEL 011-511-6191